



19.20



源氏物語抄卷第十九

目錄

うつら

うら







庚申<sup>ケウシン</sup>夜<sup>ヨ</sup> 人<sup>ヒト</sup>殿<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>三<sup>ミ</sup>戸<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>大<sup>オホ</sup>倍<sup>バ</sup>者<sup>ノ</sup>庚申<sup>ケウシン</sup>之<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>志<sup>シ</sup>云<sup>ク</sup>

帝<sup>ミカド</sup>記<sup>キ</sup>人<sup>ヒト</sup>不<sup>レ</sup>遺<sup>ハ</sup>後<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>生<sup>シ</sup>籍<sup>シ</sup>庚申<sup>ケウシン</sup>夜<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>寢<sup>レ</sup>別<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>天<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>

神<sup>カミ</sup>渾<sup>コン</sup>詩<sup>シ</sup> 年<sup>トシ</sup>長<sup>ナガ</sup>每<sup>スベテ</sup>勞<sup>ラウ</sup>推<sup>オシ</sup>甲<sup>カウ</sup>子<sup>シ</sup>夜<sup>ヨ</sup>寒<sup>サムイ</sup>初<sup>ハジメ</sup>守<sup>モリ</sup>庚申<sup>ケウシン</sup>

らうくーきうう ひさう人達<sup>ヒトタチ</sup>の女<sup>メ</sup>と可<sup>カ</sup>成<sup>ナリ</sup>とらふや

い暇<sup>ヒマ</sup>の中<sup>ノ</sup>立<sup>タ</sup>れ云<sup>ク</sup>神<sup>カミ</sup>云<sup>ク</sup>

いひりて 福<sup>フク</sup>貴<sup>キ</sup>を合<sup>アヒ</sup>ておこらふと云<sup>ク</sup>ふすむ也

大<sup>オホ</sup>をの女<sup>メ</sup>お 大<sup>オホ</sup>おなりし人<sup>ヒト</sup>乃<sup>ノ</sup>子<sup>コ</sup> 大<sup>オホ</sup>おは程<sup>ほど</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>

えあぬまや 句<sup>ク</sup>通<sup>トウ</sup>

さう人と 福<sup>フク</sup>貴<sup>キ</sup>るれとも倍<sup>バ</sup>云<sup>ク</sup>の入<sup>イ</sup>を伊<sup>イ</sup>ひようーやなり

あのおこころりけて 女<sup>メ</sup>おひととてうさあひふ事<sup>コト</sup>

なとさせやーとあへや 老<sup>オシ</sup>つとていをつもての心<sup>ココロ</sup>は

人のてうと 買<sup>カ</sup>いよや

目<sup>メ</sup>とらうふ 小<sup>コ</sup>神<sup>カミ</sup>なり多<sup>タ</sup>中<sup>ナカ</sup>なり建<sup>タ</sup>も 調<sup>テウ</sup>度<sup>ド</sup>ぶとの中<sup>ナカ</sup>

より目をせーとらゆや又<sup>マタ</sup>もみーらひーてみ

既<sup>イ</sup>往<sup>ウ</sup>矣<sup>ヤ</sup>

内<sup>ウチ</sup>殿<sup>ノ</sup>場<sup>ノ</sup> 今<sup>イマ</sup>大<sup>オホ</sup>音<sup>ネ</sup>井<sup>イ</sup>乃<sup>ノ</sup>のりーにある 女<sup>メ</sup>樂<sup>ガク</sup>ぶとの所<sup>トコロ</sup>乃<sup>ノ</sup>

あはれ 和<sup>ワ</sup>漢<sup>カン</sup>同<sup>ドウ</sup>ふ也<sup>ヤ</sup>樂<sup>ガク</sup>人<sup>ヒト</sup>舞<sup>マユ</sup>娘<sup>ニョウ</sup>なりと云<sup>ク</sup>ふ

もやうり もやく殿<sup>ノ</sup>曲<sup>キョク</sup>を也

あはれと 婿<sup>ムコ</sup>老<sup>オシ</sup>と云<sup>ク</sup>娘<sup>メ</sup>は浮<sup>ウキ</sup>舟<sup>フネ</sup>の母<sup>ハハ</sup>の思<sup>オモ</sup>ひかこもて

腹<sup>ハラ</sup>立<sup>タ</sup>せり

ちりううひよきて 浮<sup>ウキ</sup>舟<sup>フネ</sup>のもくれ中<sup>ナカ</sup>にまうりし樂<sup>ガク</sup>の

はーいあうやーなり

おのひもいづる 浮舟乃又まされけりなり

あまのくの 女おとれ入れぬ子と思ひてまのまをぬけ

おのひもいづるとまを

見のま入い ひこちの守を具したるまおち二親まことや

まうてく 中まお入ひりてや

女まものまふたより 中まのまうとれうま舟乃まれ

方うあまうとまなり

うのまを 色や

まうとあてやうれらぬ あてとまの打とけくはみす

おま<sup>フナタ</sup>ま<sup>フナタ</sup>なり

つまかよま ぶつのかまそまのうしなれやまをま

おま<sup>フナタ</sup>ま<sup>フナタ</sup>なり 肉くまの思もよ前の想をも浮舟<sup>フナタ</sup>

たのくまもつまの女とれま<sup>タメ</sup>うん<sup>タメ</sup>物うとまをま

ふなうまかれ女をま<sup>タメ</sup>や

源少納言まのまのうま 皆ひこちのま乃か<sup>タメ</sup>娘<sup>タメ</sup>れ<sup>タメ</sup>智<sup>タメ</sup>の

まらく教<sup>タメ</sup>神<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>く<sup>タメ</sup>出<sup>タメ</sup>入<sup>タメ</sup>するま<sup>タメ</sup>女<sup>タメ</sup>お<sup>タメ</sup>い<sup>タメ</sup>か<sup>タメ</sup>あ<sup>タメ</sup>ら<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>て<sup>タメ</sup>や

あの人 中まや

かのにうま<sup>タメ</sup>あま<sup>タメ</sup>あ<sup>タメ</sup>ら<sup>タメ</sup>ひ<sup>タメ</sup>こ<sup>タメ</sup>ち<sup>タメ</sup>の<sup>タメ</sup>娘<sup>タメ</sup>の<sup>タメ</sup>中<sup>タメ</sup>な<sup>タメ</sup>ら<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>て<sup>タメ</sup>や

い<sup>タメ</sup>あ<sup>タメ</sup>や<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>め<sup>タメ</sup>ら<sup>タメ</sup>り<sup>タメ</sup> 偷<sup>タメ</sup>お<sup>タメ</sup>り<sup>タメ</sup>る<sup>タメ</sup>て<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>い<sup>タメ</sup>く<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>れ<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>て<sup>タメ</sup>や

う<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>乃<sup>タメ</sup>ゆ<sup>タメ</sup>を<sup>タメ</sup> う<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>を<sup>タメ</sup>教<sup>タメ</sup>て<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>詞<sup>タメ</sup>

な<sup>タメ</sup>ふ<sup>タメ</sup>う<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>守<sup>タメ</sup>の<sup>タメ</sup>申<sup>タメ</sup>ら<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>あ<sup>タメ</sup>ら<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>我<sup>タメ</sup>も<sup>タメ</sup>ま<sup>タメ</sup>の<sup>タメ</sup>い<sup>タメ</sup>や

ふ<sup>タメ</sup>の<sup>タメ</sup>り<sup>タメ</sup>乃<sup>タメ</sup>ゆ<sup>タメ</sup> 浮舟<sup>タメ</sup>れ<sup>タメ</sup>ん<sup>タメ</sup>て<sup>タメ</sup>や

肉乃涉く 肉儀へと也

てよさくくじし 無心死

あつおこと人と 別又乃は子れあふと不意となり

りこ乃むりれまふ 袖女乃子まききーを中法浮

船と云と偽て申立のひ人里さてりとのこと也

海とてこと まこれとなり

志のさん うれ船れくへと大くさんれともまの子

とし守の思ひ人ぬりうらうて我よままのせぬと也

めれまらそ 女子をりり

れ乃ふんく 不望する人あふたわふとなり

こ大細を敷 虫お又 家のこと虫お又へ目のことや家礼し

いふとあつ

まやうあく かめん詞

むはなて むはなて

あのがものむきよ お達してやういふこと人里

とれ人ハうさも縁をたれま又母打と也

うれしく思 申立心 何りし懐かしくもあもれと也

かこりたことんう ささやひんちのゆりささくさふさ

やめ何 美実ゆ子をと思ふとらへん

守よん泰がとせきしてさいあつとのむといなり

人のし申立の虫おとがむらなり

あてびても 実なりと云心也

又ころり 比比の徳をたやうる位とがり

かき人 卒一人此とこより賜うるとる

ごたび 比度の養人

くらみのごとて 勅定と也 母乃作事よ云り

独らうても回心

あそび ぬおとさうこの勅言

ひまーしあまは 回

たとひあへずして 命とへうがもあり ぬおとさう

のなりへしつとなく成共とる

たう時乃みり 一 ぬみのとめよけと化ゆる

らむわの娘れためも自他幸あれしむす

りくのようしん 通うらんも不云不及難と也

いもや 中一の妹も不云也

かくらう うれくと云む也 續芳

出法記 權大綱言云年 獻續芳申官と云

仍不限大員 禮物をやして官位よめられむ

の婿をさし 小れこのため中もまされむ

中乃このし 浮舟も兄弟の中れりち乃あのみと也

月比を又なく 媒の討ぬしと云り

目とふりもで 浮舟へと云日と也 ぬいあて又あ

事と云筆芳也

又志らむ 浮舟れ名の事 実さ八文の位子と云らん





まうをまゝ人知れざりし一舟をたもてくれし一舟に  
と母を海へくわりの舟を

女ハまゝて 守るゝのち中互のりひたしめりてふあひひ  
焼女まやとけりなり

いふもあも あえし一舟中一舟のやうふむし  
よふ短うする舟や ねい後いし 浮舟れ位西方お  
てもはしき入くる船不意一舟面白 以後い可致  
うまかり ものしりあはしし一舟

ひまづん 船相 りのむをめのひまづん人どうふもひ  
うらんとせしと舟り

めくたうらんはむをめ 浮舟れもるれ舟女よふし

世をせぬまゝ一舟相と訂とさんと老あれしと舟人全

ら 一舟も あさかりているりいよ一舟もあぬ舟の我  
女をい思ふよりたちを 守か船休やすき外を海へ放流  
せんまのやきしと舟也

もりし 舟りし 舟を海へ放流とや一舟と舟  
おろしと 舟也

このゆつと うさも舟のゆめり

あひくたしう あひてくろニヒ似合たる事せられを我  
たふらふ舟一舟也

はなつとせし 女おとのお達の浮舟れ幸うしてあ  
らんとはなり

et. m. m. p. 14

ゆくむらり物くいまー 白檜ぬるもくさるりなり  
とハミギーいさ

おれお不殿 夕也 あせらき ぬ梅

あつひ 四あうふふうせぬへ里意れおらきとハコ

おひー人せ

いひひひひひひひひ 女ふおと人あつあきけてきり

うくとかり

こま 八文

さ海あーさ 帝陸守

日のかまけりてき 女かとの敷かしてさき山のあつひ

らくくーさふりても曲あふまーささ

けいりーうさてくれさるのこを 句 事 備ハコあま

と別射も不成あつひのこ浮船れたあささいしおくと

守さてけくろるり 浮舟のここと今あま

あさくことささる沖也

けいりーうさてくれさるのこを 句 事 備あま  
源藏右上天皇之女也母當麻氏天皇孫當麻未得其  
人右政大臣二位源朝臣忠仁公之弱冠之時  
天皇悅其同操純倫殊初嫁之信和右后其長女之  
潔素姫淳右后之母之性純慈慧頗可賞歎

守の詞母けいりてあまの歌

ゆとそめれと二人くけくろるり

こうらきのはと 髪乃みーのまら

あてけくろるり けの守の詞 ことさきあう丸舟へと

れもささるり ことあまのあおと我もくくりハコ

よもたるとさるか振つてれーさあまのささる

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あはれおや敷 夕也 あせちき ぬ梅

あつらふお 中しつらうれいとも 中しつらうれいとも  
はうしつらうれいとも

うのこころゆるて お方中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

ちりかこしとけり

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中しつらうれいとも

あつらふお 中いさうれいも 中いさうれいも  
はういさうれい

うのこゆるうて お方中いさうれい乃文言

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

ちりかてんとなり

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あつらふお いさうれいあつらふ

あまのついで

しらぬま 中をうまも縁の母

こよのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま

あまのついでま 浮舟乃母乃たぬも中をのこ

あまのついでま

あまのついでま

あまのついでま

あまのついでま

りいれあひま 浮船れしうりさ不世のこひあひま  
望たれとひ人望

の志望 うまは必お志よりとなり

とのゆそ 句

山少とより 幸ハ不及是也ふとより人のあはつり

あつしんもつりとなり

申く世のつねよ 母志を不覚又文をせれけしひされ

も大のこそ也

あはと程 けしあめともあつ波程と姉志乃別悲まそ也

大お敬そ のこの小方詞

せのましえ 大志おしーままこそ二文へーもせりれたか

りーとむり

いよやあうの相 白もうと也 我もた志うーおひんあへ

大志もや二めとよりうーまのひんあへ

ののこりー 小方詞

一そ也 禁乃一申申入ふむうーむまのみにあへ

れとそみり

けふ心くれーも 申詞

人よあをけくたぐ 申は我のしむり

むけふらの 出家きよとの送言きー<sup>オコシ</sup>かたふと也

うり鳩乃 陸奥守をトーし町乃すもとりん

極端の前よりうへうへ浮鳩のうまて思ひ入る母をたふ



乞を異洲の所

まの身 世中 乞者より乞うるより我力一れため  
すゝ打建るの

修くも山の さそひつちの守りて <sup>イキ</sup> 頼後と控へるも  
おくあまら丸 志の山まを入ても云谷すらん所入りの  
つゝとたり

よのゝぬあや一れ 守れ子たなと我とりこのことさる  
方と念のき 水方と感へるさちしをゆりとも

身とちつと花受領の書よりうらとぞ

ぬと云ひるも  
やのうみみして 女房前のごとがりの水方お短一也  
れう一あともみしをばりる 美<sup>シキ</sup>なる所也

まゝはよみし 浮舟れおのきよりとも <sup>い</sup> 配り一と  
と也 思<sup>い</sup>来り一入せりてなる也

内より 禁中より退<sup>キ</sup>出  
文より乃 中文よ文運の涉<sup>キ</sup>なりとたり  
あたいしと 水不奉さ中一毛乃涉めやまのりく所くと  
おひひてとたり

おしゝたおあり 双地

つひ神しことのすうるれおらと甘のりしと  
なと 名流なりつひとてこのと意の太志れゆつこの事  
おのくの妙ひて中君おとく又とくめあつと思ふや  
なまおまひる <sup>ヒナ</sup> ねまよ <sup>ヒナ</sup> 大志の <sup>ヒナ</sup> 思へしに中へも控へ

乞之異洲名所

道の男 世中 老若よりわさうらつとらん我力一れため  
スー打連るの

ほくも山の さそひつちの守りて イキ 頼後と イ 頼一と イ 頼二と  
おくあまら先 志の山まをへても云谷すらん所入りの  
コトとなり

よの〜ぬあや一れ 守れ子たなと我とりこめこさる  
カと海門を 水方と版つさちしをゆりこせ

中姓とあぬといや〜ぬとさむら〜也

りのうふみこて 女房前のごとがりの水方小短一也  
れ〜あ〜もみこをばり〜 イキ 美びる所也

こ〜ほよみも 浮舟れおのりき〜ら〜とも イ 配り〜と イ 所

と也 見え〜入〜てなる也

内より 禁中より イ 退出

文〜らり 中文よ文運の滞りなり〜となり

あは〜し〜 所不奉さ中〜毛乃抄めやまの〜とありと

おひひてとなり

お〜たおあり 双地

つひ神〜このすうされ〜おら〜のら〜と〜也

なと 名跡なりつひとて〜と意の太息れゆつこの事

おの〜の抄ひて中君お〜人又〜と〜あり〜と思ふ也

名法おま〜 イ ねまよ イ 実大息の イ 思〜と〜に中〜も イ 控〜

兄弟と心の中をいふ中に見えぬよとせ

何うもいふ事せ せむしとみしうにいふとみうと非

たをきすも盛るしきうのれ みえぬとせむしとけし

くをけりぬや 浮舟をたぬるの形代みして甚と思ひ

けりぬとせむしと

らてやうの中を 甚の山甲れかおみとせむしと中を

乃佛とけしとのぬる事者おのきうなり 甚詞

うふ舟れさうらふとせむしと

けしひとて せむしと海をたぬるしうけりしとせ

何くいれくかたの中にもあまふとせむしと

しうふ舟るしとせむしと

ひいしむや ひいしむしとせむしと好えむしとせ

ゆいしや 中をれの事詞のありまりの事とても後く

ぬへしとせむしと船へけりしとせむしと

か一人の身 おてぬる人形也 拵 ツルキカク 人形 ヒキモノ

祭礼乃具 婦 メノ 見れ意 ワシタキ とせむしと度とせむしと心そ人形

とせむしとふよわり

みうとせむしとせむしと中をてぬるしとせむしと

向 カユ 後かす物るれしとせむしと浮舟とせむしと

年 トシ かなし

ひくて 大ぬきのひやとせむしとふよわりとせむしと

せむしとの海とせむしと

所并ふ 大ぬきと名よいうたて世中のわくとおひら  
きとありとりのものぞ

つるうらふらぎとゆらぎと モナロシ 勿論を也

水のめし 世中を親して うれん死もくうるま

かよとわがれと中をれよんとの事よとりのふんを

念の道也

一 穢と也

ありのあいよとたありのあといとるたよとよ  
多ておのあよふれとまうとといはふし一か  
とのへたよとの中のあれおののうよこの人  
かかると思はふとつるのあとのあえ  
まをぬも人うかきよと

いこうぬくしき 甚を志はうけくしきとかり

先乃をゆくりふ メナト 乳母の打つ音よふかぬくとまし

と思ひよとらとと分みてのてら

とびをりたう 東國の人とりり

天川と 羨望を 男母

ふらぬ 日記もらうまてハうりけしよ木柱うをむり

まーちゆらととねもへ

あく ちりくかたや

あのかうりきと モシ 人々を薬王并が事一果然後

サシ 徳善者乞人規を ニ 中寄 ニ 善善花身 ヲ 毛孔 中 出 半 臥 拵

カシ 檀香 ヲ 洗 華 經

こづきんたん 権記 行成の 長徳元年十月九日

山階寺 孫 身 年 臥 拵 ホ

所并ふ 大ぬきとあまうらたてきけのわくとおひら  
きこありとりのものよ

つるうらうらきこひのまを モナロシ 勿論を也

水のあま 世中と親 して うれんれもころるま

あまのつがれと申されまんとの事うらうらひを

かきのこひ

ふてゆ つてま ころう 涙 せ

けいたちけるあまうらうの母へうたなきを

こぬ極う あやせ されうとなり

うらうぬく ま 甚を志はうけく ま となり

乳乃をゆくりうふ 乳母 の打つ音うらうかぬへ ま し

を思ひ ま ころう ま と ま み ま の ま ころ

まびせりたう 東國 人とり

天川 彦 男

うらぬ ま 死もころ ま して ま け ま へ ま 本 ま 握 ま う ま せ

ま ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち

あ ま く ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち

あ ま の ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち

権 ま 者 ま 乞 ま 人 ま 規 ま 在 ま の ま 中 ま 考 ま 出 ま 善 ま 道 ま 花 ま 身 ま 毛 ま 孔 ま 中 ま 出 ま 半 ま 臥 ま 梅

檀 ま 香 ま 法 ま 華 ま 燈

こ ま づ ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち ま ち

山 ま 階 ま 寺 ま 孫 ま 身 ま 年 ま 臥 ま 梅 ま 檀 ま 木



ものう けいけい... 殿といふ事ありと... 能成

のうめたるは

あう... ことわぬの事

重なる ひら敷き他... ことわり

るまゝきたて... おもひ... ことわり

まゝきたて... ことわり

カニ

ゆする花沐浴する... 九月 花 九月... 十月... 髪あう...

撰りや

九月 月 秋 月... ことわり

えゆふあり... かのひら... ことわり

ことわり... 自... ことわり

大... ことわり

の... ことわり

よ... ことわり

ま... ことわり

れ... ことわり

し... ことわり

屏... ことわり

お... ことわり

あ... ことわり

み... ことわり

の... ことわり

よのう けつしん<sup>ケツシン</sup>の殿といふ事ありと能成  
乃ちつめたる也

あつしん<sup>アツシン</sup>の事

重がひ じしん<sup>ジシン</sup>殿を絶する事あり

るまふきたてし おもふんとまじりていふ事あり

よふとたてしおひする事

ゆする 變あらふ事也

きふを 變あらふ日を撰<sup>ヒラム</sup>る也

九十月 日 祓禊日といふ事あり

えゆるふあり かのむらやるといふ事あり

これゆらつふ 自<sup>コト</sup>拉れぬ<sup>カホ</sup>入<sup>カホ</sup>親<sup>カホ</sup>をかく<sup>カホ</sup>入<sup>カホ</sup>る

大おろや かなぬといふ事あり

ゆ<sup>ナレ</sup>おろやなる うちけきるれを好<sup>ナレ</sup>ま<sup>ナレ</sup>る

よて討<sup>ナレ</sup>ま<sup>ナレ</sup>と也

まを分 ゆするらと中<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>乃<sup>ナレ</sup>は<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>た<sup>ナレ</sup>て<sup>ナレ</sup>火<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>た<sup>ナレ</sup>る

れま<sup>ナレ</sup>入<sup>ナレ</sup>ぬ 中<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>れ<sup>ナレ</sup>お<sup>ナレ</sup>ま<sup>ナレ</sup>入<sup>ナレ</sup>る

し 成<sup>ナレ</sup>ら<sup>ナレ</sup>る<sup>ナレ</sup>事<sup>ナレ</sup>あり

屏<sup>ナレ</sup>風<sup>ナレ</sup> 苔<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>袋<sup>ナレ</sup>入<sup>ナレ</sup>る

お<sup>ナレ</sup>遊<sup>ナレ</sup>と<sup>ナレ</sup> 中<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>れ<sup>ナレ</sup>この<sup>ナレ</sup>事<sup>ナレ</sup> 後<sup>ナレ</sup>は<sup>ナレ</sup>浮<sup>ナレ</sup>船<sup>ナレ</sup>れ<sup>ナレ</sup>る

わけ<sup>ナレ</sup>の<sup>ナレ</sup>別<sup>ナレ</sup>人<sup>ナレ</sup>也

みの<sup>ナレ</sup>こ<sup>ナレ</sup>—<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>ら<sup>ナレ</sup>—<sup>ナレ</sup>と<sup>ナレ</sup> あり<sup>ナレ</sup>と<sup>ナレ</sup>集<sup>ナレ</sup>る<sup>ナレ</sup>事<sup>ナレ</sup>あり

の<sup>ナレ</sup>こ<sup>ナレ</sup>—<sup>ナレ</sup>を<sup>ナレ</sup>ら<sup>ナレ</sup>—<sup>ナレ</sup>と<sup>ナレ</sup> あり<sup>ナレ</sup>と<sup>ナレ</sup>集<sup>ナレ</sup>る<sup>ナレ</sup>事<sup>ナレ</sup>あり





うじうじ

てなつませ つと守<sup>三</sup>つと白れ先乃やのてなつませ  
あう平人おとの様よあさう不似合とり入

の殿よりハ ひこち殿也  
海らうと ぬお事

あも人あへ 下くまてりさうひとを能うと也  
この四事ゆら ぬおあひさうひあうと乳母<sup>乳母</sup>は舟よく

ひへ里及ま心は浮舟よ母付て地おしつうと也  
あさうと うえあは

れりくつせう 又なきをかささうあうされとま  
あはさ心あふお思はるしそとなり

もうせの親者 ぶつうとを利せありうとあ母と不<sup>不</sup>厭<sup>厭</sup>也

佛并もる縁<sup>縁</sup>を縁<sup>縁</sup>若<sup>若</sup>あうし

あつゑ づのゑ

肉ちのゑ 西れしこより禁中へちのゑ方也

うつし馬 縁<sup>縁</sup>の鞆<sup>鞆</sup>をとりへ

ゆすうの名跡 洗<sup>洗</sup>髪<sup>髪</sup>後<sup>後</sup>首<sup>首</sup>風<sup>風</sup>後<sup>後</sup>醫<sup>醫</sup>書<sup>書</sup>体

自まうらま 聯

あははうらうらく あ人うらうらあひ心とつう中  
あまあひてつとあう浮舟れ心とああ

大お乃 中へ

あまあひてつとあうの心と中れ思はる

おもてみぢしん 一室曲るしとてえゆるし又うと  
し事ども根<sup>タニ</sup>つむとせ

あの君 意

あひなく 白乃不<sup>フコ</sup>意の浮舟れ思うかなうんとせ

目の力の 申意今の無子押さるるま国とみんとせ

一カ<sup>カ</sup>はうと又もふれすてあゆとせり

このふく死 意の中へれ好まけんとせ

こまこのあうし 申意乃こへりてせ

はめわうふ 白の事と美<sup>ミ</sup>実ううと糸<sup>イト</sup>さうとせ

とせきふとせり

とまこのよとせ 浮舟へ向<sup>ムカ</sup>せはつぬ入るるあへんとせ

ねーあう

うへと 申意 城

あうとせり 心遊ぬぬ入るるあへんとせ

とせきふとせり

相<sup>アヒ</sup>つとせ 申乃浮舟へりり

おのひとせ 姉<sup>イモ</sup>意よとせ 似<sup>ニ</sup>つとせ

君の浮心ゆ 姉乃ととくお思ひせりい思ふんとせり

つとせきふとせり

つとせきふとせり 八とせ

らみうお海まやせ 申君のうた舟といみく思ふた

白の心うつりさうひなのぬ入るるあへんとせ

あひてもあたまぬ 外程をばくしてめめく夏の夜をあひて

もあはぬむらうすれ

ちううそふさ 肉へ糸結ふ面をわんひびひりて

ららわこしらう 別前打とまりて不意と也

らうーと 中一也

袖小くさき あて人も<sup>きつ</sup>あひ也

本意

ハ聖抗の姓は別前<sup>チカキ</sup>を愚<sup>グチ</sup>癡

もまぐくのこけけう又むりて

くれとも又ようぬ守れ<sup>サマ</sup>かど

ふうらうふと<sup>キタ</sup>根程う浮舟と

袖小くさき 花ういさうういなるもといいうらう上福も  
いらむい  
いさうのゆん花いさうのさう回のてんわううとま  
むあうてんとまをいさうのいさうのちう時よか  
ころとま常儀のわのさうう舟の志といさうは  
あまうてりうころいひ人とまあれいさうあつげ  
あうてんわうう思てらぬそわころわうあれ  
ううねあまういよのむいあまをのれといさう  
よまらわういさういさうあまといさう

いばらさうういさういさういさういさうい

い思ハぬいさういさういさうい

り中詞

思を母さわのむ乃思<sup>ヨシ</sup>いあひ

はうけくを花いさうのほけとまのゆもあま  
よまらわういさういさういさういさういさうい  
まうけとまをぬいさういさういさういさうい  
うういさうて甲の志よらあまあまあまあま  
あまのあまをほけけいさういさういさういさうい  
はあまと母志のさういさういさういさういさうい  
つういさういさういさういさういさうい  
みさういさういさういさういさういさうい  
うういさういさういさういさういさうい

に中をけおねいさういさうい

みさういさう 不意<sup>フシ</sup>小山<sup>コヤマ</sup>結と也

布<sup>ヌ</sup>あうすたらり 白れあ好まを伏也

指<sup>ササ</sup>結てをむひさういさういさういさうい

ゆあー 八丈のゆ子かよあういさういさういさうい

みさういさう 又中乃ゆ心なるたけいさういさうい

あひまほたぬ 外程をなくしてのむら夏のあひま  
よあそぬむらうすれ

うらうそふま 由へ泰路の西のまゝひらり〜也

ららむ〜ら〜 別程なくしてを不意と也

らう〜と 中へ

抱ふくとき あそ人も<sup>キツ</sup>あそ也

夕つ〜の あれ〜母と<sup>キツ</sup>あそ也

ら〜ちのゆらん ら〜ちハ<sup>ヤコ</sup>聖牝の姓は別<sup>ナク</sup>畜<sup>チ</sup>とを恩<sup>チ</sup>慶

な抱〜し〜ら〜むも〜の〜な〜又〜

ま死ま〜い〜も〜又〜ゆ〜ぬ守れ<sup>キツ</sup>也と

そのよう〜あ〜の〜か〜ひ〜う〜ら〜ゆ〜と<sup>キツ</sup>恨<sup>チ</sup>程〜浮舟と

あな〜と〜ま〜む〜也 くららさう〜と〜と〜あ〜い〜海

のきと〜り〜て〜みるなり

海〜ひ〜う〜ふ〜い〜あ〜ら〜う〜思〜ハ〜さ〜い〜い〜い〜

さ〜り〜か〜ゆ〜り〜と〜あ〜ら〜う〜り〜中<sup>キツ</sup>也

いれどお〜 自文の不意と母さちの心乃思<sup>キツ</sup>〜あ〜い

以中を行きね海とあ〜也

みさ〜ら〜の 不<sup>キツ</sup>愛<sup>キツ</sup>小山<sup>キツ</sup>路<sup>キツ</sup>と〜也

希〜あ〜す〜た〜ら〜 白れは好ま〜を<sup>キツ</sup>れ<sup>キツ</sup>也

抱<sup>キツ</sup>持<sup>キツ</sup>て〜を〜ひ〜し〜ひ〜す〜ら〜ま〜く〜不<sup>キツ</sup>意<sup>キツ</sup>と〜也

ゆあ〜 八丈のゆ子か〜あ〜ら〜い〜と〜い〜と〜い〜

みさ〜し〜 又中乃ゆ心とをた〜ら〜る〜と〜も〜あ〜は〜中



まよれくま 八葉乃やまなむとむとりて一物とてなり  
右文 八葉乃やまなむとむとりて一物とてなり  
あひりてあひたり

あひあう あらまなく又あや一まふりくよむ通れ  
目のか人き 浮舟の母れむたしむつまふりてあひり  
遊り一浮舟とやりあひたりし

わづおおせん ぬおや ひとこし 一 破乾 ヒツシテ 懸候とや  
その人れありき由 れとらゆきり必あがりて同候しり生  
せりてし心 スダバツカ 引あなる物とや

拾の篇 三葉書

あやにくだり ぬあれり

母まがゆや ツカヤ 疑のやれ うまぬのこくハ卑がしむ

人なるの チシ 貴州の時をもつてひくきて母免と成おなら  
て又とこそとをいきよあひひりり一まああり

ひこあらふさ 浮舟 世中一みあしぬふもして一うれ  
年一ありみしう 形即くせん 室を又系中るれを山陰  
おりのつひ心や

至世よりす 母也す 我方を山君がと一してもうとあひり  
と可然やし。見え一度とや

なとく一え 自地思心とあまありくくまあひり  
まん人の用むりや 伏若の筆方や

まあくるてりくも シシ 寝敷と地改らむ

山甲のたて 八ヶ岳のふもとにありては 地味入の  
しんくぬき 其心も

小室 三條也

ろとわくして 宇治へとや

ふりうやき 井出東の連とや

阿ふれひり 亦事不云 河より空也上人亦事

清水親善<sup>ムササ</sup>より月輪寺を志山まゝ念佛<sup>ニキヤ</sup>執りて

毛坂海中へゆく法人は念仏弘<sup>ニキヤ</sup>と云く月輪寺を補陀

澄<sup>ト</sup>回山涌出と也 花より 柿下<sup>ニキヤ</sup>紀傳の海を志山十

二年山と不出<sup>ニキヤ</sup>縁帝<sup>ニキヤ</sup>と云ありて内<sup>ニキヤ</sup>僧官

十禪師<sup>ニキヤ</sup>補とれとるを引ぬへと

ある子不<sup>ニキヤ</sup>及<sup>ニキヤ</sup>去<sup>ニキヤ</sup> 河を用し

ひとわくも 存<sup>ニキヤ</sup>生<sup>ニキヤ</sup>無<sup>ニキヤ</sup>色<sup>ニキヤ</sup>想<sup>ニキヤ</sup>行<sup>ニキヤ</sup>度<sup>ニキヤ</sup> 人<sup>ニキヤ</sup>は<sup>ニキヤ</sup>ま<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>ふ<sup>ニキヤ</sup>る<sup>ニキヤ</sup>ん<sup>ニキヤ</sup>

何し<sup>ニキヤ</sup>か<sup>ニキヤ</sup>も<sup>ニキヤ</sup>な<sup>ニキヤ</sup>く<sup>ニキヤ</sup>れ<sup>ニキヤ</sup>指<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>ま<sup>ニキヤ</sup>を<sup>ニキヤ</sup>わ<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>わ<sup>ニキヤ</sup>ん<sup>ニキヤ</sup>

きこみく かま<sup>ニキヤ</sup>い<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>

あさつて<sup>ニキヤ</sup>け<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup> 車<sup>ニキヤ</sup>速<sup>ニキヤ</sup>よ<sup>ニキヤ</sup>ぬ<sup>ニキヤ</sup>ん<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>る<sup>ニキヤ</sup>

ひのわき 口<sup>ニキヤ</sup>た<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>を<sup>ニキヤ</sup>な<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>あ<sup>ニキヤ</sup>る<sup>ニキヤ</sup>物<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>也<sup>ニキヤ</sup>

あふ<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>く ね<sup>ニキヤ</sup>く<sup>ニキヤ</sup>ぬ<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>ま<sup>ニキヤ</sup>ゆ<sup>ニキヤ</sup>心<sup>ニキヤ</sup>

ちり<sup>ニキヤ</sup>き<sup>ニキヤ</sup>程<sup>ニキヤ</sup>よ<sup>ニキヤ</sup>う<sup>ニキヤ</sup> 三<sup>ニキヤ</sup>条<sup>ニキヤ</sup>橋<sup>ニキヤ</sup>若<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>甚<sup>ニキヤ</sup>ら<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>の<sup>ニキヤ</sup>記<sup>ニキヤ</sup>書<sup>ニキヤ</sup>ち<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>程<sup>ニキヤ</sup>よ<sup>ニキヤ</sup>ゆ<sup>ニキヤ</sup>文<sup>ニキヤ</sup>

と<sup>ニキヤ</sup>忍<sup>ニキヤ</sup>せ<sup>ニキヤ</sup>ぬ<sup>ニキヤ</sup>人<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>也<sup>ニキヤ</sup>

かり<sup>ニキヤ</sup>も<sup>ニキヤ</sup>る<sup>ニキヤ</sup>て わ<sup>ニキヤ</sup>さ<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>あ<sup>ニキヤ</sup>ま<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>目<sup>ニキヤ</sup>の<sup>ニキヤ</sup>あ<sup>ニキヤ</sup>り<sup>ニキヤ</sup>し<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>思<sup>ニキヤ</sup>ふ<sup>ニキヤ</sup>ん<sup>ニキヤ</sup>が

と<sup>ニキヤ</sup>お<sup>ニキヤ</sup>と<sup>ニキヤ</sup>る<sup>ニキヤ</sup>



つがたづめ 伊賀親女 公儀記よりあらたづめと云

いたづめ花青表紙云未勘云云公儀日記云の記か  
いとつたづめいとくある伊賀あらたづめと  
つる人のあらめ又ありらあまれのわいことあ  
らつたあまらるとつたづめよこのよりあ  
のまらととつたづめいとくわいとくわいとく  
みえつるとつたづめいとくわいとくわいとく  
又どこなるといわゆるうもあつたづめと  
人のいれうあつたづめ今あまいうさまうと  
みこらうとつたづめよあるうもや

めふらのうとま

つり 物をたう免と云

伊賀伊賀

小社よりたうめとや

又きやをわらうと云を ひららの守へ大お文をわらうとす

なにかすいめと伊賀親女勝く

まよりつらん 女二へ 甚れ也

ういおわらす 甚 伊賀と伊賀のういあつたづめとつり

つたづめにて 甚い内門の智るんやと云うと伊賀親女

あつたづめとつり

つたづめとつり 女二をわらうとつたづめとつり

伊賀親女とつり

つたづめとつり 伊賀親女とつり

のつたづめとつり 伊賀親女とつり

伊賀親女の人 伊賀親女とつり

伊賀親女とつり 伊賀親女とつり

伊賀親女とつり 伊賀親女とつり

伊賀親女とつり

伊賀親女とつり 伊賀親女とつり

伊賀親女とつり

Amad  
Kerun  
Hirifun  
Kokoron  
Kawarite  
Ukiyodori  
Ukiyodori  
Ukiyodori  
Ukiyodori

ひがたうめ 伊賀新井 古伝記にあそちたうめと云ふ

さうなむのと ほどたうめふらのうらま

ふりまゝを移す物といひ 物モノをたうめと云ふ

物人モノと云ふらうす 移す人モノと云ふ也 伊賀伊勢

のしとわさり 平野末社うたうめと云ふに云

物モノと云ふ

久きやをわらうと云ふ ひとらの守へ大お文をわらうす

なにかすいめと云ふ用捨ヨウセは勝く

まろしゆらん 女二へ 甚れ也

ういふわらうす 甚 伊勢と伊賀のういふるゆゑと云ふ

と云ふわらうす 甚 伊賀の門の智チるんやと云ふと云ふ

あそくはめさうと云ふ

こまのなつ 女二をわらうと云ふと云ふと云ふ

伊賀をわらうと云ふと云ふと云ふ

むけうと云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

のゆひと云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

伊賀と云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

伊賀と云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

伊賀と云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

伊賀と云ふと云ふ

伊賀と云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

伊賀と云ふと云ふ 伊賀と云ふと云ふ

やりの 屋家 元龜二私ヲ治りし故不辰の面白き  
あの人乃伊車 車をひきり出さうして門をせとる  
ゆる人 推門ナレモンの内庭イナ廻るすすと也  
ひくくし 叩かれむ  
さねく 儼中もかりくるぬり三輪の縁らのへつゝ  
家もあはくさう  
甲びさる 上臈志のらぬむりり  
山ろとめれ なるおとのひれ  
あしとひるま 阿阿アア方へ導ミチしなる家をつらと  
ひるきをやとらてスーを煮たまはせなる浮舟のひれ  
るたて残る丸め人王

東海のさやれあまりのぬきまの丸なるまはる  
神うれ 東海のういひお其カむりせとあまをすの  
こよくせはつともちアあけてもらひあのひお也

いふたらくは花鳥の工に番近のぬる

あしをひくく 推考也 書後あく  
たごれ 胸うら群い ことさだめあむりて列ねえぬなる  
よもきのぬり孫 詩身シニ花達ハナ轉志テウシ車他クルマ よもきの  
う舞おゆのれたらりぬ車輪クルマひるやよもきの志のま  
首に一巻めされくひれ  
きれく ぬりの人ぬめて也

わりの 屋家 ちね二私ヲ治りしを小辰の面白く

あの人乃御車 車をつりしりおとらして門をきせとるこ

わらん 推門カシメシの内前イサキ廻るマワルすると也

ひくくし かなれむ

さねく 儼中も少りくるぬり三輪の流石のいりてい

家もあつなり

甲びる 上臈志のらぬむじり

山ろとめれたるおとのひれ

あーとひるあ 阿阿アア方へ導ミチひらる家とりあうと

ひるきやをりてスーを甚くまじせたる浮舟のひれ

るたて城もかぬ人里

東海トウカイのさわれあまりのぬきまのたつなりとるあ

神カミのれ 東海トウカイのうこひお其たむりせとあまをすの

こよこせはつともちやあけてもらひあのむおや

ひこれ多くと やりたのへたてとりん

のころひゆあつめ 推量スエリヤウ也 書振カキマゼあく

たどれ 胸うら群い ことたれあむかえ列レツねえぬなる

あしをおく ぬまうこ也

よもきのぬり孫 詩シ身ミ先マ達ダツ轉マシ志シ車クルマ他タ よもきの

う舞マユおゆのれたらりぬ車クルマ輪リン凡ニヒキく やよもきのたのま

着キれ一ヒト着キめされくむひれ

きれく おりの人あめておや

九月 廿の夜に 九月を忘る也

十三小ち せらふあすの昔ユレ也

わーあゆ うはよあ人あ〜中悉へもは好懐の事

扱をあ〜しとたり

人目とり 浮船の城也 一人と并と也

わ〜う〜 花法性寺の眞信公建立一法つる 眞信公建立一法人王

その意序とい眞信公の師檀つるなよ法性寺 かのとらうて法性寺といつる也

あたりあふを 車もあ〜うまうあ〜也

うと抱れらうなの 男也回車也 乃登とあ〜る事

あ〜ゆく車の中よ内帳乃あ〜ひ〜をかくる子也

てをかうかのうと舟と甚とを回〜り〜車れ株

本はうまをうりて〜也

油乃〜め しい〜りケウサシ也

悉もみる 浮船をふ〜〜と姉イ也 乃〜と思ふ也

な〜と〜花 あを花の あふ〜つ〜ひ〜

〜〜成ら

車の町也

か〜り〜花車中ららのた〜ふ〜よりい〜  
あ〜ゆりか〜すと〜み〜ら〜ある〜  
〜〜  
〜〜

ひ〜の ことい〜〜  
わ〜の年 甚れ討

さ〜ゆ〜て 寂〜

こめ〜らゆ 右也

九月 廿の修き 九月を忘るや

十三ふち せちふあすの首シユビるや

うーあも うほよあ人あ〜中素へもい好優コウユウり

扱をあ〜んとりり

人目とり 浮船の城キヤク者一人と并と也

ほうあうしし 法性寺ハ 眞信マコトノブ乙ニ建立タテタテし〜ゆ人王

わうあ人を 沙汰の女メ存うがろとこけりじれ

あたりあ雨を 車クルマふあ〜言まうあ〜あ也

うも抑ヨサれがうりの 男オトコ女メ同車ドウクルマあ〜人乃スナヒ益タマシとあ〜る事

あ〜ゆへ車クルマ乃中ナカよゆ帳チヤウ乃ノひ〜をかくるふ何ナニや

てをがうかのうえ舟フネと甚シとを同ドウ〜ひ〜〜車クルマれサ株カ

本ホンはり〜えをうりて〜也

油アブ乃〜め けし〜りケシ画ガク也

毛モウもみろ 浮ウキ船フネさふ〜〜孫マコと姉イモも乃〜と思オモる出デる

は〜と〜花ハナ あを花ハナり あふ〜つ〜〜ひ〜〜手テ〜ひ

〜〜〜成ナリら

れ〜〜の 言コトふりた車クルマの町チヨウ也

〜〜み〜身ミ 女メ也ナリ〜〜み〜なり

ひ〜も ことい〜〜〜時トキ分ワケなり〜〜

あま〜の年トシ 甚シれ討ウチ

〜〜〜て 崩クズれ

こめ〜〜も 古コ娘メ

むら—ま ちの音さむらよや—みちや—

思ひ出せしものしりのなき

れりてまや— 女もくらうくへ又何かと清用ヨシユキ

あはるハ くらへ也 女乳ごて下車—也

あまそい花あまそいかや—あまそいありて 女を清用して結婚シヨウゴ中ナカ射ヤしき  
ら—よきすうかをわらう

— 子—  
地と意思をさ也

みらそ志け 道中を黄木シキキ流よは殿ハくれく—きなり

ぬゆへ里 うるむ祿

ひ—のひと 女娘コヒメれけ

女のゆく— 中—也

あやまりて 志てもこぬひならぬ—

大なるなるも女メ別ワも又女メのとなり

まやうれうそ 不用ふわ—んこ也 ち—あれチカ

い—アキキニシツ 姉アネを賣る位とい—んたぬ

我つまといふ事ハ 女のまの羽コトは流木—らをとれた

我事と云ぬ也

そのやあといものそ花やほといものそい和琴ワキンれレみ  
らうそれうつらうなういれレをまてさう  
ううとありせんうい思レうぬらこ

—也

わぬさぬなる— 双フタ比

そわうのたいれう— 班シノカキヤ女メ国クニ中ナカ林ハヤシ扇アヒ 楚ソ王オウ臺ダイ上ノ熟ジュク理リ

群 班シノカキヤ女メを扱アおすてられ—ら女メと侍シ後ノチも不フ意イ—

下シタ句コトをがむらよわ侍シ後ノチを心ココロをられ—と也 白シロ扇アヒと

むあーま 弓の意をむなしくよせりみちや

思ひぢきとものしりのなき

れりてまあー 女をもろろくへは向かると清用ヨシキチ

あはるハ ちらへ也 虫礼をて下車り也

わきとと小御子 下車礼を清用へて始シメテ中ナカ射イを

へ通へる所よてもるま物とと思思はさ也

みらをとけ 道中を草木シヤキは殿ハくれくへはなり

おゆへ里 うるむ孫

ひーのいと 右姫コヒメれ御

まのゆくー 中へ

あやまりて 志てもこぬひならる

大なるなるもナカシ別も又家とのとなり

まやうれうも 不用おわらん也 へーあれチカキ

いーアキキミ姉シ妻ウある所といふんだあ

我つまといふ事ハ あひまのコト羽ハ成ナるへをさる

我事と云ふ也

るの山とと葉 きれー也 東琴よわんへ射イ

の地谷巡比可キ送キ也るりー也

れ海さぬなるへ 双比

そわうのたいれうへ 班シヤカキ中ナカ林ハヤシ扇アヒ 楚シ王ウ意イ上ウ射イ

群 班シヤカキ中ナカ林ハヤシ扇アヒ 楚シ王ウ意イ上ウ射イ

下句とせむらよわゆ後さむとられんとも也 白扇と

五十一



あつた首をうけて泣け入る

弓よのこ ひらら敷まてあつてさ事ほつり

翠<sup>ユキ</sup>あとのる班女<sup>ヤ</sup>園<sup>ヤ</sup>古事<sup>ヤ</sup>不<sup>ヤ</sup>言<sup>ヤ</sup>し

うらな麻のぬも花上の初は白麻とてまうらうらよ

あつらふしんじり班女<sup>ヤ</sup>秋の麻はよまて

られうらゆと信屋<sup>ヤ</sup>思もつてままの思<sup>ヤ</sup>れた

とこのりてうらとこ

里<sup>ヤ</sup>北<sup>ヤ</sup>名<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>花<sup>ヤ</sup>是<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>巻<sup>ヤ</sup>よう<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>り<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>よ<sup>ヤ</sup>ん<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>じ<sup>ヤ</sup>り

里<sup>ヤ</sup>の名<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>ち<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>い<sup>ヤ</sup>ひ<sup>ヤ</sup>思<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>せ<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>こ

は<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>中<sup>ヤ</sup>れ<sup>ヤ</sup>振<sup>ヤ</sup>祓<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>つ<sup>ヤ</sup>つ<sup>ヤ</sup>ふ<sup>ヤ</sup>さ<sup>ヤ</sup>ひ<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>こ

は<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>お<sup>ヤ</sup>さ<sup>ヤ</sup>り

ま<sup>ヤ</sup>つ<sup>ヤ</sup>り<sup>ヤ</sup>く<sup>ヤ</sup>も

姉<sup>ヤ</sup>志<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>る<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>よ<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>る<sup>ヤ</sup>む<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>り<sup>ヤ</sup>た<sup>ヤ</sup>る<sup>ヤ</sup>娘<sup>ヤ</sup>を

は<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>な<sup>ヤ</sup>り

里<sup>ヤ</sup>の名<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>あ

里<sup>ヤ</sup>名<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>其<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>其<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>云<sup>ヤ</sup>ひ

姉<sup>ヤ</sup>志<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>事<sup>ヤ</sup>み<sup>ヤ</sup>人<sup>ヤ</sup>と

今<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>や

侍<sup>ヤ</sup>後<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>ん

世<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>か<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>な<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>な<sup>ヤ</sup>く<sup>ヤ</sup>て<sup>ヤ</sup>并<sup>ヤ</sup>へ<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>意<sup>ヤ</sup>乃<sup>ヤ</sup>也<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>や

あつ首をうたひぬ入る

弓のこひんら敷まわし〜事は〜

翠<sup>ユキ</sup>あよる斑女<sup>ヤ</sup>国<sup>ヤ</sup>事<sup>ヤ</sup>名<sup>ヤ</sup>言<sup>ヤ</sup>し

されを<sup>ヤ</sup>意<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>論<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>詩<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>思<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>也

め〜地<sup>ヤ</sup>ぬあ<sup>ヤ</sup> 節<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>目<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>め<sup>ヤ</sup>新<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>ひ<sup>ヤ</sup>ん

〜<sup>ヤ</sup>酒<sup>ヤ</sup>し<sup>ヤ</sup>う<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>み<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>なり

座<sup>ヤ</sup>り<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>言<sup>ヤ</sup> 弁<sup>ヤ</sup> 前<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>言<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup> 座<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>ひ<sup>ヤ</sup>り<sup>ヤ</sup>て

世<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>れ<sup>ヤ</sup>振<sup>ヤ</sup>祿<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>つ<sup>ヤ</sup>ふ<sup>ヤ</sup>さ<sup>ヤ</sup>ひ<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>て

い<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>さ<sup>ヤ</sup>り 夫<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>婦<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>な<sup>ヤ</sup>ぬ<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>ま<sup>ヤ</sup>ひ<sup>ヤ</sup>る<sup>ヤ</sup>と

ま<sup>ヤ</sup>つ<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>も 婦<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>さ<sup>ヤ</sup>よ<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>る<sup>ヤ</sup>む<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>り<sup>ヤ</sup>たる<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>を

ひ<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>なり

里<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>名<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>あ 甲<sup>ヤ</sup>必<sup>ヤ</sup>也<sup>ヤ</sup>其<sup>ヤ</sup>と<sup>ヤ</sup>云<sup>ヤ</sup>ひ 婦<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>事<sup>ヤ</sup>み<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>人<sup>ヤ</sup>と

今<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>言<sup>ヤ</sup>を<sup>ヤ</sup>也

仍<sup>ヤ</sup>後<sup>ヤ</sup>も<sup>ヤ</sup>ん 世<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>あ<sup>ヤ</sup>ら<sup>ヤ</sup>な<sup>ヤ</sup>〜<sup>ヤ</sup>て<sup>ヤ</sup>弁<sup>ヤ</sup>の<sup>ヤ</sup>意<sup>ヤ</sup>乃<sup>ヤ</sup>也<sup>ヤ</sup>言<sup>ヤ</sup>也

浮船 テラフカ 以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>卷<sup>ク</sup>之<sup>ト</sup> 下セリ 蕙女<sup>ハ</sup>六<sup>才</sup> 東<sup>宮</sup>を<sup>女</sup>み<sup>女</sup>の<sup>九</sup>月<sup>迄</sup>也

い巻初正月此事あり 三月末まくの事あり

之<sup>ヲ</sup>と 白の浮舟を二条院乃對<sup>タイ</sup>を<sup>レ</sup>る<sup>也</sup>

あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>也

う<sup>し</sup>ね<sup>す</sup>ら<sup>の</sup> 中<sup>ニ</sup>悉<sup>ク</sup>を<sup>恨</sup>み<sup>入</sup>る<sup>也</sup>

あ<sup>ん</sup>し<sup>と</sup>ま<sup>れ</sup> 蕙の浮舟を<sup>し</sup>く<sup>く</sup>と<sup>め</sup>る<sup>也</sup>

て<sup>ま</sup>す<sup>り</sup>ふ<sup>ひ</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>す</sup>人<sup>を</sup>き<sup>給</sup>る<sup>也</sup>

月<sup>日</sup>を<sup>る</sup>そ 白<sup>の</sup>乃<sup>う</sup>と<sup>も</sup>の<sup>ひ</sup>乃<sup>志</sup>め<sup>る</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 何<sup>と</sup>そ<sup>と</sup>の<sup>う</sup>と<sup>船</sup>を<sup>尋</sup>ね<sup>る</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海

あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 白<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>の</sup>こ<sup>れ</sup>し<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 中<sup>の</sup>乃<sup>心</sup>優<sup>也</sup>を<sup>事</sup>に<sup>や</sup>り<sup>な</sup>か<sup>と</sup>め

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 此<sup>の</sup>舟<sup>は</sup>て<sup>う</sup>と<sup>船</sup>乃<sup>り</sup>也

不<sup>能</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 蕙<sup>の</sup>乃<sup>や</sup>り<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 志<sup>の</sup>乃<sup>ま</sup>み<sup>り</sup>ち<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 引<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>也

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海 山<sup>の</sup>乃<sup>日</sup>乃<sup>す</sup>へ<sup>あ</sup>ら<sup>ま</sup>り<sup>也</sup>

い<sup>い</sup>し<sup>ぎ</sup>海

うのむきま うまむね

りこれ所 言法を引はかたらんも中一の字法をんる

いづくとなり

まづれう 双比

わごすへん 三葉ちのまに

まゆりつと海 大おふとを渡もるまや又浮舟なり申入

うごくならし

見たてまつる 中志のむこへ同格よ戸めやりの法音信

なとあり

世中を 中志

終い海さの 叫なる白えれふのり一あるれと

とれくきき思出語入

あれとたいめん 中一のふかれへなり

年月もあやむるをさくゆき 甚と中と此事を

人への種と云へる燈也甚の言法をてのうーろまの

不及是地白ふへ涉出をそ故めはまごり人へははしく

しなれまへうをより思てまると 元来由結不<sup>結</sup>人そ

不<sup>不</sup>結むを 由来を言コク多 結ハ長く不<sup>不</sup>該

心死卒一の結同心

中くおう きうり中志の心

おる心 中れりこよりわさとうこくはしくとめら

現くおれ甚不<sup>不</sup>愛なる若のゆりここ也 其のこくまよ

意の中さういひ入るに 加まりあへ上藤の事  
いやはま揃うかゆくゆうさひりひきするはひ也  
所い三又 一かほくみ文の討はたさそのふとの扱の  
文どうもやういそほくひれ嫁娶後物なごう心あふ  
事也 河のま文とありいゆ

たゆみのれとく 大夫殿へと云ひれとくを殿乃字  
通つれれまへまそ 中意の由前もしたゆふ清苑をん  
とてまへ入るると云也

このこさういふと 妻の討金とてひげことを地て縁あう  
て又やういなり

大夫のりやれ 大夫りもとくと云討

す治れ名のりげまぐく 地すと思ふ也

うれからん何 由の由用控也

さぞみんよ 中のさりたぬまぬまうあうをみんとりり

おやけうなきて 浮舟の文乃討

山甲乃のあせさ 物思ひれ懸とりのせふと也

所先くそく 浮舟乃小目とたてと也

さして又互文を由流也

年あつたすまで 必遊り大補のりくとへ乃文言

あつらんやとめとんた けしむのあかーるれとゆく

つひてあて意れむのくまをまぬ入る或浮船をぬさ

りーのすまぶる也

作<sup>レ</sup>ま<sup>シ</sup>く 句<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>き<sup>も</sup>の<sup>り</sup>く<sup>へ</sup>入<sup>リ</sup>事<sup>と</sup>か  
乃<sup>レ</sup>め<sup>り</sup>と<sup>り</sup>り

う<sup>ら</sup>ち 持<sup>統</sup>天皇二年正月天皇御<sup>一</sup>万国<sup>二</sup>前<sup>三</sup>敷<sup>ニ</sup>

し<sup>ハ</sup>ク<sup>ニ</sup> 大学寮<sup>ニ</sup> 献<sup>レ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>八十<sup>ニ</sup>枚<sup>ニ</sup> 卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

年中<sup>ノ</sup> 画<sup>ノ</sup>鬼<sup>ノ</sup>成<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>杖<sup>ヲ</sup>用<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>年<sup>中</sup>卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>可<sup>見</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ヲ</sup>さ<sup>レ</sup>ま<sup>シ</sup> 共<sup>レ</sup>れ<sup>し</sup>

ま<sup>ご</sup>が<sup>り</sup>に 本<sup>レ</sup>杖<sup>ハ</sup>小<sup>山</sup>たち<sup>け</sup>を<sup>と</sup>造<sup>ル</sup>花<sup>ハ</sup>り<sup>て</sup>卯<sup>ツ</sup>ち

と<sup>杖</sup>う<sup>つ</sup>つ<sup>ぬ</sup>る<sup>と</sup> 杖<sup>ハ</sup>楹<sup>ニ</sup> 卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

と<sup>云</sup>卯<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

ま<sup>ご</sup>ふ<sup>ま</sup>ぬ<sup>ま</sup> 浮<sup>舟</sup>乃<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>少<sup>り</sup>ぬ<sup>を</sup>海<sup>邊</sup>ぬ<sup>也</sup>如<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

卯<sup>ノ</sup>杖<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>う<sup>ハ</sup>海<sup>ニ</sup>卯<sup>ニ</sup>杖<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>

うのとに 内記 意の内筋よきあり  
とのぬまのあてかきしききよりもの  
いと志のひて さるゝ事なことをさるゝ  
りのなる 是より内記程

あふきらうれるん 内記の巻惟お中

寝殿に新造より位と也

み一人とも 白ひま人あつりこみりとも

あのをこま 意の中意とやういぬき不審なり一の

心とあえりてうき船とわききふおと推察也

ふろ一人イ中

れり弓 賭弓の月十八日辛始ふ又人博士とも内裏お

て悦の詩と惟と

けりさの 親直打とへけて人乃事也

とやう 白のひり一人と也

はやもにさふらひ 湯籠前心中書と也うれも又お

あくり戸へたうハ子細を志しと也

きふあまよも 又中とふかあり ふうふそよ色なり

あや一さまを 意の白とす治へつまき道引ひりあよ

ろ中意とあひあるふ去とてさう一ろくろ事と

思ひなりと也

あまきき 心やまなり

はつとて 志内記内乃神を見て白ふれるよき地所ふ

へ参て也

いよむを 勅所の所也

三田人 けう志あん

うのふりけみ 二条院より見ゆひしれとるれりのや

志道と名のりー 二条院よりありー志道ひしちりーを

ましし人也 浮舟の女房前と可むぬ

志道ものなるとき わけて縫也

物ありとして花をさるいぬあしとりて

へむて石山へ回道して茶箱成

へしあを茶よりひのへとりへま

ねるーを うかぬれす治へ出のねる系へ出ちのひ終

とくとむり

をうてわくまはくー 志道へ又石山よりぬれくむる

ーまをとや中ノ 二条院よりて拾取成へしとま

けふこれ花かとの母とのゆえまゝいふとあり

まやの宿(母との)娘志とありーくむくん 刀をさるをりり女房の鏡

あとしていまうと花まゝい娘志のめのとまゝは ぬよとすして母乃所へせー

ととぬらうー たちて石山へ参るも急と也

けふはく宛 白乃二条院より浮舟をやへぬひー四

つと守るるたれととるぬ人王

あつあつーしん 中志うんめれとのふまきうさ

たのんをたてて心とゆかとのとあしとせくーまきと

いつり 浮舟乃乳母をふくみせれ批判なり

ふのゆ事 中志乃まをハ切あてもつあうと浮舟れ討



へ参て也

いよきを 勅ふの所也

三田人 けう志あん

うのふりけみ 二条院より見ゆひしれとるれりの也

志道と名のりー 二条院よりあり志道ひちちうを

ましし人也 浮舟の女房前と可む也

志道ものなるとき わけて逢也

わつらせ給ふも 母こへわけて石山へ同道して茶箱成

へしあを茶よりひのへとりへま

わつらしを うかぬれす治へ出のれり系へおちのひ給

ふくとむり

なうてわつらせ給ふも 石山へ又石山より返給ふも

ーまをこや中く二条院よりを給成へしとむ

このれとら 浮舟れお方をえうをりり女房の記

あのみお めれと成治よりすして母乃所へ

へんおらうーたちて石山へ参てと色と也

けみけく宛指 白乃二条院より浮舟をやへ給ひー四

つと舞よりたれととるおぬ人

わつらうー人 中志うんめれとのふまきうを

たのんをたてて心とゆ力とのとあすとむりーまき

いつり 浮舟乃乳母をふくみてれ批判なり

ふのゆ事 中志乃事とハ切あてもつふうと浮舟れ記

よ麻の人のう人こそうともめくやもや

なふけりり乃 親族 レツク いりなり親族こそや

よぬまう うさあひまにめぬ姿也 スカタ とも電列のミサハ

て坂原一も思ふは況 ヒヤ 無<sup>ク</sup>流<sup>リ</sup>流<sup>リ</sup>してまうも勝 スレ ころとや

めてなり 上筋 ウヂ 一もあまふまなり

たものふ 甚の家司 大統大輔伴信大田記のまうとや

ういしな ウイシナ りきうのりり

みちまをうと 道まをぬす人にあひぬひりたは初也

ふえたり 色字 是をこまへおまうまうころとつふ

たとるま

まづれあうま 甚の住持おもうま舟のうころまふ

浄車八日たけてそ花母とのかころのむく  
の車をとりう

くわ 甚なり 甚今親の書

物おはむまうまなつりあく我まらうまうま

云てこれ秘入るも浮舟乃し我れ アハシ 甚 シ 然 シ たりやなとま

けいまうころとし 白のま二条院まうたおま里りくれ

こまうまのり

いりり 甚一もんぬまにせんいりりまのたあう

人をままうりたれ

町う 町あ 白の家司おま権守ま

おめあ 甚れとても不叶ゆうとたり

あや一系ま 二條院まうわのまゆひりおまりれ事

よ願の人のう人よきうーともめくやもや  
 可ふりり乃 親族 <sup>シツク</sup> けりり親族そと也  
 ふるまう うきやのまにめぬ<sup>オカサ</sup> ぬゆやともぞのひのさし  
 て後座 <sup>ミヤ</sup> と思ふ況<sup>シヤ</sup> 立<sup>ツキ</sup> 済<sup>ツキ</sup> 了<sup>ツキ</sup> してとるも勝<sup>ツキ</sup> かつと也  
 めてなり 上<sup>ミヤ</sup> 船 <sup>ミヤ</sup> へもあそしよきなり  
 なるのよ 甚の家司 大茂大補伴信大由紀のまると也  
 うい<sup>ミヤ</sup> したけ りきうひなり  
 みちをそくと 道まをぬす人にあひおひりたはは初也  
 へえたり 文字 毛をこきへおん<sup>ミヤ</sup> まる<sup>ツキ</sup> まる<sup>ツキ</sup> つら  
 可とる也

おひ

船<sup>ミヤ</sup> の方へつゝおんまらるる也  
 あまれなるよの けしひもくわ 志なり 吾今<sup>キ</sup> 親<sup>ツキ</sup> のあ  
 物<sup>ツキ</sup> 小<sup>ツキ</sup> 出<sup>ツキ</sup> ぶき<sup>ツキ</sup> まる<sup>ツキ</sup> まる<sup>ツキ</sup> つら<sup>ツキ</sup> けし<sup>ツキ</sup> とら<sup>ツキ</sup> め<sup>ツキ</sup> 一<sup>ツキ</sup> づ<sup>ツキ</sup> たり<sup>ツキ</sup>  
 云て<sup>ツキ</sup> くれ<sup>ツキ</sup> 鉢<sup>ツキ</sup> 入<sup>ツキ</sup> らも<sup>ツキ</sup> 浮<sup>ツキ</sup> 舟<sup>ツキ</sup> 乃<sup>ツキ</sup> し<sup>ツキ</sup> 米<sup>ツキ</sup> 穴<sup>ツキ</sup> 煮<sup>ツキ</sup> 給<sup>ツキ</sup> たり<sup>ツキ</sup> 也<sup>ツキ</sup> 可<sup>ツキ</sup> と<sup>ツキ</sup> 云  
 け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> ま<sup>ツキ</sup> り<sup>ツキ</sup> と<sup>ツキ</sup> し<sup>ツキ</sup> 白<sup>ツキ</sup> の<sup>ツキ</sup> 二<sup>ツキ</sup> 条<sup>ツキ</sup> 院<sup>ツキ</sup> ま<sup>ツキ</sup> たる<sup>ツキ</sup> 小<sup>ツキ</sup> 田<sup>ツキ</sup> 里<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> れ  
 こ<sup>ツキ</sup> う<sup>ツキ</sup> ま<sup>ツキ</sup> り<sup>ツキ</sup> 一<sup>ツキ</sup> なる  
 け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> 一<sup>ツキ</sup> ら<sup>ツキ</sup> ん<sup>ツキ</sup> ぬ<sup>ツキ</sup> ぞ<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> に<sup>ツキ</sup> せん<sup>ツキ</sup> い<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> り<sup>ツキ</sup> 湯<sup>ツキ</sup> の<sup>ツキ</sup> た<sup>ツキ</sup> ぬ<sup>ツキ</sup> 湯  
 人<sup>ツキ</sup> を<sup>ツキ</sup> せん<sup>ツキ</sup> ま<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> り<sup>ツキ</sup> たる  
 町<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> 町<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> 白<sup>ツキ</sup> の<sup>ツキ</sup> 家<sup>ツキ</sup> 司<sup>ツキ</sup> 出<sup>ツキ</sup> せ<sup>ツキ</sup> 推<sup>ツキ</sup> 守<sup>ツキ</sup> した  
 ぶ<sup>ツキ</sup> め<sup>ツキ</sup> 也<sup>ツキ</sup> 至<sup>ツキ</sup> 此<sup>ツキ</sup> とも<sup>ツキ</sup> 不<sup>ツキ</sup> 可<sup>ツキ</sup> 計<sup>ツキ</sup> 知<sup>ツキ</sup> う<sup>ツキ</sup> と<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup>  
 町<sup>ツキ</sup> 一<sup>ツキ</sup> 条<sup>ツキ</sup> 院<sup>ツキ</sup> ま<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> の<sup>ツキ</sup> 三<sup>ツキ</sup> 條<sup>ツキ</sup> 院<sup>ツキ</sup> 一<sup>ツキ</sup> ね<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> け<sup>ツキ</sup> 事<sup>ツキ</sup>

いふとふ人よ花かとうふ人、大門紀と云也 ともさうも成人のそを

雅あり 句よさへてきて時こくけいぬ

時つる色ぬふ 時こくの詞よとの熱くや事かしく

とさる事よまふきり つつふ句 時中らひぬ

題名

海めわの ころしきも 葉軽白れつらくささみ寄く

も力を持とけり

石山う 前の糸指のる増乃は

らふハ 月の澄おとさけりて夜をりきそそ人の出入

傳ひするけり

伝てうつ 蒸へ乃折とさのきそ海よの事かき流し

まこ上臈の涉こかこるれまこころはさすあや

まそろこは浮舟の上臈かひりりて白ふへてころのき

せぬ人と白れ涉詞ひ候む可法

女つとさ海こく 女は事もさくあ人しらふけり

蒸へり列らるあや

おのひ出さるあまこ 句

あぬをれ つかれ詞也 名案一はくこ也

びうぬれん 母のむこころけり

あの人く ち道り中寄入も也

よべこり 日水おとこま

うのたのれう人 中ころそれとらたれ也

可くして 志願の時いふまじうも成人のそとをいふ  
雅あり 句をいふとて可くしていふ

可くするは 可くしての詞をその勲をいふ事なり  
とていふ事あり こといふ 可くするは

越音

海めわの ころしとて 菜種白れつらふとていふ

も力を持とけり

石山より 糸の糸端のそ増りは

とていふ 月の澹おとさけりて夜をいふ事なり人の出入

悔いするなり

返つていふ 煮へ乃折とていふ事なり海よの建たう治よの

まじ上臈の涉つてかたるれまじうはとすなり

まじうこは浮舟の上臈ふれりて白ふへていふ事なり

せぬ人と白れ涉詞い候む可法

女つとていふ 女い事なりいふ人しらすなり

煮る一列なりなり

おのひおとすなりなり

とていふをれ まつたれ詞也 名案一なりなり

びうぬれ人 母のつていふなり

あの人く 志願の事なりなり

よべりり 水おとすなり

このたれ人 中よりそれなりなり

大教乃 六志をされし人を見今をめりし思  
るまを

まじ おとりのくさぬぬいをまじ不念と思ふ也

おろふよとま 句

申ししは建 寺の注

ふ路のよ 寺流通といひつとたり

つらつらし 二条院をその事

ひとまの 人の心定けまは命のそに不<sup>カキラ</sup>限と也 浮舟

ゆのなる人れ 心むらとみあひつら人のことさる也

舞いしぬきを ちて<sup>セン</sup>無<sup>シ</sup>詮<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>をも<sup>シ</sup>恨<sup>ム</sup>也

つらむまや 双

よきり 弘句 善て扱とくけて腹に糸へのるま<sup>シ</sup>時方

泰らる

らんぞう 見慶 うもなり人と云ひ丸

ひらり乃をとり入 女ハつとまうと云ふあひこを言

ひらりと云ふを時方<sup>チ</sup>時<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>もて<sup>テ</sup>言<sup>フ</sup>の<sup>ツ</sup>ハ

おろひんうとやわこく<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>時<sup>ト</sup>あ<sup>ハ</sup>罷<sup>ハ</sup>や<sup>リ</sup>り

うまてのう<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>を<sup>シ</sup>な<sup>リ</sup>り<sup>マ</sup>ち<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>や<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>

あなき事<sup>ヲ</sup>もれ<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>う<sup>ウ</sup>ん<sup>ノ</sup>ゆ<sup>ト</sup>と<sup>ヤ</sup>

人めもも 懐<sup>ハ</sup>かり<sup>リ</sup>と<sup>ヤ</sup> あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ひ<sup>ナ</sup>り

をのれとひ 世上乃なりひお<sup>カ</sup>我<sup>ガ</sup>誤<sup>リ</sup>を<sup>シ</sup>忘<sup>レ</sup>て<sup>シ</sup>惹<sup>レ</sup>う<sup>ガ</sup>舟

を<sup>シ</sup>打<sup>テ</sup>て<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>ひ<sup>テ</sup>び<sup>テ</sup>る<sup>ヲ</sup>ま<sup>テ</sup>を<sup>シ</sup>浮<sup>ル</sup>船<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>リ</sup>と思

こまじき女乃力れよとらん思ふま也

神乃中 ありさるし神乃中へ入ふもん我むし

非れるまむする

母よーしとさ 句 ひさゆ也

ひみことと舞 浮舟回

をれり 志のめれがうくことあけゆあまのたう

まぬくならうくれさ

この又位 肉記と町本とたり

二条院

むちろう 月がふれ詞

人のかいき 中蒸へ白なる死後うそまひまはるとんこ也

なめやうお 中へのひ

つらもろに 白へ蒸れ心中を何とやーはーんそと

おもひめさん也

酒いふはしと 月がふれ心 微る蒸のすけや

と也 但白の中ひ成つてやたのふ事と女をい

つてお母さんおとやうのちうあま女君のつがふれ

心とくれしめふおはるはるし

人よハ 蒸るまねひおとめふとい詞うそま人の心

可也

ひ心乃ありさ 白へ蒸心あるとなり

とくせとろり 随心してうそあふれり衆をかくし

久人とも書執を不遊しあひくらふの中

つゝとえん 浮舟れ事いゆゑとせん也

すゝらなる 甚おとの媒まがひもくかき婿むこ娶むす礼儀れいぎなりとるれ故

細くあなづりての注めぬよと思ふ也

ありやほや 英事りのむるりのと乃定ひのらんるを

中表句へみしんをとりりしなり

きのふれ ぬるけしととあやけつげく思ふらん

あやましくけしととあまのむねけつげく申す

とるは眞まことの春可遊しんと也おなまうらん白矢

よろいらん つかぬひよろいそきお集りくとれ

かけおささ城 白心と ぬけりりしとてあまなり

又昨日もやまーさかたごふあれたまへに物くらし

ぬひみて可遊死

久きうも 二百三日も 申されゆひよらん

しれすへ

あぞうれはせんをいりしむれた 英事りのむらむらの

ひらろ横う 浮舟のふ海思ふまの事案也

なまも 申す

かろりか つかぬなり

あぞいりま 英事りのむらむらのむらむらの

はまらるあまの事案也

進むる色 くのきぬすまき 双地



乃許ひやがる 意の美<sup>ビ</sup>たしてとてあ〜と被<sup>カ</sup>り入るは浮

舟乃事ハそつひにせぬとぬなるし

わのありさぬ 白と意とを浮舟れ思ひを〜とぬ〜とぬ

〜こもる 予治

うれさふ 白よりハ又入るに極めのより〜とぬ入る

ずんご 後者中人や大夫ハみ位の人なるがあはよおぬ

お遊のあつく おを新簡<sup>シヤク</sup>也 お遊の着むとあつく人ま

志の今又よ意れは結よし又む〜とぬ〜とぬ〜とぬ

舟もたらぬ 白月

あ〜よを うる船れ即こ〜とぬなり

色りおと〜とぬは〜とぬ〜

あふり 白乃神 又蒸へあ〜とぬ〜とぬり

りきる年比 白あは〜とぬ〜とぬりかあき皆年比

思人 思もあ〜とぬ〜とぬの詞

又つふきして 又つふきよあ〜とぬとぬのあ〜とぬ

さ〜とぬ〜とぬ〜とぬ

あ〜とぬあ〜とぬ 白乃神 又蒸へあ〜とぬ〜とぬり

りあ〜とぬ 白あは〜とぬ〜とぬりかあき皆年比

さ〜とぬ〜とぬ〜とぬ

もんは〜とぬは 白あは〜とぬ〜とぬりかあき皆年比

おもする家は 浮舟へ白の密<sup>ヒツ</sup>とやあ〜とぬ〜とぬり

人を〜とぬ〜とぬ〜とぬ

月は 甚乃 吾を 恨く 又 人里

あちのまき 糸のをきまき ぬ水のきとや

わさしーてしと思ふて 討おれりー新おとけり

あの人 白あも 又 造りぬり

清心いれ 甚の種前く せりやうふまきーの今き何

とやらんりーきりまれとけり

つらさは 上旬中旬を十日くらとけり

鶺鴒 鶺鴒や まきてをきとみしとら

まこれやきーまにふりてけり

寒汗 寒汗 寒汗 寒汗

家隆

さういふとさういふ花かきとさういふ散のうす  
物もいけ物物よは散をさういふといふかきと  
けしを散るといふかきとさういふ又白  
散をともかくや散散のうす散のうす  
夕暮のまきわし白散のうすけり散  
のまを白物よたさういふ散りりて  
用いふゆきとさういふ散りりて  
散りりてさういふ散りりて

鶺鴒のわさしやつりこ夕暮のまきわしとけり

いささのさきまのまを白物おたとへられぬと散り

よけりて可用くとけり

忌草と葎をとりひ又忌草のまきと云ふとけり

葉つとけり

いとくわらぬ 浮舟よとるまに散みてけり

らんとるま

部訓の お中ひきまきとけり

うらたれき あわおはとさしけるとうか散也

今見給てん 糸へをうてびりつんとや

とさし乃とや 浮舟むとる也

月は 甚乃 雲を 恨と 又 入る

あちのまき 糸のをとまう ぬ水の音とや

わさしと 思ひて 討みわたり 新おとたり

その人 白も 蓮前を 又 送るなり

清心と 入れ 甚の 種前く ちやうふま 一り 今を 何

とや らん 一り 一り 一り 一り

つら 一り 上旬 中旬を 十日 一り 一り

まじ 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

家隆

鶺鴒の 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

いさ 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

よけ 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

いと 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

らん 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

部 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

今 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り 一り

内る一又 内裏

まろりたり 双地 好文也

大御人よ 白乃依との升前より人子御れぬふとそり

へおぼく人

登りそ 白の衣に露をやり梅の花はようみと縁の

やを叩く歌

まろりたり 白乃依にむろりよとふとふとふとふと

まろりたり 白乃依のり

まろりたり 白乃依のり

まろりたり 白乃依のり

まろりたり 白乃依

文たるまろりたり 白乃依のり 詩をまろりたり

まろりたり

まろりたり 白乃依

まろりたり 白乃依のり 年相遠 源氏一節

まろりたり 白乃依のり 年相遠 源氏一節

まろりたり 白乃依のり 年相遠 源氏一節

まろりたり 白乃依のり 年相遠 源氏一節

まろりたり 白乃依のり 年相遠 源氏一節

まろりたり 白乃依のり

まろりたり 白乃依のり 年相遠 源氏一節

まろりたり 白乃依のり

奈も人なまら 春の君を約守と信ふも信まら

内記を成り必捕 大内記ハ 言書 言書並令信記をよと書つ

のさや 式甲必捕を テシヤク 獻策首れ斌打とけりささる織

まらと 式甲有斌及才キウタイなとの事也

ひえあふ めくららなと也

ひきぬもあふのらぬを 吾奥 ひあつき人をと約後

五明乃月 他又十日比迄必能へてく乃るなりなりし

あれさる ちまね さいらると也

年ふともち 句 トキハ 為盤るしをぬへり

橋の言 浮船 ひきぬ也

みこまらつ 何しこかともみる目也 あくかと橋を

とどつてふへえ道中一優りみるなり びく一竹との

たしとるはよとまらる也

ちろよのまら あぢぢり

うのあつしきお いらうとれ康おならいあや川にとも

あつてつらるもらひお

群ひえちめ 何方とまら思ひてり一はくや 何ぢあ

ししらひらひらとらゆらへもむと一のぬらひし

うの人の 意へえおむおとらるのさや

うのみとあ 夜明けと意れぬしとらるさや

あつちのやとらるさやみしとら 高ちのしとらるさや

あぢあつの色なとすらゆらみしとらぬしとらあぢあ

きつあけなり

ついでにのこ 浮舟の心

旅の雪ま 心をぬか

こころぬ ぬきろのこころぬ 馬のあしとさぶら

しをうりうりなり

ありみりな 浮舟 たか 舟と白と黒との中をさぶら

うしと思町を感へし 舟のついでに心をぬか

あの中を うかへしをひくうなり

はるなとたてまつり 志道のあふりふいば

志むし 志ひくさよもや ヒラ 又うなぬ

はるなとたてまつり 志道のあふりふいば

あぢあぢんまは 可成なりや

あつうの 白へてつとさつとさつとさつと

あぢあぢ 女つ又へ浮舟とあつとせんとおもふや

それとりのうら 蒸ふあつと チカ 蒸ふあつと

さつとくを幸理かあぢや

振ても うらみてもあつとさつとさつとさつと

あぢあぢのきかすて

ひをぬかすうび ひんちのひをぬかすうび

先れとたつとさつとさつとさつと

さつとさつとさつと

さつとさつとさつと

十六日

よのつひの 浮舟の心

つらふれい とうがりのひらくとも

おろして 空へ自分の事をかへして

たのむこと たちかへれたらふらの眉かたむ

せくよめはりイモトあそびを いやきれたいそんた

めいもあそびをいそんたいはり

かりのめかたき 白の心の

ひのめいひ うそあひする

よのへん 中巻

あやしのくま 二条院までかのうふんはひてふらや

まいて 甚へてうひらとあそび又かたかくとも白の

かたむくふ事と心也畢竟トシキナクおぼれくハカカリのひらくし

これのまにかるも よがれと甚との心

れくとれぬるを 白れの心

なとらふりに 白へたる心の心

あつひらき 中巻へけてあひきんとゆきのま也

心目とい 心をひらきそをいと志にくむら——おのほ

と——らひてあひなるあ——

わら乃西文 かなる日法よりなるとも といはれたるを

あつとかり

水海さか 甚心の

まらふれを 白への事をすすり

甲のあまを うさね いとくくまらや

甲乃るわうれと云を来しうきとよむゆへいとくくまら  
りるりらうし 新抄遺は題不立と入心を不立撰者か

別可き意或アと入ると云く難ア見可思合

けしうるそあつまきさ 世もまつんむらきとめとひり  
第一のりあつともゆへへ返してこそいうくと思ふ  
あつらあり

りま〜しき 回二首が〜句へや

夫をぬき行し〜とまき〜と〜と〜の心丸

しつせうそれと悉い〜のんト悉〜アリ

玉針おき〜るるをりつれう

建と悉とぬん けり舟れ返るれあ〜り〜り〜り〜り

班のハ水乃池となふみん

何ぞ叶ひ来力をかあんの増トウシぬ

つれくと尋 浮舟乃言 惹へれむ言 ぬく〜み思ひ

心もひらひ明こみ力を悉ぬを返うまされる

女ま〜 女二へや

すそをれ ついでうの詞

ひり〜より 意道心あ〜りや及去女二故世よあつとや

ありと 言治ふと〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜〜〜〜り

ゆのたらし事 上篇〜り詞

ゆ〜り〜り〜り 涉門へむ〜り〜り〜り〜り〜り



甲のあまを うまぬ いとくくまらぬ也

甲乃るらうれとまを来しうまよまよびゆいといとら返  
らるらうれし 新抄遺は題不立と入心と不立撰者分

別可ま芝莪アと入らるとまを難ア見可思合

けしうをそあるまきさ せしきつんむらきとめとけり  
第一ありあつとも白ゆへ返してきいうしと思ふ

あつらあり

うまくししあ 回二首けしう白へ也

大志ぬをけしうくまきとくくんとのむら

ましうまき 白志の鳴ぬをけしうまきとくくんとのむら  
建と志とぬん けし舟れ返るたあしうまきとくくんと

班のハ水乃池となふみん

何ぞ叶は来力をかあんの増つらぬ

つれくと舞 浮舟乃言 惹へれむ言 ぬくみ思ひ

志をもひしひのこみ力を志ぬを返うまきとく

女まら 女二へ也

すそを返 ついでうの詞

けしうより 意道心あつり也及去女二故世よあつと也  
ありと 志治ふとまきとくくんと人らと志とまきとくくんと

しししなり

ゆのむら事 上篇し文次詞

ゆよなと返るぬ 涉門へむらとやなりとていせなり

あの内記 大内記の志うと

きつづきて 夕鏡

志しむと 昼書

志しむと 下系

この月れ 三月

ま浪よ 宴りも

あうふあ 倦ぬれも力とほ夢の根致してさそふ休め

そいるんとそわりの

まぐの心目とり 乳母一カしてそふかろへのわくを用

ま靴成とたり

八まふ山 白雲の八まふ山よこのるともわりのひたら

お八島山めや

即くれるんしと成おりのと 今日も白ふしと成なり

つりなる涉むら 嬢妊りと云

いさるにちちたたりぬにちちたりとかりついで山詣する事不成きてそそ

あつめの空花白まよあひねりゆと

文乃うへ 中とうえとのみとくに浮舟乃心かろくて

おそしきと町れ幸とあうんとりへま

志ふやうならそ 蒸へ流つてありての事

あつめあまし 弁の媒せりも大町こりあ〜と思

この事とつり

あの内記 大内記の志うと

きつづきて 夕鏡

志しりて 昼書

志ものゝ 下系

この月れ 三月

ま流よ 宴りも

あうふあ 俺ぬれも力と浮草の根葉致てさそふ水あ

そいるんとそねりふ

まのりひ目とり 乳母一カしてそふかろへのわくを角一

ま靴成とたり

八重の山 白雲の八重たの山よこのりともねりひたら

お八島あめや

即くれるんしとねおりのと 今日も白ふしとねおなり

つりなるしひら 嬢妊りと云

岩山とまり 月の陸よそ山崩する事不成きてそそ

嬢妊事いつこと也

かめ うさ舟れ沖

文乃うへ 中とうえとのみしに浮舟乃心かろくて

おろまきとねれ幸よそあうんとりへま

さふやうなるそ 蒸へ流つてありてのり

おろあまき 弁の媒せりも大町いりあきと思

この事とつり

あつへをらん 舟の媒なとふ也

清く声しえしとふの 白れりのりふと清き舟一舟

み便ハカリしとひり

されすられ 妬事ナタミすてそ中へいめくとるこ

志をすお うふあひ

うさくまく 甚と女二を指ぬ人少も他人もれまひの

うせせんあはむくつあやう母の心

ううぬと城 うふ舟へ 二条院までのもるうの

あゝ思ふやますはとふ也

みだてはつうりうき 句へ不意フタヨあつなりも 浮舟れ

力よとも我をまう中志のまへもあふ程うハヤク

いをとりふむひり

うらぬふりれ 母の詞年月と云き必乃程るれとも

母乃スハえ極も思へる浮船ゆらるるハ色し流ひ

ふと也 字流書換ぬ又うし連り舟乃尼へ程浮舟の思

る程へさうとふ也

さつ川は 日本紀云大山守皇子オホヤマノミコ陸奥道川ノボリカミ而没ホシタ云

ちちわあううりの波は掉とるれとやらん人しむ

もころしき

みさういほよ 志ゆ人乃をとりへとまかともさくれ

ゆいふ也 志せしとみさう川みせし後祓を

うきすも盛るうりうれ

人まきなりあり けりつりみひきりや

けりた筆止かめは

あうーみうー 女二を云 女二乃あしこれゆふふ

とのあうーもふねをぬ事ーをものれくとするは

らひと人をまきと撰り

おーこふ ぬお書まつーひなり

志りーを乃つるあなりく 奈へ兼度と浮れ詞

りーこもつと相あそりー ぬお産お用とや

そりなき事ーなり うえも終れ<sup>ニヤンク</sup>終末以下ぬひりるなり

を不可成とや

と志やぬまうーまき 産ぬせりたなりや

なきおれふ 怪馬樂 道のく乃まあれらふまれ

ありとねやうん流あよひあひのり後 づりくよきー

ますやを奈れへ文と云母乃詞

風のまひりん ともぬ乃あまの極やくらふ風をりてみ

ねももぬーこーたなひきにたり

ぬかりし日 ぬれ日はうまけらめ

うのせうの家よて 或アぬ補 大内記の 越官<sup>ナシ</sup>

相がくー

まうと花真人く人を稱まう詞く  
かしのまきと花かを権守時方ん

又と云 時方自法言へ乃文と

さそとん さいとも讀へし乃兼門大夫とむ守ぬ官や

人まじりなりめり け詞うつりおひまらや

い巻代筆止かめい

あうーみらう 女二と云 女二乃あしうこれゆふふ

とのあうーしもふねをぬ事ーまもものれくこするな

らひと人をまをも撰めり

おーこふ ぬお書まつーひなり

志りーを乃つるまふりく 奈へ系度と浮れ詞

のーこもつと相あそりー ぬお産お用とや

そりなき事ーなと うえも孫れ装束以下ぬひりうとや

ま不可成とや

ま志やぬまうーまきし 産あせりたあとも

たきあれふ 怪馬樂 道のく乃まあれらふまれ

ありとねやうんはきよひあひのり後 つりくよきー

ますやまを奉れへ文と云母乃詞

風のまひりん まぬ乃あまの極やくらふ玉風をりつみ

ねもまぬしこりたなひまにたり

ぬかりし日 ぬれ日はうまけくめ

うのせうの家よて 表ア虫捕 大内記の 道官

相がくー

りうの表 おまの権者の文と云 何方自法言へ乃文と

云なをもなり

さきとし さいとも懐へし左米門大夫をむま守道官や

とゆふの人 うしねる 蒸の人や

うしこまりてをり 踏<sup>フミ</sup>者して子細<sup>コト</sup>をし 平<sup>ヒラ</sup>政上人

乃きうんを思てなり

上くそし 大政友<sup>ダイサウユウ</sup> 政官<sup>セイカン</sup> 道<sup>ミチ</sup>令<sup>レイ</sup>なり書<sup>カキ</sup>友<sup>トモ</sup>也

大政友の被<sup>ヒ</sup>友<sup>トモ</sup>也

おとやも 夕

清<sup>スミ</sup>ひもさー 垂<sup>ナリ</sup>衣<sup>イ</sup>の紐<sup>ヒモ</sup>をまつて 涉<sup>セ</sup>休<sup>キウ</sup>息<sup>ソク</sup>をのれとも

夕へ此<sup>コノ</sup>礼<sup>レイ</sup>儀<sup>ギ</sup>あり

清井<sup>スミヰ</sup>のく 夕へ蒸への礼<sup>レイ</sup>を 蒸の詞<sup>シ</sup>

あまのく 夕<sup>ユフ</sup>旁<sup>ナリ</sup>れ也

うしこくし 一<sup>ヒト</sup>うしこむよと心<sup>ココロ</sup>入<sup>イ</sup>り 書<sup>カキ</sup>友<sup>トモ</sup>と付<sup>ツ</sup>れ

ろ<sup>スミ</sup>為<sup>ナリ</sup>とけり

みちさう 夕<sup>ユフ</sup>旁<sup>ナリ</sup>れ也

お中<sup>ナカ</sup>ひさう 好<sup>コト</sup>友<sup>トモ</sup>もうぬく志<sup>シ</sup>のうしと思<sup>オモ</sup>ふ一<sup>ヒト</sup>也

とれさうれハ 申<sup>マウ</sup>悉<sup>シツ</sup>も今<sup>イマ</sup>始<sup>ハジ</sup>ての事<sup>コト</sup>子<sup>コ</sup>もあ<sup>ア</sup>りすま

く<sup>ク</sup>より乃<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>也

書<sup>カキ</sup>友<sup>トモ</sup>なり 白<sup>シラ</sup>れ若<sup>ニ</sup>申<sup>マウ</sup>へり 夕<sup>ユフ</sup>ひはひ 時<sup>トキ</sup>礼<sup>レイ</sup>儀<sup>ギ</sup>也

夕<sup>ユフ</sup>め記<sup>キ</sup>さう う<sup>ウ</sup>もあ<sup>ア</sup>れ

はまのく 一<sup>ヒト</sup>具<sup>グ</sup>也

れく 妻<sup>メ</sup>のむむ也

夕<sup>ユフ</sup>んことりく 中<sup>ナカ</sup>辨<sup>ベン</sup>がとろともわもいぬ人<sup>ヒト</sup>なれと大

めいあと思<sup>オモ</sup>ふ也

一島のまの 白れもまう人を一おまよあひきそまはる  
ませぬふたふひも浮舟もあうんとなり

舟ののふ 蒸の家司

みちらこ 肉記事

まこなり 人よまうまをされこるると也

せうのけいふ 悟力入大肉記の蒸乃極神を尋一坂

心合とる

波こゆらま 蒸 蒸と蒸てあしし心まうのめたを来  
乃松山波をあしるし

人よわらませ 波こゆらまの言とまふと入みきてわらる  
せけふあとのむ也

ままの 足跡ひてうま船の雨たりあうと蒸乃又と也  
ふる波のなる足跡ひてなり

みくとき 双 ひとへのきてまねししうぬ浮舟  
のむらとる

つとゆら くるしゆふるりたる記事とりなり  
道よあきて 志進のうと又と肉と道よまみ也

みつとまいしと 志とつ悪むと双  
ゆ後と 志進と二人とをなり

志進のあゆみのひらちと  
人よま 志との姉<sup>アホミツツ</sup>蜜通して二男とみと也

ほこくみつあてさ 上も下もつくぬるあるとる



わて我をすま け事<sup>フツフリヘツ</sup>を夫婦離別をり

國も 今乃夫 ろを男ひこちの國れ共のふらさんた  
預抱の事なりん里

あやまちなる 人をあやま地なるとてひこちの女郎お  
か夫をも國中なりしをせらる

女のたいく一きうー 女乃ようぬ事とてきを  
をひけしこれと志述の姉<sup>アハ</sup>の事なりん里

あつふんり成てまを 浮舟れ乳母<sup>メト</sup>と志述の姉と親  
親となり

まゝと今よ恋ちるる 花梅<sup>ハナウメ</sup>の女れめのやと  
つろこまゝとこのれととりまや

何て又たぬまなりまをさしてまらのカ<sup>カ</sup>りまをり<sup>リ</sup>ととみ  
このうする預れ 不とくお

政事やあうんじとや

一町こ又一こおや

う人のおのひ 母うへなり

今ひとり 約後

いてやいとこけ ぢふれ法事

人れおくれり 意のひのへはるんとを乳母<sup>メト</sup>打と乃い

うくをりん里

娘<sup>メ</sup>だう ぶてうと云あり 不道乃仁也

あつれい 一類

うとね里 肉舎人と書し傳乃<sup>ツガ</sup>子也

いみくつけれ 文れ折 汝身よも如愛とれ<sup>ツガ</sup>也

わて我をすま け事<sup>ツツ</sup>を夫婦離別<sup>リヘツ</sup>せり

國あも 今乃夫 ろを男ひ<sup>ハ</sup>この國れ共の<sup>ハ</sup>うらさんた  
孫抱の事<sup>ハ</sup>をり人<sup>ニ</sup>

あやまちなる 人をあやま<sup>ハ</sup>地<sup>ニ</sup>なる<sup>ト</sup>てひ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>の女郎<sup>ハ</sup>お  
か夫<sup>ハ</sup>も國中<sup>ニ</sup>をり<sup>ハ</sup>もせ<sup>ハ</sup>る

女のたいく<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>まう<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup> 女乃<sup>ハ</sup>よう<sup>ハ</sup>ぬ事<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>を  
をひ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>それ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>婦<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>人<sup>ニ</sup>

あつ<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup> 浮<sup>ハ</sup>舟<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>乳<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>婦<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>親  
れ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>なり

涉<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup> 況<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>程<sup>ハ</sup>れ 不<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>お  
付<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>志<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>み

政事<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也

一<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>也

う<sup>ハ</sup>人の<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ひ 母<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>なり

今<sup>ハ</sup>ひとり 尚<sup>ハ</sup>後

いて<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>け ち<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>

人<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>くれ<sup>ハ</sup>り 意<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>乳<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>い

う<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>に

ぬ<sup>ハ</sup>だ<sup>ハ</sup>う ち<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>あり 不<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>仁<sup>ハ</sup>也

ち<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>い 一<sup>ハ</sup>類

う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>り 肉<sup>ハ</sup>舎<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>偽<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>也

い<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>れ 文<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>折 況<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>愛<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>程<sup>ハ</sup>也

たのまききえて 意

即くうゑるありたるなり 史記 忠臣不社二志 貞女

不更二丈

あのれとて 忠臣の後と相續しおやうなる相なり

ぢうじ 雜事

あのごときひじやう 忠臣の事也

ゆくろうれ 忠臣の事とぞそろく思入玉

まゝや 忠人なりたるよりすうなるをうめされ

と字舟へパー上や

めれとま うと将軍の云とすてゑる

ぢぢぢぢ ぢぢ

こけのみさおろ 忠臣ありんるの日をいつら松の志乃

若乃とていれて物とさう思へ 松蘿の事と云事あり

ひうーハ 海より田川忠事忠人より可法丸

若津よは忠女ありるよと忠男二人あり一人ハそれ

國の男一人そのつひの國ひきまひやうそそ女つひ

うへへとも忠臣生田川乃水香を勝負いませらるに

二人がういあてらるきて女川よ力をかけし也

河二委 又大和物語おもを之

恒依ぬ我力かけてん津乃女の子田乃河ハ名にうそ

とれ 若乃二男同聘一女也 娘の嘆息曰く女之力ハ易

穢也 若乃二雄之志ハ 若乃二雄の志乃 若乃二雄の志乃 若乃二雄の志乃

拉河其壯士等不勝哀頽之至者際而此他款三首娘子  
字曰縹兒 万葉十六 ころころのるす愚をいぢ

人わりへ 浮舟の力

この死 大やう

れうのふへえ ぬ中こそし長あぬおろろく力哉ふ

あんなに思ひゆるとなり

かく 友お

とうたい 灯臺

清つらづりい 久く乃紙

仰つらづりい 羨みこのうすやうとつらづりい  
とこのい又羨みとつらづりい  
とつらづりい  
このむのるにぬ出りつらづりい  
これ事と思ひや

あが志 我志

びなりと 我志をむあ——よせおみらあ——思ひぢ

おとゆへつらづりい

ひさとげや 志のまざ 後若

ぬらう 不用 今般やなり

やうてさもぬい 来へ乃連の夜自志用をせしとや

めれこのりさと死 きこゆるつらづりい

たゆみ 大夫 お志守り

あといふ 思われらるひん

守家一犬遠人吠放野都牛引續休 河

つこま死らうりのあー お志守り

抄阿其壯士等不勝頼之至者際而心悲泣に首娘子  
字曰縹兒 百乘十六 ころころのるゝ愚をいぢ

人わりへ 浮舟の力

こめだ 大やう

れうのふへえ お中へそし長ぬ必おろろく力哉お

あんなと思ひゆるとなり

かく 及な

とうたい 打巻

沸つとづりひ 久く乃紙

うぬしたてあつらん 白のむるをぬおろろく

紙のへしなうんよとなさたれ事と思ひや

あが志 我志

びなりと 我志をむあーよせみみらあーー思ひぢぢ

おとゆくおのりかし

ひさとげや お遊のまざ 後若

ぬまう 不用 今般やなり

やうそさもあひ 来へ乃連の夜自遊用させしとや

めれとのりさとた きこふるりやうん

たゆみ 大夫 お志守時

あといさる 思ふれらるひん

守家一犬遠人吠放野都半了續休

河

つこまれらるりのあー お志守垣とこさせらる

Handwritten notes at the top of the page, partially cut off.

めざらうとつゆ袖 川内がふんむりたとなり

うらたの袖襟おびつをなとちるなりらるるや

あしきうも 海内がふんむり鬼とあると まるまら

たを鬼やと一まわうく書たると 鬼祓をわこをふらん

とちやふもぬいせ さまあつて鬼たひふごんせやも

と一ま書たれあち

らるまうき 世上らうぬゆめとや

なひさけ 返さ

火あやうー 誰ゆ火りぬび書

つらふよのま 白むれうらぬあをふあうらぬとや

お返そりひきり お返は白くこひを成うーとや

まわりらるる後白へ集りらるる返して浮舟とあてれりり

つらまて 灼後へ来てや

むぎよ 期もびく

おびかこして りを帯 帯うらうけらるるあり

りのひ乃やふ 甚

まろーけまど

なげまわひ身 うまあひ ひきめや

ひのーれあゆも ちあも又むまの具とく吹つおれひつ

志乃あゆみちのけきわらん 赤々返死地人傘 赤ぬ

毛經文 屠前羊お事唐衣羊 牧屋食阿おれそみて

屠前へお具して行殺おやふとくうひて死地うらちの

清くきと吾等も余ら

うとふ事 うつらふ事 うとふ事 うとふ事

浮葉乃山きつたふとく 後撰中へおん家

たふしてあめまじり物とまうてまのりこをうとくも

とさうー 白水乃用をれ

所く 白ふと蒸と不<sup>ル</sup>放<sup>ル</sup>中へるれもさ合好ひてい

とせ地と不<sup>ル</sup>云<sup>ル</sup>てとの用持也

いむといふ事するん 解<sup>カ</sup>者<sup>ノ</sup>書<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup> 後<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup> 病人<sup>ノ</sup>死<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>死<sup>ス</sup>

ゆゆらとそ ぬ二のさううとあり也

のらよ又あ 来世也

うのうとふ事 心明也

とてきんら 補<sup>ス</sup>極<sup>ニ</sup>——この巻<sup>ノ</sup>教<sup>ハ</sup>よあそく

書<sup>ハ</sup>者<sup>テ</sup>てう

うゆらうとらうとむ 枝<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>付<sup>ル</sup>とをば乃りうて

教<sup>ハ</sup>者<sup>ト</sup>也

ひげ里の 人はあそんはききのまらうんなりひをま

むのうー里火にむわけり むああをさする事

うーや

見<sup>ル</sup>に<sup>テ</sup>くむ<sup>ル</sup>成<sup>テ</sup> 乳<sup>ノ</sup>母<sup>ハ</sup>れさうーゆりをすれとよ也

わまなくハ 浮舟乃心 後のみれく死めれとをく

まんうとなり

母<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>のうと也

後も 母乃著身之画とつひとこせし事也

アミキ



源氏物語抄卷第二十

目錄

うけろふ

手紙

後乃うま橋



アロツハ 巻

クケルハ花巻名の約ハト云ふも是レノリ  
わかリハ花住香如波ハ此巻母のめはとのすよの  
えよもろりつりといふせていふらるるよと云ふや  
巻の末ハ粗ありハ粗えまの字舟也の末よと

春日といふるハ叶るウハ巻  
と云虫也 蜂蟻等とのこと

く小田中のみしぬ虫月と此類もやけ春字舟乃波ハテの甚

聖コラ目乃るハ五月おろりて杖ハ成也 意女ハ才

叩コころん人れをきぬ 浮舟力とびけし此乃事也

ハ書極也 巻ハ末ハ粗ホありハゆり

油ウりウと云ハ 演松と云油種ハあるハ也

恒香油種ハと云也 何よてもなり

系キより 母の叩コころり 意女所よりハと云前目ミをし

又也

行

如るふ 蛭蛉

陽焰ハウをろふれもゆる春日といるるよ叶るけ巻  
のを蛭蛉 蛭ハとむまうと云虫也 蛭蛉おとのこも

く小目中のみしぬ虫けこれ類よやけ巻浮舟乃<sup>ハテ</sup>の基  
翌<sup>ヨリ</sup>日乃るりみ月おろりて杖成也 蓋女六才

叩ころん人れをぬ 浮舟乃をけしは乃事也

は書様也 巻れ末よ<sup>ホ</sup>粗ありりゆり

胸りこまれ 漢松と云胸裡りあるよ也

恒る胸裡りを也 何よてもけり

系より 母の胸りより 表見所よりとて<sup>ミ</sup>前目とし

文也

うの心忘れる 心道場後

は文を 母れのこころの文

こころひき 志——と成ふこと 世帯のひきしめりぬる  
夜なげまはるる——こふみと

抱へわくらせ 惹へれ事——定直道自なる——名ま心  
りこまれまの志をこのころへひのつんとする

よへれはるるなり 母乃うこへの世帯——をせ  
後う——又あひみんと成との事あり

めれをのりき海に 志をんとこふを抱のうれ——をせ  
のりき海や——せりのこまふせし

まおもれいけぬ ころとふうま世中——みひまを浮  
舟よめるとまへ——まき——なせ

りくくまうぬとも 文の心は儼ニガううせ新ふとある  
と死ぬ人れとむけぬ人

海とあり——浮船れををり——的顔目の面やひ海の日う  
治院うを傳教うま舟を足付——回日なる——と習を  
る——と也

ひとよも 自乃れまう——物なりをうしてぬれふ教の事也  
あひま

むけりま 光線ニガをう——をみけくまけりあつうの葉れ  
山をみまふとく

いつ——わうひあは浄ありらる 秘惹へうらり新ひて也

いひつらり

人のいみじく ホシテシタイシヤ 楚天帝教を人書といひつらり天也

帝尺を切利天乃皇或抄云云後大細之拘經海荒貴所

又吾相云のうせとて或いはりいりたれりすあゆと

ひたり もとら橋の古事一也

河宋玉る居原也招魂詞曰帝去巫陽曰主人在下我欲捕

之魂魄離汝巫与之

王逸楚詞章句曰帝謂天帝也巫陽林醫也 徐志欲下海

南村帝遣巫陽招我魂 東坡

人よまれ 鬼にまれ 鬼中もあまると云詞也

あやもやちりよ うもまれと乳母の云とてて約後よ

町書也

人のみりし中も 揚貴妃敗唐帝思 李夫人玄漢主情 原

あつらる 下くへうせぬるると云換折を叩くまま

時方とせそくろりうをしとる

ぬのいみしうせぬる聖旨也

あつらることこのまに連 ぬふと字との事と母そと

ぬりゆもなり

鬼やういつらん花伴物流の鬼もや一早うひり

と云いあう川のかく酒院の大細とるとの二条后 年八月武徳殿の松原を鬼食

鬼の人とたつて云海との鬼よあつと又後 日帝崩御と云

食人は別大は性同サニ日帝崩御して徴を 狐妖也 鬼の業也云々

いのり

人のいみじく ホシテシタイシヤ 楚天帝教を人書といひくさやう天也

帝尺を切利天乃皇或抄云古法大納之物 ニヤガワキニヨ 経涌是貴所

又吾相云のうせさる或いはりいりたれするあふを

ひたり もとり橋の古事一也

河宗玉る居原雅招魂詞曰帝若巫陽曰主人在下我欲捕

之魂魄離汝巫与之

王逸楚詞章句曰帝謂天帝也巫陽扶醫也 ヨセ 餘欲下海

南村帝遣巫陽招我魂 中 东坡

人よまれ 鬼にまれ 鬼中もあまると云詞也

あやもやちりよ ころもまれと乳母の云とてて約後よ

町書也

人のみりこも ヤラキヒ 揚貴妃敗唐帝思 テシイ 李夫人玄漢主情 リフジン 順

あふもさ 下くへうせぬると云振折を叩くまま

時方を走そころのうらむしと云

ぬのいみ うせぬる聖旨也

あふれことこのまれば ぬふと浮との事と母そを

ぬりのいみなり

をよやくひつと 伊勢物語く鬼一ひふくひてらる

江表云小松帝町仁和三年八月武徳敏の松原を鬼食

人乞州大怪也 同廿六日帝崩御と云

まらぬめく物 説文曰物妖也 鬼而棄也云々

寛平二年中脩中國<sup>カヤ</sup>於陽<sup>カヤ</sup>良者孰<sup>カヤ</sup>ふ<sup>カヤ</sup>く<sup>カヤ</sup>十二日念  
乃下<sup>カヤ</sup>る<sup>カヤ</sup>事あり

よのおそろしと 廿二のしんさまのめりやなとれたと

りまて<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>なひ<sup>カヤ</sup>け<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>思<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>る<sup>カヤ</sup>ら

ぢりびり色 甚のひのへぬふを<sup>カヤ</sup>妬<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>りや

と<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>な<sup>カヤ</sup>き<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>も 縫<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>ふ<sup>カヤ</sup>も<sup>カヤ</sup>け<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>き<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>也

る<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>出<sup>カヤ</sup> 退<sup>カヤ</sup>出<sup>カヤ</sup>也

る<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>也<sup>カヤ</sup> 字<sup>カヤ</sup>舟<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup> 秋<sup>カヤ</sup>つ<sup>カヤ</sup>ひ<sup>カヤ</sup>力<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup>つ<sup>カヤ</sup>や<sup>カヤ</sup>も<sup>カヤ</sup>る<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup>の

け<sup>カヤ</sup>ふ<sup>カヤ</sup>ふ<sup>カヤ</sup>の<sup>カヤ</sup>ん<sup>カヤ</sup>事<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>わ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>也

り<sup>カヤ</sup>ひ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>も<sup>カヤ</sup>き<sup>カヤ</sup>て る<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>は<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup>を<sup>カヤ</sup>沙<sup>カヤ</sup>汰<sup>カヤ</sup>い<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>り

と<sup>カヤ</sup>の<sup>カヤ</sup>ひ<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>も 句<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>も<sup>カヤ</sup>字<sup>カヤ</sup>舟<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup>向<sup>カヤ</sup>心<sup>カヤ</sup>事<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>也

や<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>き<sup>カヤ</sup>極<sup>カヤ</sup>な<sup>カヤ</sup>ぬ<sup>カヤ</sup>と ち<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>く<sup>カヤ</sup>も<sup>カヤ</sup>け<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>事<sup>カヤ</sup>な<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>し

句<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>ち<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>て<sup>カヤ</sup>の<sup>カヤ</sup>事<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>也

り<sup>カヤ</sup>ふ<sup>カヤ</sup>人<sup>カヤ</sup>と け<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>面<sup>カヤ</sup>白<sup>カヤ</sup>書<sup>カヤ</sup>様<sup>カヤ</sup>や<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup>へ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>指<sup>カヤ</sup>子<sup>カヤ</sup>あ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>り

句<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>て<sup>カヤ</sup>極<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>け<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>書<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>も

我<sup>カヤ</sup>之<sup>カヤ</sup>わ<sup>カヤ</sup>ら<sup>カヤ</sup>入<sup>カヤ</sup> 母<sup>カヤ</sup>也

た<sup>カヤ</sup>う<sup>カヤ</sup>見<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>け<sup>カヤ</sup> 日<sup>カヤ</sup>本<sup>カヤ</sup>紀<sup>カヤ</sup>詞<sup>カヤ</sup> 溟<sup>カヤ</sup>濛<sup>カヤ</sup>

た<sup>カヤ</sup>ゆ<sup>カヤ</sup>め 太<sup>カヤ</sup>道<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>太<sup>カヤ</sup>丈<sup>カヤ</sup>也 ち<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>ね<sup>カヤ</sup>を 夜<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>な<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>ま<sup>カヤ</sup>い<sup>カヤ</sup>り

り<sup>カヤ</sup>ひ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>と<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>也

は<sup>カヤ</sup>し<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>の<sup>カヤ</sup>ふ<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>て<sup>カヤ</sup>な<sup>カヤ</sup>り<sup>カヤ</sup>も 考<sup>カヤ</sup>成<sup>カヤ</sup>皇<sup>カヤ</sup>帝<sup>カヤ</sup>上<sup>カヤ</sup>同<sup>カヤ</sup> 我<sup>カヤ</sup>之<sup>カヤ</sup>黄<sup>カヤ</sup>帝<sup>カヤ</sup>不<sup>カヤ</sup>

死<sup>カヤ</sup>今<sup>カヤ</sup>之<sup>カヤ</sup>家<sup>カヤ</sup>何<sup>カヤ</sup>也 或<sup>カヤ</sup>云<sup>カヤ</sup>黃<sup>カヤ</sup>帝<sup>カヤ</sup>已<sup>カヤ</sup>僊<sup>カヤ</sup>上<sup>カヤ</sup>天<sup>カヤ</sup>群<sup>カヤ</sup>臣<sup>カヤ</sup>葬<sup>カヤ</sup>其<sup>カヤ</sup>衣<sup>カヤ</sup>冠<sup>カヤ</sup> 史<sup>カヤ</sup>記

室<sup>カヤ</sup>れ<sup>カヤ</sup>八<sup>カヤ</sup>鴻<sup>カヤ</sup>の<sup>カヤ</sup>烟<sup>カヤ</sup>乃<sup>カヤ</sup>衣<sup>カヤ</sup>事<sup>カヤ</sup>別<sup>カヤ</sup>は<sup>カヤ</sup>注<sup>カヤ</sup>と

人もなきと死人あるらうとて葬せざる例  
危

ひのちの びうひれ山の原に焼する也

いとあやしくれば 八棺 撥骨也也

うへへ 兄才也 非<sup>カモルニ</sup>行<sup>カモルニ</sup>

やとめす 素の人をめくするとの中人へまあさう

こ今あなうさ 甚のきめてあなうのこちめさく

りあーらと決り 感えとたり

へ道れまのあやと 女とえれれおのめち系<sup>ボツ</sup>也

いとくしとくまし ふう船乃のこを心合なりと系<sup>ボツ</sup>

まねはひてもめはもるまみ又あるんとう治より未<sup>イマ</sup>

言なるなり

よへ乃事 葬<sup>サウツク</sup>送<sup>サウツク</sup>也

大くくの太ゆい 伴信

とれたかや 姉ももなく成りひくゆいなり

ねもとすけらすう 白入への密<sup>ミツ</sup>通<sup>ツウ</sup>を<sup>ツウ</sup>のどく<sup>ツウ</sup>た<sup>ツウ</sup>わ

たゆくしとのぬ梅也

はやまをゆふ 石山よりう治へとあやしめをゆふ

ういそとぬ素也

まのあしと 女二のめいもま

うほれせも 浮舟<sup>ウヅナ</sup>規<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>時<sup>トキ</sup>を<sup>シ</sup>あ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>

うれとえとひり

めくれとら 姉も又今と也

のくれば人 迷ればよみて可也

佛ふよの 慈悲心<sup>ホウシノココロ</sup>あると書乃人よとてををどれくみて

世に乃平月みまほふのしるる也

慈悲<sup>ヒツジ</sup>の ありて 慈面<sup>ヒツメ</sup>白詞<sup>ヒツジ</sup>なりて 方便<sup>ヒツベン</sup>ありてなり

うのま 白

さんまよ於 白のよま思る心と慈悲の足知れ人

文のより 慈悲心<sup>ヒツジノココロ</sup>白<sup>ヒツ</sup>ふよの文のよ何と推量<sup>スエリヤク</sup>也

まの所とふらひよ 白の所<sup>トコロ</sup>煩<sup>ワザライ</sup>とせよ人皆とひれ人

或<sup>ナニ</sup>つま 書<sup>シ</sup>極<sup>キョク</sup>めま 睡眠<sup>スイミヤク</sup>とてまのこほきなり

のきろふれ或<sup>ナニ</sup>つと高<sup>タカ</sup>へ入相<sup>ニイソウ</sup>壺<sup>ウ</sup>の所<sup>トコロ</sup>乃<sup>ノ</sup>所<sup>トコロ</sup>子<sup>コ</sup>のが

所のちりり

足<sup>タラシ</sup>少<sup>シ</sup>ふも 對<sup>タイ</sup>面<sup>メン</sup>ありて浮舟<sup>ウフネ</sup>の事<sup>コト</sup>於<sup>オ</sup>思<sup>シ</sup>食<sup>シク</sup>出<sup>デ</sup>んとの心也

いりての心もん 慈悲<sup>ヒツジ</sup>の推量<sup>スエリヤク</sup>ありての白の心の中

ままやこの事 明<sup>アキラカ</sup>かたを思<sup>シ</sup>えりてなり

あのをを つかろうそよりみよ心也 相<sup>ソウ</sup>とらひし

慈<sup>ヒツジ</sup>ふよとて思<sup>シ</sup>う 歎<sup>ナガキ</sup>乃<sup>ノ</sup>心<sup>ココロ</sup>とて成<sup>ナリ</sup>る慈悲<sup>ヒツジ</sup>也

こよけくも 慈<sup>ヒツジ</sup>よりふかた清<sup>スガ</sup>心<sup>シン</sup>中<sup>チュウ</sup> 明<sup>アキラカ</sup>かたを浮舟<sup>ウフネ</sup>の

事<sup>コト</sup>を大<sup>オホ</sup>くこに思<sup>シ</sup>へると心也

わやふも乃 可<sup>アキラカ</sup>於<sup>オ</sup>存<sup>ソン</sup>在<sup>ザイ</sup>中<sup>チュウ</sup> 勢<sup>セキ</sup>人<sup>ジン</sup> 憐<sup>レナ</sup>媚<sup>メイ</sup>和<sup>ワ</sup>鶏<sup>ケイ</sup>三<sup>サン</sup>更<sup>セイ</sup>唱<sup>ショウ</sup>暖<sup>ナン</sup> 後<sup>ゴ</sup>

仙<sup>セン</sup>居<sup>ク</sup> 憐<sup>レナ</sup>於<sup>オ</sup>病<sup>ビョウ</sup>よむのをて次<sup>ツギ</sup>弟<sup>テイ</sup>とちのへたれ心也

まれこら 多<sup>オホク</sup>れも子のまをそよりたれ括<sup>クツク</sup>極<sup>キョク</sup>うをむつ

まーこの心と思へし 慈悲<sup>ヒツジ</sup>と浮舟<sup>ウフネ</sup>れれ思<sup>シ</sup>へると也



ひりりり 甚れ討自注心の白の中なりや  
中くの 大おなとよ成て中細と紐作を不滅となり  
る所境せー 浮舟れ事成経出所入と 白くへのめ  
りす心と忍せてなりし  
人れそー王 廿二とびのへし阿かや  
なまーひらり ちとあしとる詞や  
まあーめすやうも まあーめー及らりしとる  
とれつらーちとあしとる詞や中へ入りのよふ申  
あつとひり  
いみくも 甚ぬての心よふかかれ事うえあひれ事  
と紙お海し史をひり

あー 五ほり打とをくうと舟成とひり  
人なくをれお 人物本なるま<sup>本ナ</sup> ぶあ不遇<sup>ジ</sup> 傾<sup>カ</sup> 燧<sup>キ</sup>  
白皮文集 末れ句とびよこめく面白くしや  
けりり 兄弟ありを後のわざを事うくと平人  
の心よそつらうとへとまふあが兄弟なりと云  
ままそくあ人里ゆま 仍所新注  
かごこもり 世ヶ日れ穢小觸<sup>ユ</sup>や  
かたちて 浮舟意へりてー 船とんとの目れことひり  
者あつとく され人の音およし時を我ゆとらふ  
とるてはきまて  
おれまよあ ありに二葉院うりまかれむとます時

ふるれしなり

そのひまや 志のちもさへてきつらうがとくさすきし  
ま人のう人のひらさく 意もよとくひひつら  
とぬれしきの舞えり也

女志の 浮船うし似とると思はるる也

橋のま 舟橋れあこさき心ありて唱へまことしなり

下の心をひかぬふ所対面乃討りみされとく妙ひし

ととつめとくさるれハ用心ありし事とさる也

ひつらさけのん 婦志も心ぬりふ人又浮を方とたのん

あてうせり人と也 中志れ心也

とらをさしけく 志のまけなりす中志へ白の経路へる

めくしけりの 浮と中乃白へ果くしけりしと也

くしきくしきうらりし 女志れあこさ乃事なり

連のれ人く 女志門たまな也

あまうふ 志のぬ人もまなまき者ハたしけなりと意より

惚うしけりしなり

あまりの 白の所出中も不計ぬりけりし事と思ひ出也

ゆみせん 船橋とらひて白へけりしなり

志望とく 舟野もさうま舟と系へむのる船うん時ハと

ても文けつへけりしと心ひりの浮船乃うせ紗て中

くちしけりの心きりもあつれしはの中 詞也

裳とく今 けりし人おもきぬぬものとまら事ハ



たて服ゾウのまゆのはなもあやぶくはらうらうらうと用心に  
もしやうらう

それ夜また きぬとふれど一あてごとあやうらり  
ねるくと 大やうらびぬ

こねへえこそ かくあらん事こそあせ定たれ事なり  
あはれそらうよ事さいつくしあつていりもさ定ら  
るうらりなりひ定らる事よすや

あましの花 明也

あなたも 中へ悉も浮舟とよ水のりやなり  
このねまうとせ 浮舟のためや糸へ海へぬいこの耐  
の用意なりや

とくり物 備後うや

きぬくよ物させ 用意を多也

あの人おかせ お慈経也

うくねるもも 備後の心道ゆかり

ゆく海めやうなる ひのむの葉人つてもねほも不成物也

ゆくふあ〜 さあ〜んもさねもな〜と意詞

まをねもやい 何熱傷ヒヤクなれも自水決定のとやそのく〜

なとをさぬと意思る也

と死くみさて 糸へひのるんと糸結〜事なり

うのほくも山え ひさらの母れ〜とるま

た人ゆらぬ 怒オケシり不堪也

Handwritten notes in a different script at the top of the page.

けりや あつひなるかよとて思ふ事不所る心おかしと  
おひひてとしとたり

とろりお見せし 蒸ひことこのまぬりもわかろ心と也  
けのめやすしひて 思案する所也

さういふさういふ花は月よりちかんと申る  
のわりまへは落よりちかきせ給へし時より白ま  
いさうはつとく  
ては世事一も憂き事一と也

ひさるの事とや一はるとなり

あつういそんりー かなれはらとめておひやーさんて  
うよての推量也 スイルセウ

まはめのりーく 蒸餾釈なるし  
ぬりまき 力をなげたるといふんためなり

世中れ其度毎お力をなげても神のまきさうはるをまめ  
しとあつういそんりの不惑をーやたり

人ごと 人形はあつひのす相也  
ぬりーあつ 葬礼かくと海うのなり サクレイ

あつういそんれ 母乃孫女の子とたりひーととるおせり  
白へ乃思ひ事とて不きとて蒸れゆつとたり何と  
そーいふとつうみことなり スイシ

のわりおとく 産上へもやあつひの必死なるを不  
ま回とろーや

汽車の志ちと 切りうあまる所  
かまを又も 蒸し入あつとあつとけいなり

けりや あつひなるかよとて思ふ所不所る心なき入と  
おひひてこしとたり

とろりお見なす 甚しきことのまぬりともわかふ心と也

けのめやすひて 思案する所也

よのめやしく 東風の巻れるりなるこし

中しくして 志道中して涉世事一も憂ふ事一と也

ひこる事一とや一ゆるとたり

あういゝとて けがれ乃らさうとてあひや一とて

よての ツイルヤウ 推量也

文成めりらしく 甚訓釈なるこし

ぬりま若 力をなげくるといふんためなり

世中れ甚度毎ふ力をなげけて悔の事さうう淺るめとあめ

こつおううとてあひの不惑る一とたり

人々こと 人形ハあう一りのす相也

後乃う一とて サウレイ 葬礼なりと語うのなり

あつひとて 母乃 スイシ 孫女の子とたりひとてとるおせり

あふへ乃思ひ事とて不<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>て甚れゆつとたり何と

そつとつとつとみことなり

のわりあつとて 産上へもやあつとつひも必死なるを不

甚同とつとや

汽車の志ちと 切りうあまる所

つ進を又も 甚し人あつとあつとけいなり

Handwritten notes at the top of the page, possibly bleed-through or a separate entry.

ついでぬめりらん 又自殺若殺生之随ズイ也と云々

うのせ うのせ見也

うのせ花うのせうのせ見んハ重なり抄よしほ氏とてなり  
いれりうの海まじりうの海まじりうの海まじりうの海まじり  
わつらう

ゆりりれええり花いまくーうの海まじり  
子うの海まじりあへもえりぬと云

さねつと事 浮舟れるりなりを別事やも初人とも

年比ふ 年未れ無汝法を足ゆりひりひりひり

せんと思ひひーをとせね又れとあひもあはうる船の

必海にひりりの子ともなうーはみんと也

いたうも觸ゆらすと そのと云々の穢あはらすとて使

よひす人とも

うのせ花うのせ事 まくくは使なとあうんとせ不

急町ヌヨリの便とゆつらんとの命のしかり

年比をひかうさ 年比をひかそれ後者もうれき方の

程と思おろくもわもをさうとてま

らと乃葵 年比をひかそれ後者もうれき方の

うのえりー 浮へと思ひてとて一帯也

らんさい さいやくやまらかなる所と屋角ヤサカクとて

死人おりのさんための用さう也 班シヤク屏シヤク常由位又位の

人常用之 乙の服若為屋常縁シヤク常由位又位の

かど一れ帯也

まはれりうのせうれ ぬいろうかたあうん時を

いふ花自まひ人とうちうを思はつらうり  
いふ花自まひ人とうちうを思はつらうり  
いふ花自まひ人とうちうを思はつらうり  
いふ花自まひ人とうちうを思はつらうり

つゞくとぬめりらん 又自殺若殺生之随ズイ也と云く

うのせ うのせ具也

家小もしりのま 觸穢スエニとてなり

あさあーと 所文言

たつて 子をたりの道のやまなり

さねつと事 浮舟れる事なるを別事やも初人とも

年比ふ 年未れ並汝法を足ゆる何りひりてん

せんと思ひてをとせね又れとあひもあつはうき船の

名流にひこちの子ともなう 流みんと也

いたうも觸ゆらすと そのまま美の穢よあらずとて使

よひす人を

つれづれの世事 まんくは使がとあつんととを不

急タヨリ町の便をゆつらんとの命のとなり

年比をひがうさ 年流よひかそれ後者もうれき方の

程と思ふくもなもなもささるくも

此の乃葵 年流よひかそれ後者もうれき方の

うのゑり 浮へと思ひてとま一帯也

らんさい さいやくやまらなる所と屋角サイカクとて

死人おりのせんための用さよ也 班ハシ屏ザン若由位又位の

人常用之 乙の服若フクザイ為屋若イサカ縁リキ若人班屏ハシザンとてすもや

かぞへれ帯也

まは流るるわさうれ ぬびろくたあつらん町を



もあーと有り

何れおとを ゆ人も人うとせきておとあひ事  
せんとも

しくなる事なきゆゑに 浮舟のゆめりひりひい  
るれともなきとせ

ゆめりこれ ひつちの守の女といふことなり  
ゆーともん お方の旅たびのへとも

よゑ人の ゆーあゝとてふが別くゆーあゝ感かんす  
仁と有り

よゑをれもせー 浮舟れぬせれゆめひゆりとも尋さる  
よゑのゆめりのあやまらうとてふーゆめひゆりとも尋さる

尋さると有り

人乃そー王 人れろー王ともゆりく尋さるゆり  
とむつひゆり

とてまゆけても 浮舟生死ハ迷まるれせ尋さるゆり  
務たろー可成と思ひての流す也

六十そり花三代実録云貞観十一年七月五日辛  
未定六十僧於法雲殿限以三日轉讀大般若經  
外六十僧と有り例なり皆大般若經終後のた  
めく又御中護の佛ゆよ六十僧結せゆめゆ定  
例也七僧も六十僧の中よあつらふ

か  
おあてく九七僧もひゆり  
ゆめ定例ていれいなり

あゝま 新羅 けは事にならぬなり

かゝるがへく

あゝま 新羅 けは事にならぬなり 母の心

もあーと有り

何れおとを ゆくも人よりとせしめておとあひ事

とんとある

しとけり事なきゆゑに 浮舟のゆかりひらひら

それともあるとや

のりこれ ひんちの守りかといふこと有り

即ちよみ 小方の旅のへそとある

よゑ人の けりあつてさうが別くけりけり感ずる

仁と有り

それこれとせし 浮舟れぬされ時めひゆりて尋らる

あつてもそのあつてもあらうとてさうさう思ふ

尋ねよと有り

人乃そ一王 人れう一王とさうさう尋ねよと有り

とむつひあくる

とてまけても 浮舟生死ハ未定なれ共存せむと祈

禱す可成と思ひての流るや

六十そう 六波羅蜜又六道おあてく九七偈もは内子

へし 考み大般若中陰の定例なり

あるしし有り 事なめく有り

とくま 新羅 け流事にならうとあり

けりあへく

清すくせるを有り 母の心

文のうへ 中一巻

七僧れまへ 僧食のり 七僧法會を四十九日 妙事れ

七僧花七僧のまへ 僧食のり 七僧法會を四十九日 妙事れ  
日よれよる 禪師 續師 咒教 三礼 明散 花堂 達  
これと七僧といふ  
あつらうぬん 花をい白あとん

一へりり  
船の事を也

うの敷を 煮ぬ人れ姓<sup>シヤ</sup>紙書あつらふり

きさつれ文 的る中 文もぬらうの 或るうせぬる

狂服を 六条院おれり ますなり

れおくと 煮もりり

二文の 明る中文のぬ敷や 或るうふ乃式アツれ<sup>チ</sup>開<sup>チ</sup>や

あのみ 白

小さいおやう 一あれ文のふ乃ぬ煮れむの事<sup>シヤ</sup>ぬ人<sup>シヤ</sup>

これまを 白

しんま じんま ね ね ま じんま じんま じんま じんま

しんま じんま じんま じんま じんま じんま じんま じんま

おこのさーを 煮にけらるる白くさるるまひうん<sup>シヤ</sup>

海めん 煮 小宰桐り白ふにむつよぬを人うりまくれ

たれとうかろのこるまの事<sup>シヤ</sup>なり

おく物おやー 煮れうる舟の事<sup>シヤ</sup>なり

煮るる身 小さいやう 小舟の事<sup>シヤ</sup>なり

とまふけらるるまの事<sup>シヤ</sup>なり

りぬたらし 引き不登 煮照院敷<sup>シヤ</sup>へ 招月<sup>シヤ</sup>禪<sup>シヤ</sup>入<sup>シヤ</sup>之時

文のうへ 中一巻

七僧れまへ 僧舎の子七僧は舎を四十九日、抄事れ  
この文より一こまり 廿二へなり

少くもれ人 白と意とうる船の事と也

おひひ乃さうと 浮と思ひぬふ所の事なり

うの敷を 意あ人れ姓シヤ成書あつてもなり

きさつれ文 的る中一巻も所ちちの成アつうせぬる

煙服れ 六条院ふれく一ますなり

れおくて 意もなり

二文の 明る中文の所敷也四あうふ乃式アつれシヤ観や

あのみ 白

小さい志やう 一あれ文のあ乃也意れむの巻紙人也

これまを 白

いひ づいひや 神さまく白ふとるむなるし

いひまむむ乃すくれんあひはくともむむ

かこのさしを 意にむるむ白くさるるさひんしと也

海め人 意 小宰相の白ふにむつらふを人よりまこれ

たれとうがろの志るさくの事なり

おく物あや 一とる 意れうさ舟の事となり

意さるる 小さいやう 小の浮船の事 籍シヤやさん

とさるるうらうらさるるぬゆいとる

りぬたさる 引さ不意 意照院敷扱へ招月鎌尺之時

vertical text on the top edge of the right page

後撰 草花のみち遠よりをたうはむとくを物たり  
まーや よも物も意よりをたうとかり

小宰ねしうゑをりをたうけとる也

夕暮 小宰ねむあゆ人可松町と也

つれな<sup>い</sup>とま まいつれ也 かなれ乃つれり世止れ

身と不<sup>お</sup>してあつる為人の上まてい無かあめとあ

とまてのせまれ 人のうんと意あまやかり

あゝ後さい 小宰ね乃<sup>よ</sup>つれと悦びして也

かへて 意さのちう乃おせへとまよる後いぬ人とま

志げりて 句

人うゝ 小さい相

みへ人うゝと うゑもあうりも也

なこてゆく ま<sup>か</sup>ひよまおとかり

され物も 浮舟をゆいまはへとくともうらまーと也

人志<sup>ま</sup>ぬすらそ かなれ乃ゆい思ひてまふとせ

ねてぬるる

蓮の花 夏小書うつを物思ひとまれらるるんため

八<sup>カウ</sup>蓮をぬる中一文字糸院<sup>カウ</sup>とてけりぬ人り南都<sup>カウ</sup>り

出仕<sup>カウ</sup>かれ共面堂<sup>カウ</sup>前<sup>カウ</sup>莊<sup>カウ</sup>を天<sup>カウ</sup>宮<sup>カウ</sup>家<sup>カウ</sup>北<sup>カウ</sup>河<sup>カウ</sup> 恒<sup>カウ</sup>枕<sup>カウ</sup>養<sup>カウ</sup>へ夫<sup>カウ</sup>台

家也 又日小十座り

又くまの目 花華也

西乃乃<sup>カウ</sup>駁 寝<sup>カウ</sup>殿<sup>カウ</sup>ま<sup>カウ</sup>く八<sup>カウ</sup>蓮<sup>カウ</sup>ま<sup>カウ</sup>し<sup>カウ</sup>や糸院<sup>カウ</sup>のゆれぬ入

あまのくにそく花あり結衣の白く胡座よそく  
やうくは世をまどりのあつてあつてあつてあつて  
いめまかりまうりう花二品のまればゆり

わしをいり

物まじりして ちうひまなり

なまじりて 八幡の故也

あゝやうらん 小宰おあうんとりり

まじりやうの 一羽を浄をなや

もまじりや 申くまれくまゆみしり

凍結もあしりる所

ひを油のあしり 延喜水司或曰凡竹水考起四月

日蓋九月晦其廿九日別一駄 以八題為式准一石二斗

又八二駄四題六七月三駄又曰凡竹申一之水考又八月

日四題六七月六題 今案水司六七月異司をの増し

まじりより 氣をなれ今物種ハ中文へまじりる

し水を用子油河海年中事よまじり異哉とくる

なやまじり 小付扱ひあるを

りまじりともこと せれ乃おあうんとまみぬり

り

海しつち 願方お前坂新久出 長根款得

まじりまじり 小宰お

物あつひ くららんと水を浄をよと小宰おれ

まじり可然

まじりやうする 人これ次考くの所をりまじり

まじりまじり 次小さい志やう優ふもの又中

白うすす物のゆを花

わしにみり

ゆきまじりて ずらひまきり

なごしるゝて 八講の故也

あゝやわらん 小宰おあらんとなり

まじりての 一果を浄をなや

まじりての 中くこれく一果をみり

凍招もあし

ひとゆのゆに 延喜水国或曰九能水若起四月一

日蓋九月晦其日九月日別一駄 八頭為一石二中

又八二駄四頭六七月二駄又曰九能中一水若又八月

日頭六七月六頭 今案水油六七月是時を増し

水目より気とを今地種ハ中文へまじりてあはる

し水を用子細河海年中事よまは異談さくる

なや連舟ふ付扱ひある

りまぬともうささ せ礼乃あおま人とをみぬ

一果をこれおし

海くふつち 砥石か前坂新久也 長根款傳

きりるまじり 小宰お

物あつひ くららんと水と浄をよと小宰お

ま—可然也

ま海わうする 人これ次舟くのあをりをまを

まにまよするあし 次小さいまを優ふ物又中

藤をのーらと所ーめて下藤をすのこよーと記すの

らるゝ 可きよ書らるゝ

乃こそせ 衆とせ

下を世の ありて世をのれてせと身出くる所

けさー花とこのゆいそさーらあつて  
清子とも引とてとつたのへあつたといふ

縁とも書にみらん後をぬいせ

しつとらん せんりあけをきつるとたんた人出まらん

とけり

ひと人も 惹きーまるとあやめりすーとまらるゝ

人不三とせ

ゆわりの人やまらるゝれ 惹の我とまら

つとめく 女二文

大或は花一朶あれはつらぬいとまのゆへに  
らるゝ花傍側へまのくーらぬすーとま  
とらていとら花はも小さのれ君の氷と一朶  
ありーとと思ひてつらぬのまのいぬつら  
下子よ花下子條のいとらひなまらるゝ海  
よんらるゝこまやうらるゝといふのまら  
ふ花田よそめらるゝ

や  
いふいとまむ  
ぬらうそとらるゝのーとら  
い思めとらるゝ

さあのかや 漢字李夫人事かかん

肉よまーし時 天子れとのゆひーとせ

下まお 一人お成り人らとそら書とやーとらとせ

一おのほ文とゆーと惹の思ひてけらん

進んだ文句

下子 白の沖 六月相違をり おとーあふち



藤をのーらな所ーめて下藤をすのこよんて記すの  
たるし 何きよ書らる

乃こそせ 索と也

下をゆきの あちてきてゆきりれてとせと因出くる所  
なり

たの大敷 意をうとくし縁とも書にみされ記すぬ心也  
りてさるん ぶんりあけをさるんとたんた人出まると  
とひり

ひと人も 意をーるれとあやめりすしとまらるん  
人不言と也

ゆわりの人やをならうれ 意の我とる也

つとめく 女二文

大敷の 女三文乃女居也

まうらく 傍側 あんうくかいと云はれ

あへるん 敷也 人れみぬあうとさるんーのーやん

ひりて けられあうくに意めとぬかなり

さかのきて 漢皇李夫人事なるし

ゆよまーし時 天子れとの記ひーと也

下まふ 一人お成り人らとては意書とやーとんと也

一おのほ文とゆーく意の思ひてけるし

進のれ文句

丁子 白ふの沖 六月相意せり おとーあふわり

先田夏をあらはり

女乃所とあるに 一 女乃所とあるに 女乃所とあるに  
あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで  
里路入り

あのはとお 女二

あやう乃物 女二とて 女二とて 女二とて 女二とて  
れよう 一 女乃所とあるに 女二とて 女二とて 女二とて

あやうくおとてうとて 中文の詞

うれうりも そとてうとて 女二とて 女二とて 女二とて  
のきうりも 意詞

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

あつとくおほく 白乃もいそいで 一 女乃所とあるに 白乃もいそいで

ひめまの 中へ文へ也

大納言 一筋文乃女房前の記

海め人々 中へ文意へむじのらん女房御経を大事  
と記也

人よりをむよを つかうの小宰おろしむふをぬれと

大納言 中へなり

文とよう 小宰相の白へりしるを打とせぬと中へ也

中へ 中へなり せれと中へ也

文もわらせせ 中へ文

この人へ 皆く所へ白れ好まむらふとせぬ也

いせあやし文 大納言詞

なれりしめを 祖母とも又母や人のりしとたり

文もつと 中へ文

らも也 大納言詞

りしとる 文流し得し下臺の事いふふとるおの

思ふく疑しとたり

とぞき ねそりし心也

大納言お勝 とはしるの又繪とまをさして心也

せり川の大お 女御種なり也

とと悉 十悉 又悉 何を用意のめしむる心也

とに似たる

お母しむひく 御経乃女へ文のまひし事しる也

三十一  
はらめをる

秋乃楽うま 心の也

のまてもそんたかへは ば并どなり

るれ人 物ねのひよて 娘志と思ふ也

ゆゑるも 中討あつる也

又まれ人 中きき

ひ乃やうふ 双比

めれとあの人ふきき 浮舟の若し 哀おれとれ

そのとがり

まきこれま 中文へと約後思立也

見まりし うま船う 船うらそるれとやまふとの女

あつ中入なり

のきろふのきり オキッ

やうものじまのうま 中あうふれ或うのわ乃兄弟

よ馬あましうや

ゆせうもの りきろふ乃女志と兄弟の約後同版成し

娘志乃ゆく 女一志の程らひとがり

あまの ウマ 女志とあつて官也

まほりり 海ゆうらとてうらめをめとる也

ちくま オキッ ばらうらうら 八志と或ア脚とゆ兄弟也

り オキッ ままも ばらうらとてきり也

春まもや 又式部乃ゆを世うふあまへとがり

我中の事なき 意入りの世をさしけり

あれを 浮乃自水とて けりし事も けりし事とて

しりけり

は院より 中文廿一文百と六条院に ぼくもなる也

あのみまじりけ 白

肉よりけりし世は 或部以て 服取中宮六条院におき

まゝしるも やすくしる時分肉中文は 泰と也

御案乃法 六条院の御事也

はみやう 白

初花のさへ 白けり 染を思ひ也

入たり 意を文たりのく入らり けりし事とて ぬがり

のの湯後き 白と意と 紙の湯後き 浮船れ事と思ひきり

沸すくせ 白ふくても 意おても よりらん物と也

文ハテ湯れ 湯後と白とテ 湯の油種也

たち出せし くりけを ぬがへり

ぬがへり 浮舟れ 腹の中なり

ひやもくわら 意美なることなる

さすりおされへりらん 物乃 換神を 一つんと也

やうく まへりわらふとひ 首冠<sup>シユビ</sup>もや

弁れれりし 女一文字のこの物も けりし事とて なる

人なり

うを 詞の意端 ひりうきおきま人のやうなる事

やきあけの 油の万子也 又あけ けう又あき  
つらうれも中く何とやらあると けりたれ白  
あて舟ふとら必なきてうらとけて沸騰きしきんま  
をかりまて文けうへんふとの答せあしんもらう  
とそや名なきおぼえまうけりうらうらとや答のひの  
りあしんぬも人のたしとまたれ討れむけう一え所  
なるる一

もつてあゆへあしと もけりゆへるれと受定りの情  
と意のともあしん言けり  
てなうい 女房衣の也  
ひりかたさ 何やもみしぬ花ともけり

女房衣言 意のけめをまれうけのふとら  
とけり 女房衣あけぬけにをらりきとあやなく  
あこの名をよまらし  
ひやま 美殿あられもいふとらまらうらとや  
あう一ふ さう一のうら一はたかんとせてあしん  
女房衣へけり

花といへし言 女房衣乃名はあしけりともけりての者  
よまなひのぬもとやけあまらうら美色とら  
しうらうら けりさあめめとけりともら  
今まうけりる 意のあしへあけ道れるまらうら甲  
まへともらうらぬ女房衣なるる一

ありやうる家おさかこし 籍言 是とつてしりあ

整エンけしすと思て卑下ヒゲして籍ツキキくふさふさり

振祿ヒロミしてあ 井 振祿して祇治ヒロミく清心のうりうり

ぬきさして後ケツキウ変定あまとなり

音のさハ音 意 心ゆ也

何りもつりめ 舟を人れあのーおまゝとて色ん

りあの上よ乃新お澄タシのまになしとうとせつんとて

りめ新く聖花とあふおれ人のさのちうたて面白詞

もや回モンタウ答ツギるり盡ぬましく何となくパーとる

とへるん ゆるなり

またてもの のを舟さぬせとらてるま

所相とちのゆへけしとま 只今あこれ女房前メノマエのうりあ

一まをれさうつ舞子ゆへあはれさうややけり

とあへて 舟りほまらうとるを皆をぬじあうんと

煮乃思食むと恥ハん

自氏文集

中オホユウついつて 大煮オホユウ甲カ寸ス心シン抱ダク苦ク統トウ中チュウ勳クン腸チウ是シ天テン

ありけりまぬの 煮れぬりひりり好ひとて

ま乃 句

りの成りこの中ね 女一文乃女音あ

れあや一だりさや 白乃向トヒ新トヒふおれあ女乃ぬきとて

名棄ナヒすも煮ゆりけり一とてぬく人

あのみまを煮の心 女音あを白ふつと心は安ヤスしんと

手文三

姫乃入りおろしく一もまよふとあやうも

おぼたうて 白れおぼくちあふとめなれてもや

これゆりきよん 女一まれのこゝろへう ぢがらふのじ

くーまをばり

まつれ 白れりまなく思食人ぞりおれ乃うこらひて白

の心とあそりうともやとをふは船なここのる也

ひもせあうん人々 英<sup>ジキ</sup>がらを果がれへひひのこもや

あれとくこい 編經曰 靴<sup>オキキ</sup>車<sup>クルマ</sup>五<sup>イ</sup>種 迷<sup>マヨ</sup>而<sup>ニ</sup>才<sup>チ</sup>七<sup>シチ</sup>不<sup>フ</sup>變<sup>ヘン</sup>心<sup>シン</sup>死<sup>シ</sup>

人の心も海一まきあつこくこもや甚乃心もつりま

んがらへし

たのの沸めこ 中一志

うのぬあうさ海 白と中志のめさう一あふ思るなり

つとひこまふ 中一志への好まひまふこく思ふてち

うこれひきんこあへり

すまを 好ま乃のこをいなり

まのれ西わて敷 女一まれれもせりこをならうこ

こるて也

姫志 秋の中まろりむろりまふなり

かこゆく 遊仙風 故<sup>コ</sup>將<sup>シヤウ</sup>織<sup>シ</sup>手<sup>テ</sup>向<sup>ムカ</sup>く 鞆<sup>タヌ</sup>小<sup>コ</sup>絃<sup>ゲン</sup> 再<sup>ミナ</sup>更<sup>ミタ</sup>狂<sup>キヤウ</sup>氣<sup>キ</sup>絶<sup>ツツ</sup>眼<sup>ガン</sup>息<sup>イキ</sup>

おる襟 人おぬこまろくねもをするやうお翠を引こ

抱山房の白れ心下お思ひて眼よみり向女一まりの

けりり急<sup>イサ</sup>げしと也 抱山房を張又成と云人向門乃



后マキよ一夜オノ遊ユをて思オモひを書カキらる流ナリよ付ツて山ヤマよ入イて仙セン女ニョ  
よあひアヒくるといつり流ナリた才サイの推ス量リヤウありたれ也世ヨ上人ニョウジン  
へくヘク他タくると心ココロ切キらる日ヒかへて塚ツツミ中ナカに鬼オニれレ通トる  
と傳ツタふるると云ク々々今イマ影カゲ鏡キョウ

は秋アキへきこのつとやゆらるる 遊ユ仙セン屋ヤの句クを合アヒて卷マク

たゞ 雲クモ良ラ 似ニ舅ケウ 潘パン安アン仁ニ之ノ外ガイ甥ニョウ氣キ潤ジュン如ニョ兄ケイ崔サイ季キ珪ケイ之ノ  
小コ妹メイ

あアのつツことと云ク詞ジくク書カキらる 女メ一ヒト又マタ一ヒト加カ流リるる句ク文ブン  
をオと也ヤ非ヒ女ニョ二ニ 花ハナお 女メ一ヒト又マタ一ヒト心ココロと切キるルゆユらるる也  
亦モ知チる也 潘パン安アン仁ニ晋シン代ダイ義ギ夫フ又マタ他タ舅ケウ欣キン勝ショウくクる也  
崔サイ季キ珪ケイ字ジを季キ珪ケイと云ク々々洛ラク河カ東トウ武ブと云ク々々人ニン勝ショウくクる也

仙セン女ニョとトかめんカメンなめなり

片ヘろロうウとくクこれ 是コトも仙セン屋ヤとトつて言クふ人ニン  
意イそ中文チュウブンの流リウせられし一ヒト又マタ其ソノ舅ケウとトなり  
是コトれ 中チュウ文ブンへ也

一ヒト又マタ八月ハチゲツと見ミ琴キンかカと云ク々々世ヨに計ケイふと也  
おオの乃ノ流リウ力リキの程テイ也 一ヒト又マタと云ク々々也  
里リち 律リツ秋シュウ 又マタ女メのノ一ヒトへヘなり  
心ココロのノ地チのノ者モノ也

女メ三サンのノ中文チュウブンと云ク々々けりケリと云ク々々也  
女メ三サン之ノ又マタ何ナニ門カド 朱シュ萑ハン院エン 女メ一ヒト又マタ今イマ上ジョウ  
回クワ事ジなりナリ一ヒト又マタ何ナニと云ク々々也

申へてもとたて 女二とて大町の思て一おまを又  
てきいりしとけり

これれまき 赤町の御女 玉うくの御孫ひ一カ

りきうふの赤町の也

あつこ二人を 煮て足付てゆめくきそをのけひける

品とけり

とてやをいふの人のいふ

一と言渡乃外と也

しと紫れかれ心と求おけ人と也 思てふしとけり

外をまきとせうれまけりともまけて思て

あも 女房衣乃うとけり春

おもひりうけさるし 赤けりへけり とらく意れは依

とあるちりぬしとまきの志を祈祝悪と也

なとくの 大しこ乃人めれくのあへしとひ意の心

よあしぬけり

りしとけり 赤町のと意と別ては御通なる向後と今を

ねむし御用事とけりけり

けふと 女房衣

おもひり乃 注をゆもを人おせんさ砂の松もひり

れなるしとけり

りしとけり 海めやの成すちを海よとのりまきと也

とけりてのゆめれすとの 言けりてを壺お人う

見この昔心とせ花を赤町のまけりけりけり  
まきとけりけり

申へてもとたて 女二とて大町の思て一おまを女  
てきいりしとけり

これこそ 或々の御女 <sup>カメ</sup> 玉うらの御孫ひり方  
のきうの式すじや

あつこ三人を 煮てはけてあつめくきそをのけひり  
<sup>キ</sup>品とけり

人志ぬひうを 玉のひうをとやいさよのいさよ  
てあつこいひあつこい事一さ言はれ外とや

いと紫れかれ<sup>フカキ</sup>深心を<sup>モトメ</sup>求めぬ人とも 思てふいふ  
外をまゝもくれそつりともまれて思て

あつこ 女房おのうともり答

おもひりひさるう一 言はれへり ところ意れは  
とあるありぬしとそまの志を祝言とや

なまくの 大いなるめれとのあへーひ意のひ  
よあつぬなり

りとり 或戸心と意と別ては<sup>レ</sup>通<sup>ル</sup>向<sup>ユクエ</sup>後<sup>エ</sup>今を  
れは<sup>キ</sup>用<sup>キ</sup>事<sup>キ</sup>なりとけり

けふと 女房前  
おもひり乃 途を切ると人おせんさ秘の松もひり

れ友りひくみ  
りとりなりと 海めやの成すちを激よりのりまとや

とかなへてのめれすとの まけつてを<sup>キ</sup>壺<sup>キ</sup>おん

群をきり捨ててもよろしくんまのきりあつくし  
とりかろ乃おもひつゆす思ふや

この人ろ 白ふのほむなり

きこそき 文の志をいふは子のりけまはる向後とや

又りそりう 芝程乃心あきる人あらん事多のらんとや

あやしくりうの事き 芝治婚志をさるや

あのもろあーや 浮舟を言持ふまーやうーやあはの

人をもみろうけきてとなり

ありとみてき ありをろふを蛉と云てもりなくとふ

虫也 杖背と夕日ふらひちりみはり芝のまれむ入

ろーらうへき味丸

あぶりのまのし 表ともうーやあはらうふれ

あふりのまのうふあゆる世なれも 夏乃月芝をまいて

照町をかなのねく水よりけろふうたの ことくてもも

のるまゆハ世あろあれまのる死の世ようまなれ

能因ふふとりのを治め春のむふとふ虫也と云

ねんていあそよりあ治めと云

連宗よむ乃季とくすうそき世用まひらる

半羽 九 以討之寒とをりてひつひと云討回所ふあり  
其二十六七方をりふれ始と同時に字亦うそく故聖  
日の事也其年著て次の年れますくのりあり  
それ比横川一よりのはと成りる討を相親し書しるる  
其廿六七方をりてりるり

なふり 横川直心院 源信傳弟に比せり

傳記曰傳弟若大和國葛城下郡人又若占於正親  
母清原氏也母愛天人下授一男三女也母愛返回人共可  
敬聖人死思之甚好は母令祈禱子息於親言長谷寺云  
之處着中傳來今与一珠是母不嫁妊子男子即惠心  
傳弟也成人後事縁登山出家授戒修學業既成

源義光傳弟 以下略河海委

いとこや 源信妹 長谷寺 祈禱の首丸

みくらをりてりくやふらん

直心傳弟妹 長谷寺 祈禱の時考必可其念之由信

弟桑須云十日山修之間自尼許示老病由德所

成今丁度對面大切 淨法眼目教之山修經

直心傳弟若桑須可其念也坂之由返答一折下松色お  
弟之慶與已到其傳弟進家蒙慶身之慶尼止既逝玄相代

與到傳義 修學院 房傳義心經七卷傳次以火泉

咒念加指惠心又身念比藏別獲十と云く 古事談

みくけりうし キンフツセキ 金峰山精進上人後教庭前ニ拜ス金峰

百度 トス 精進二年也

わくまぬまふ 小野人つれてけりへまに中津の小野  
れしきまふしつとつとつたり

こんあくめん 寛平法皇をやりぬけ相尋来蓮院の書  
ふきり 平木院別あつりあつりし以前六条院乃  
作法と人とりひつたり

庭ととり 申乃を相辨又まゑま也

大也り前 病人を乙方前ふりしきれともなり

作しきくしき ちんくくしき下法師をいませしカコシラ

見戸もすや用心のむなるる

うられりともありし 法師れあぬひつたりカミ髪乃むあり

そ方のあまのうらをぬとりぬるむらせんと也 花さ

お遠法師也 一の毛すれと云ひるや

抱双紙ふうれし物乃ふりあり

まの飾の人ふ 欽明天皇法字義深國よあゆ男とヤカン野下嫁

まゝる事し海よりつり不及引

かのわくま ねらうけ用さ也

こつし前 法師子前食相を調するふひニ秘ニ辨ニするふと

まふくや思ふらん 法師れむら 垂及シ化シるりニ又ニ云ニる

あさむさく 髪ニてなり

あうしひ 死人たをまけるふりしやふ

ひつらと一あけて 老乳<sup>ニシ</sup>たる所也

やつと 俗<sup>ソクゴ</sup>謡よ云換ふりひてねとらふもあはしく相れ

めこへむをへるなり

下<sup>シタ</sup>りのる <sup>シメテ</sup>ひやと云む也

こころのおも花大本の下は居るる有よ本玉  
のちとまつけたり  
あやうせられ花領あり  
人よもうこられて花人よたもくれうらん  
めよんこく花らんくく

監と云繪物<sup>エ</sup>謡よまき  
しや月鬼と云く日記

ひのさき海を りりく一まとまのこ一たきまじと

みするなり

ぬりく 浮舟<sup>ユフネ</sup>がひけ一聖<sup>ヨウ</sup>日のぬ也

人にむき 人ろく<sup>ヒト</sup>に遊<sup>ユ</sup>るん

花<sup>ハナ</sup>謡よ 或<sup>ワカヒ</sup>被<sup>ヒ</sup>悪<sup>アク</sup>人<sup>ヒト</sup>遊<sup>ユ</sup>とあり 悪<sup>アク</sup>人<sup>ヒト</sup>ガク<sup>ガク</sup>フト人

よこま海乃 業<sup>ノ</sup>師<sup>シ</sup>謡 丸の横死と出せり

たいく 退<sup>ヒ</sup>く 毛<sup>モウ</sup>切<sup>キ</sup>と云む也

浜車<sup>ハマクルマ</sup>をて 厄<sup>ヒ</sup>志<sup>シ</sup>只今<sup>イマ</sup>浜車也

何の 何の<sup>ナニノ</sup>人<sup>ヒト</sup>く一と人<sup>ヒト</sup>をま一と云詞也

志のく乃事<sup>ノコト</sup>るん 俗<sup>ソク</sup>部<sup>ブ</sup>乃<sup>ノ</sup>詞

をれの寺ま<sup>テ</sup>く 妹<sup>イモトハツセ</sup>泊<sup>ト</sup>瀬<sup>セ</sup>よ<sup>ヨ</sup>と<sup>ト</sup>愛<sup>ム</sup>恋<sup>コイ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>一<sup>ノ</sup>り<sup>ヤ</sup>

一<sup>ノ</sup>年<sup>トシ</sup>は 俗<sup>ソク</sup>部<sup>ブ</sup>乃<sup>ノ</sup>妹<sup>イモ</sup>を<sup>ヲ</sup>兵<sup>ヒ</sup>衛<sup>ヱ</sup>と云人<sup>ヒト</sup>れ<sup>レ</sup>事<sup>コト</sup>を<sup>シ</sup>し

の<sup>メ</sup>女<sup>メ</sup>を<sup>シ</sup>失<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>道<sup>ミチ</sup>心<sup>ココロ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>尼<sup>ニ</sup>み<sup>ミ</sup>る

れる<sup>ル</sup>り<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>み<sup>ミ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>女<sup>メ</sup>を<sup>ヲ</sup>中<sup>ナカ</sup>一<sup>ノ</sup>お<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>あり

けこころ也

ありさ海<sup>ウミ</sup>みぬ 人<sup>ヒト</sup>と<sup>ト</sup>足<sup>タ</sup>定<sup>ヂ</sup>の<sup>ノ</sup>後<sup>ノチ</sup>みる<sup>ル</sup>人<sup>ヒト</sup>を<sup>ヲ</sup>お<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>一<sup>ノ</sup>け<sup>ケ</sup>も<sup>モ</sup>あ

ひつらと一あけて 老れたる神也

やつと 俗語よ云換みりひてねとらふもあつらん油れ

あつとへひをへるひり

木玉の鬼 木部の及化の心やと云む也

目之けをもなつるに 朱乃盤と云繪物燈よまて

又珠標よ目せ見と云まししや目鬼と云く日記

ひのきと海を つりくくしとまるとのこしと云きまじと

みするひり

ぬりくく 浮舟をひけー 聖日の面也

人にをり連 人より此遊と云ん

流花燈よ 或被魚人遊とあり 魚人ガツフト人

よこま海乃 業師燈 丸の横死と出せり

たいく 退く 無勿折と云む也

所車よきて 厄者只今後車也

何の 何の入りくしと入りくをまーと云詞也

志のく乃事るん 俗部乃詞

をれり寺まく 妹泊瀬よと愛恋あつとらふ也

とく年比 俗部乃妹をた共流流と云ん此事よと云し

めめと尖てのなりこのあまに道心をおりて厄ふる

れらりみしとるそ女を中におと云人の事と云んあり

けいこらら

ありと海みぬ 人と足定ぬ後みる人をねそらうけもあ



あつる

祿有と 祿ふふ心造よびなり

いみくうれや 妹の尼の央一娘れりると思ふ

あつる

あつるのみゆる 弟乃のこまけりる能なるま也

あつるふらんとあつるを不具なりしれもなり

人乃心海とたまん 恨み逢人れあきまふ逢人不應言

あつるのみく 叩くなり

まへまらけ火を 葬送れ火也

文の取じまめ 姉志

ひめえと 廿二

うしろつふ分れ人 浮舟り 妹尼回車きり

をれと云ぬ 大ニ条園白の女 歡子尼よ成て大原り 恨

情しを付れ人 小野乃皇居と号きり 小野乃のうらなり

中居りて 申させん物と也

あつる佛花山こりりのらういあつるもあつる出れん 坂广壇城女子事り泊瀬まで

あつるを何さりあつるにけり

四日月 卯月 五月迄

あつる佛 僧部をりてつり

あつるをん 山下を 山内亦回と云ん

あつるをうりし白 さらへえりりなり

あつるをうり

あつる

祿有と 祿ふふ心造よびなり

いみくうれや 妹の尼の央一娘れのつらと思ふ

あつる

あつるのみゆる 弟乃のこまけりる前たるまと也

あつるふらんとあつるを不具ありしれもなり

人乃心海とたまん 恨み逢人れあきまふ人不應は

あつるみらくく ちくひり

まへまらけり火を 葬送れ火也

文の取むをめ 姉志

ひめえと 女二

うらうらふ分れ人 浮舟り 妹尼回車をり

をれと云ぬ 大ニ条園白の女歡子尼よ成て大原り 恨

情しを付れ人小野乃皇居と号をり 小野乃のうらなり

中をり成 中をせん物と也

あつるやくと 邪氣初誘渡 壇城故子事 五泊はま

れ瑞辰を阿さりふこくはなり

田こ月 卯月 五月迄

あつる佛 僧部を阿してつら

あつる山 山下を 山内赤回と云ぬ

あつる打すてまうりし白 ころくまうりなり

あつるつとまやうあ

由よりい

容顔

こころいぢや

くくくいびくいよ 経信人の事や

而目悉端嚴為人所喜見 法華経は喜切海也

佛之種後起也

何ぞ慙不顧自法拒受者

為業

もおほりれ共と若乃討なり

又菩薩摩訶薩不應於

説法云々若お女人説法不

齒笑ふ現曾臆乃至の法不親存况復餘事

人おろろわとて ころまうふる山まると

ひりーそれころいせー

或説云若深殿后皇后不やこれ時金降山より久修練

けり若奉ての持一なる平一愈と後中山より改く年り

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

修まらる人乃 ころまうの仁垂氣力あえ委細とチーの

をいりそれ花法花経云佛種後縁起云今果  
一切心法法の種子といふ八阿頼耶識は含花  
せり深縁の縁はあつて現行して佛を  
生ともなる物とたといふも本木の種の去地  
縁の縁をうけて生をせりうとて種あれば  
縁をたれを現行せと菩薩の慈悲ありま  
とといふもその人の宿因ありはとて  
いふ縁は縁とてうりゆえとてその世の  
もわづかたるや一なるうりゆえとてその世の  
て浮舟の事とてうりゆえと縁と縁と  
とつるこ

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

其の抄業と由向一て誓て鬼と成まり紺善鬼と云若お

市よりい 容顔 ヨウガン ころころ也

くくろびくいよ 経信人スレのすや

面目悉端嚴ヨククタンコウシツ人所喜見ニヒトニヨクミ 法華経は喜切沙弥也

かふりうれしんお 法華経 佛之種後起タマハコトキ起トキ

口述むさん 唯鐵痛日 云何イハレニ也 慙不顧カハリニ自法ラキヨクニ拒クサ受セ善ヲ

の性障礙スレトクキヤクガク慙ニ長ス忍ラりラるス業ゴウト

をあつらひを 戒を破事カイもおほりれ共と若乃訂ニり

かれすらに 法華經を承りお云 又菩薩唐訶薩ボサツ不應ハ於ニ

女人ニ力取能チカラ生ニ欲ニ想ヲ相ヲ而ニの送ヲ法ヲ云フ若シおハ女人ノ説セ法ヲ不レ當ニ

齒突シセウツ不レ親レ曾レ臆レ乃レ至ルの法ヲ不レ親レ存レ况レ復レ餘レ事ヲ

人おろろろわとて ころころふらふらとるる

ひりーそれころひせー

或説云若深殿后皇后不キレやこれ時金降山キレより久シ候ニ練ニ

ひり若カ奉テ即チ持チ一ニをレ平イ念ニ後ニ中ニ山ノよク攻ク年ヲ

其の抄業ゴウとエ尚カ一ニをレ誓テ鬼ヲと成まリ紺ニ鬼ト云フ若シおハ

后キヤキとシつリ一ニをレるノ云フ證ニ大ニ師ノわレん法よク教ヲ戒シ

結ヒひタれし紺ニ鬼トらしころろとるをレるをよクけし一ニ灰ト

此キ扱メ成テ法ヨらり其ノ後ニ法ノの所くレに成候ヨらると

云々 善ニおハふレ記ヲもみとる 大師ノの法華一を

るレよやいシ法ヲ寺上人ト勸メ上人ト亦ハ如シ例ト多ク之ヲ 河

よク程ヨク

法ヲさしる人乃レころろの仁垂カ力カあらふ委細トとしの

わらひり

いといみと ずほよとあるんをせしむる我思ひ出  
ぬ人

りときよの 罪乃人小陳とみしーと白と思しかり

りともりおれくしき ざろりならひ

りころりやめ 養生とてとやー並也

一とせたりぬ せたり人やもあつる所とや 百とせり

一年たりぬけくそつと我わらふらー雨敷よと也

天人乃あつらふとせり 町くや娘と行を箱つとせし

小家乃中目くらまき八月十五夜に天ふれがまーとたり

くくらのふ 小野乃尼への経

人のつてはけ まんを白ふとせしとて人の今討ふ

はれぬお妙ふ

あのおゆーも 大尼を

いしきよけお 妹の尼

物まのひて 田延時もつら時も龍と因縁とせしや

みーあつまらの ねのひおられて白

の夕音 双結お書らとけくま面白

ふふくころを あまを又うふ舟入心 思ひおられての

次れ討り可獲

虫卵の尼 小野尼よ宿尼也

ひりーも いやーとあとなり

おのひの山 意乃翠<sup>コト</sup>とあそびてわくや

おひびけるうれむ 町くらしさうらむなり

力をかけし音 ねまをねむのなる相思ひとのせしとや

我即ての音 あらねける心せ月申うあそび

部と可むぬ

あもさそて ぬわらそなり

部言 くと部人ふ似る人なりとやを肉み目の思ふ

あるんを花をこいあるんをこりいふまひ

あつせぬとえんこ ぬ前をこてうれ年うりふ

ふたうらとい花中おも小随才とりくま

ゆよりうて前のをまと後するま

あまのりや 宇治と思念也

年比 尼<sup>ニキミ</sup>公<sup>ミコ</sup>詞

心れうら 中<sup>ナカ</sup>お<sup>オ</sup>詞

後をるれうか 母<sup>ハハ</sup>後をるれうら恒<sup>トコ</sup>をれつうら

とがり

志<sup>シ</sup>こ<sup>コ</sup>ま<sup>マ</sup>と<sup>ト</sup>さ<sup>サ</sup>お<sup>オ</sup>く 兄弟<sup>ケイテイ</sup>友<sup>トモ</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>ら<sup>ラ</sup>う<sup>ウ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら

おあそびうさあそがり

まよき 首<sup>ウタ</sup>略<sup>リョク</sup>してとや

うふなひう後 今<sup>イマ</sup>中<sup>ナカ</sup>お<sup>オ</sup>ま<sup>マ</sup>事<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>

すいそん ひめと云<sup>イハ</sup>飯<sup>イ</sup>也 又<sup>マタ</sup>于<sup>オ</sup>飯<sup>イ</sup>也

ますのこ 蓮<sup>レン</sup>子<sup>シ</sup>敷<sup>キ</sup>盃<sup>サイ</sup>と結<sup>ムス</sup>中<sup>ナカ</sup>の<sup>ノ</sup>他<sup>タ</sup>盃<sup>サイ</sup>乃<sup>ノ</sup>名

おのひつり 甚乃翠<sup>コト</sup>とあそぶとわくや

おひびけるうれむ 即くはこころひなり

力をなげしき 朽末を散りなる相思ひとのきこや

我即くこのき ありんかむ心也月申うあす

都と可心ぬ

あもさして ぬらそなり

都言 とも都人ふ似る人なりとやを母お母の思ふ

人たまやあ 一をこれあり

世申に 世<sup>ヨラチ</sup>るうあぬ所をそとてこれ年ありふ

しる歌即くさん

これうらさひ 中お世代<sup>ダシセツ</sup>絶るを志<sup>サキ</sup>をひーうや

あまのりや 宇流と思念也

年比 尼<sup>ニキミナ</sup>云詞

心れうら 中お詞

信するれうが 世<sup>ヨラチ</sup>をるれう信者<sup>シタ</sup>をれつう

とがり

志こまよとさされく 兄弟<sup>ケイテイ</sup>友<sup>トモ</sup>あとのたうんこ

おあそりうとあとなり

とよき 首<sup>ウタ</sup>略してとや

ふふなひう後 よ今申おま<sup>マシ</sup>事<sup>コト</sup>とるを

すいそん ひめと云飯也 又<sup>ホシ</sup>了飯<sup>イハ</sup>

ますのそ 蓮<sup>レン</sup>子<sup>シ</sup>敷<sup>キ</sup>盃<sup>サイ</sup>と結<sup>ムス</sup>中<sup>ナカ</sup>の信<sup>シ</sup>盃<sup>サイ</sup>乃<sup>ノ</sup>名<sup>ナ</sup>

わすれしこと 子のるし とくめごとく形をれしふしな

うらまへ何れ思われまうしはかき

とまふしこと 半習志事しこと出度也

わすれ之扱と 又も習志事しなりひびるるしはゆきなり

志ろき一ま あやあやまきくれきりくくくくくくく

ひりくま 面蕪芳おくろそあり うう花田尼志事との

用<sup>ル</sup>笑<sup>ル</sup>れ かしひたることを皆あひれまこと用<sup>ル</sup>付<sup>ル</sup>也

わすれしこと思てかきむの心

らうれつま 尼公乃へ討志習とつたよりや

何まかあらん あくやも何白うらん世の人のそれ

りいさのふく死せよ

半習のやうふし住人れと思てり人住事也

人れ物りひ城 小野乃人の中ぬの物りひをさゆふとき

あーていらふれなり

取申<sup>ヒテ</sup>の言 舞<sup>ヒテ</sup>志乃子息なり

れやれもの 中ぬ乃又のふし 考<sup>ツ</sup>れ住人

ひうく てるうひへれ尼乃種

なうく とも世ふれときぬと親<sup>ツ</sup>達もねしと思ん

と我ひよて急うるとなり

りあうま 苗産乃格うんるま物と也

ひさみらふ 一向<sup>カウ</sup>ふ尼ひと親せふとなり

世とすてえんと 小野の尼れ事



ちんしれ 申お兄弟

女をよこさるまきま ころくしき法師をたがひて

きいあくとなり

ひりーまのくさき 恒を捕獲しし相を

さう所あむ 壺む かつあ成共あつんじりてきよ

お平ーしきをるそとなり

しとくま ことくとあさあるまきと也

あさしれくさ 申お相名前とあさなるとさむるま

うろしう入てき 尼云 尋せくぬひれけりうわのひ

みされ ころとなり

こしき け度きむと申おむ

まつちの山 班と申まつちの山の女麻呂林とらき

取人をまらー 心きお習の心志う孫くしてうらとけ

ぬきふれゆそ林ゆと整人のあゆうと也 け氣可法

お習乃志の中おれ人よ契りてあるうと思ひこころ

と云儀わり何まり也不似容と不可用也

たのめん 申おニひ乃討面

申ひひあ 申お又けああ申入るる

申くしーる 申おお思ひあまをむらよけなるを不

似合てけしひ秋針ふじわうと我ら相恋と也

うしー うしと也 氣とみておらんとすれも女郎歌

うたまあまのぬおらうありたれ

世とくあふる 世とくあふる 世とくあふる

海虫命の人らへ世とくあふるを哀なるをとなり

いけらあはむ 林とちまはれるの詞を中將より林より

きりぬんときし詞をまの詞してあつて

危悪れぬとびを引ちのをもせよとく首を面白

おひ乃言 群を成共とおもつて又救れよおまはれた

るとなり 林はくおん松虫の群をまを救つて

つとふらふん

名流なるを 双地

林はくの言 ひりあつて中おれとひぬくやも深の言

はとよほなむらりたぬを習をのこつおきくそと也

岩を今めたふる人こそ面白なりと尼ひよせらるるや

又後指の次るれも深者のおよぬれたるとをけのこち

うとい儀可然たやう今めたふるとあふおへ高也

まつらうり 尼乃あふてなるむのひまきれとき

とつふり

うらちもれ ちかむむのあつち

のきりなく 半あつむのひ中

麻のなく喜よ 山里ま林うらふりひしけき麻乃

なくはよ目とさまうけ

おひのこの 尼者女のちと中おれひ也

みしぬ 在のうまめみしぬ山後うらふんわりふ

人こそかたかりたる と思ひとちかたかりあはる

あつらん袖を思ひとほくしてけりなり

あたる扱を けりらよの目と花と紙なる一なるひきま

らんらんりんせもや

なふのをちなる 引き可ましくさむけりなり

笛は祢りへ 尼アキキニのむ されゆへ舞をまけりひらや

つひはさへんを

ぬりえ夜れ音 あつら扱の言張うきて ぬるともやく

ぬりふとたり

ゆくるん てなるむのとさへりひとれめきて

山のいひき 園子ヤ乃板イタすまらんむまかとのゆかりしも

ありややや 園アりじこのるる

いりてろの 女の尼へ云詞

ウツラウツラ花うらふの物語もいけりあり京 女房達メノボにへ云詞 くらも

のせよちふしそと云うとくある通せりなり 今 くらもと茶り

女房達の尼へ云詞云やニを女房達へ尼の云詞 世よ海ウミ流の女をなぐ成し

成中ナリナリおねもるり

らんしきやう 女メれヲ個コ子シ林シ也

みまうしよや 西てあつらるるとなり

今やうのねさく 今扱を世上ふらのまねお中へく

つらさめりらきと申お乃まむひの尼を今やうをひ

ひらきとめくなり

人こそかたかりたる と思ひとちかたかりあはる

あつらん袖を思ひとけくしてけりなり

あたる秋を けりらよののさと紙をきりかへむき

らへんらへんせむや

なふのをちなる 引き可ましくむけりなり

笛は祢りへ 尼アキキニのむき されゆへ舞をよめりひらや

つひはくへんを

ゆりよ夜れ音 あつら秋の言張うきて 毎とよめく

ぬれふとたり

ゆきさし てなるむのとさへむとためきりて

山のふたき 園チヤイタ乃板イタすまへん乃むまかとのゆきしも

あつちやや 園イタうじこのるる

いりてるの 女の尼へ云詞

伊つらもそたち 女コソ乃違イタれ尼へ云詞 くらも

こそも同じ少ありあきてまことなり

あつちやや世ろ 大尼をせよ跡イタの女をなく成し

成中イタおねもなり

ちんしきやう 女イタれ個イタ子イタ林イタ也

みまうらもや 西てあつちやうとたり

今やうのれさく 今様を世上ふらのまね中イタく

りたさめりらきと中お乃まむの尼を今やうをひ

ゆりよいめくたり

松風 香風ハ教琴 百詠通心也

念佛あり 万子家生皆捨離専心願向酒方

とのそりのくそ 皇殿の事名 仔細とも言 母とて又

まゝの宮と事考れる

舞やめける 皆乃言律不念あや

なきゆら地ましく 笛のやうのを和琴うらうら

て引る

こゝ兼とも 唱方の事 笛れ者のまぢのうらうら

ゆるそ流りりらるとあけのなりらる

今乃せり 鳴きを不たらる

耳ののく 多うれらぬなり

まれのこみ 扱うらんとて也

よも 中おりの又言也 若れ事又よ習志可とあや

わすらまぬ事 尼悉乃女 又いまのまかすひらり

中おあなり

おやし志あけりり てなうひへる

何のりやあるを句 非あむむのわひらうと云一があり

うまはらきよてとやをしへくのむえくの不入が

を尼とりりむねし

いとくまひらるを 尼云

笛のほよ事 笛れ者う 扱者乃志のまてぬらうとあ神

れぬれやけり

あやかし 夢を世に ぬへくと大尼へ入るや  
まのちのあましくなり

めつろしうぬ 又あられ世事るれもなり  
秋の葉よをくらぬ 浮の心中 志のくま信じや

又それ程くろく吹とや  
見ぬり 共戸心おとの事なり

人の中も思ひもなす人さ 尼ふなり人となる  
九月

のさゆへ ちろひとさそふなり

たひく てなひき <sup>リキ</sup>利生人也 上りたるをり

今も入不所むと心也

ちろひて言 てなひひ ちろせ川 ちろ海は人

二がま秋年をるそ 又もあひみん 二があ秋年ぬ

とも又ちかへしう魚り ともむくよめり <sup>サ</sup>交も

ゆりーとや 花もお遠丸

又もあひまこもん 中言を女習心とをまちりるや

あやかし 又も花 二りとの秋の白まうりちねの 心也

とも我ひり 此娘 <sup>サ</sup>と思とるや

志のひてと <sup>サ</sup>糸箱と志乃へやもなり

あさまりと事と 男上れる

それり人 今尼ふよのむ人となる

いしあやしくうらむしうともれぬ人と 和翠の時

あやしき 身帯を世に——ぬんりと大尼へ入るや  
まうらむのあましくとたり

めつししうぬ 又あられ世事るれとたり

萩の葉よをたらぬ 浮の心中 志げく書信じや

又それ程くうり吹とや

見ぬり 共戸のふとの事ななり

人の中も思ひもたす人さ 尼おなりぬへとるや

九月う

りさぬへ ちうひとさそふなり

たひく てたひを垂利生人<sup>リキヤ</sup>也 上りたるをり

今所へ不研むと心也

ちうなりて言 てたひひ ちうせ川 ちうほけへり

二がま松年をるそ又もあひみん二があふ松年ぬ

とも又と中へちうぬり——と云ひよとよめり交<sup>サラ</sup>も

ゆり——とや 花をね遠丸

又とあひまこもん 中言を女習心とをまちりるそや

ゆり川の言 そやごち 尼也舞

あなうむの心をたし縁とも裁ひり——此娘<sup>メ</sup>と思とるや

志のひてと 糸箱<sup>サシケイ</sup>と志乃へやもなり

あさちりき事と 力上れるり

それり人 今尼ふとよのむへとるや

いそあやしくうらむし——とこれぬへと

和翠<sup>ワズシ</sup>の時

あくるわさを志すふとましし町乃心をうきてなり  
わきけと思ひて 女お尼の心習へんをさせやうと  
させいとと 基聖 備前根良利 肥前國茂津郡大村  
人也 出家して名を定むる亭子院の上法師亭子流皇山  
をもしけり町乃とりけりけり大和地種うのせ  
ゆり基乃よまなりけりて基聖とつり 延喜十三  
年一月五日基聖を勅賜基聖之と

抱朴子曰園基者世謂之基聖  
名也或書曰唐竟造基其子丹朱一説曰不姓基也  
國之町云々

およさす 祐 毛福 ませりとういれまとも牙

尼は勝と信都に於て利のけりて尼はふかつ信都  
すけけりとりてけり

ひうん言 心習れけり林乃感ともくかとの力なり  
縁中も神をも春の早下しつると表このりて後向なり

志すけりん 業れ業よとく初教のよ成まこと志みそけく  
ともまろくおめや

れもきぬりてつりとも 心法のは乃一なるんねり  
ますとつひつりめなり

山里の言 中をれつりて相とふ人を又おひあひ心  
おめよふなりひる心と思ひぬと根らとめめ  
けくうとつりめり



うまゆとま ちり 愛物おりのひとりのまのませよ  
あはゆるれともうの力をけりてまはる人えなり  
あてを口まよりの思ひあると交定ケツギしつふよとるま  
おりのまのぬ人よりと 世は不意人よりもうとましく  
心合ココロを何事うおゆこそしつるる人うとせ

いひまあるせたる 面白書らる

ゆるりてあやうらして 無平説 力をかりんとり  
人代橋のかりき成あふるえとてうらうらと依ヨり  
云橋らうふみれ力よお似らる力をかりんとせ一人  
の志尼よをちしるひ相叶なり

あもき 女童

ゆるり人るまや 女まらうられたりとも双地フタツチしる

むのむ中ナカなうけ季

志シふみ おゆらまきこ

ひいよとを 駒ウマのまらけなり

申ウタガハシあうまうと 冥途マイトウとて鬼オニお交マシし思ひおゆ

まぬしと 草クサのまへむのつんと事

小橋のまを花白ハナシロまやうとゆともうらうらと  
たらしまのハナシロ小橋のまはよりうらうら

い

ましはる海 意イ

まの鳴ナと けキ基キ奇キれレま 山ヤマまのマらうくと鳴ナ群グンなけ

はよのともま母ハハのともななり

こもくわうらうらう人花ハナこりたとら

うまゆとま 子母 聖物<sup>ウキ</sup>なりんといふものき世より  
あかぬるれともうの力をなうてまたま人を  
あてき口達よりの思ひあると<sup>ケツキ</sup>変定一しあふよとら  
なりひまぬ人よりと 世成不意人よりもうとまうく  
心合<sup>ハ</sup>を行事うおゆこしし流るる人いとや  
いひああせたらと 面白書らと  
ゆるりあやうらとて 無不説 力をかりんとり  
人れ橋のかりき成あふるふとてうらうらと<sup>ツリゴ</sup>後隠し  
云徳らうふみれ力よお似らま力をあうんとせし人  
の老尼よをちうらむ相叶なり

あもま 女童

よのり人るるや 女事うらるれたらとて双地とら  
むのむ中をうけ季  
あもま お母がまてし  
ひいよとと 駒<sup>ウマ</sup>のまうけなり  
中ふあうまうと 冥途<sup>マイト</sup>とて鬼<sup>オニ</sup>お交<sup>マシ</sup>し思ひあは  
まぬしとて 蕉の系へびのつんと事  
あもまのま 白の衣  
甲<sup>カサ</sup>のより 蕉  
ましはやあ 蕉と  
まのつと <sup>ギョウギホサツ</sup> 基<sup>キ</sup>寄<sup>ヨ</sup>れあ 山<sup>ヤマ</sup>きのがうくと<sup>ツツ</sup>蛸<sup>カサ</sup>群<sup>グン</sup>をけ  
ハ父のともそ母のともをわらふ

長夜園チヤウヤクエンの中ナカに鳥トリが鳴なくはうれうれししみのりのりのり

ことあることある一一びび 何なにとも不ふ可か可か懐懐

たたら 夕ゆふ乃の子こ

髪かみ々々六む毛けややく 若わかき皆みな如ごとくごとくく

ううれれをを一一とと だだららねねままののれれとと一一とと

鳥トリ羽は玉たまの目めの意いののここををるるててすすややままんん

漏ろうららなり 園エン項キョウ 洗せん師し乃の名な

ふふいいままをを 不ふ定てい也や

ももれれももも 心ココロ形かたちああららううりり流ながりりここららりり

志しととららややううままををりり 何なにととらら一一くく 志し申まを

如ごとくごとくく一一とと一一ははとと不ふ成じやうととんんそそのの朋とも也や

ああくくややととふ 赤アカ子こををららいいみみららくくも

ううららしし人ひと 才さい流りゅうままくくみみああささとと二に人にんれれじ

ととももかかきき人ひとととみみ人ひと乃の中なかの形かたちままくくももいいああくくととや

かかららいいり 出家しゅつが乃の時ときもも未み了りやうととううららももううててむむの

一一ののせせととなり

尺しゃくの建たてかかと 皆みなくくの用もちををみみてて云いははるる也や

わわりり上あれ 僧そう部ぶ乃の衣え如ごとくごとくく也や

ああるるんん三さんののいいちちうう

後ルシキ轉マシ三さん果くわ中ちゆう忍にん毫ご不ふ能にや勤きん身しん思しへへををるるふふ美み報ほう忍にん若じやく

たたららししくく 不ふ能にや清せいとと云いははるるてて親おやふふのの中なかををもも出だすす

志しととらら物ものとと思しひひのの言ことば也や

とこおせきすへくも 皆尼よ成るすれよゆらむあり  
—とうれ—えとなり

あまのとういりる 佛の字 まよ不入

ふふめつこ 世上れ嫁娶なりとあり—と思さうわ—きや

お母とれ—る 髪れすそ乃みされ—る

素へ信部つうき路あゆみなり

と—ふあ—て 奥板よ入て也

なき袖おき 今又世をすまはるこ ちか—びの心平

まをきて風雜柔 ついとなり祝お向きてなりひよ

人おつ—ふと思ひあ—れし

おきり—とあ 回心 一生男あひ

詞あおねる—すうとま

暮ら紙くき けをの岸 望を尼—とりなりて我も道

いとれこさんとがり

まい—きも ちかお家るれもあ心安て也

今つちもや尼—り 歌れを無曲表なりとあり—

うは—りえ—らひん

ひ—うあ ち響悉 亦—りを字来をを返うりなる心也

りまう—して 女お尼書なを—してちか—もせを—とて也

のらちあまの 山の産まれぬ新—とてをさ—るま—りひ

—首丸—ち

あ—して ち—い—る前を退出せり

三十一  
四十一  
お尋ねは丁 中一宮と同所産の由也

しつらひ年と 佛の去<sup>ツケ</sup>りし山終<sup>ハシ</sup>りれ破<sup>ヤブ</sup>る

と中一宮へ至

お尋ねのしと 希<sup>ミ</sup>き まんなる事<sup>コト</sup>となり

お尋ねのしと 大なる所<sup>トコロ</sup>にそあはれ物<sup>モノ</sup>なとあるとそ中一宮

とこのせ<sup>セ</sup>事<sup>コト</sup>成<sup>ナ</sup>り中一宮へ至

それいよあへん 自習出家<sup>ジギョウ</sup>此<sup>コノ</sup>事<sup>コト</sup>成<sup>ナ</sup>り

中一宮の 妹<sup>イモ</sup>れ女<sup>メ</sup>とお尋ねひて養<sup>ヤシ</sup>と也

今を志<sup>シ</sup>されるん 此<sup>コノ</sup>存<sup>ゾン</sup>念<sup>ネン</sup>あらんと小宰<sup>コノサニ</sup>お僧<sup>ソウ</sup>部<sup>ブ</sup>ととふ也

さよものころひ 定<sup>サ</sup>て妹<sup>イモ</sup>をそお尋ねひつらんとも

公案<sup>コウアン</sup>ころえ けり案<sup>アン</sup>を尋<sup>ヒ</sup>ねると也

お尋ねのなりより 法<sup>ホウ</sup>女<sup>ニョ</sup>成<sup>ナ</sup>佛<sup>ブツ</sup>の事<sup>コト</sup>

れまへなる 小宰<sup>コノサニ</sup>相<sup>サウ</sup>

あね志<sup>シ</sup>のけし人<sup>ヒト</sup> 中一宮<sup>ナカノサニ</sup>志<sup>シ</sup>れけし人<sup>ヒト</sup>なり

お尋ねのころ 彼<sup>カノ</sup>の起<sup>キ</sup>歎<sup>ソ</sup>もそまへお尋ねひつらんとも

人<sup>ヒト</sup>をそ志<sup>シ</sup>ると僧<sup>ソウ</sup>部<sup>ブ</sup>のめり中一宮へ至

事<sup>コト</sup>成<sup>ナ</sup>る 事<sup>コト</sup>成<sup>ナ</sup>り

まへにれ中一宮 明<sup>アキラ</sup>る中一宮

この人<sup>ヒト</sup>をそ 小<sup>コ</sup>さいやうへり

さけしやも 必<sup>カナラ</sup>定<sup>サ</sup>と不<sup>フ</sup>定<sup>サ</sup>はつと也

お尋ねやそお尋ねる 的<sup>テキ</sup>の中<sup>ノ</sup>の由<sup>ユ</sup>

乃<sup>ソノ</sup>志<sup>シ</sup>ひと 法<sup>ホウ</sup>合<sup>カ</sup>もなりと也

ちりるに袖小 と 夢のやまてれをきなり

ちりるむの世乃理コトナリを思ひとりぬ人かこの海ふもろ

りく思ひぬふむむやゆし自火乃心多し人とかり

兼れうもふりあろ トウニシヨク 凌園妾と顔カシ多ハシ如スチ花ハ念スチ物カ多カ

白氏文集 イキチ け詩を志忍のうすふくく成云く今袖裡

乃今イキチの事より乃乃人里 凌園妾を惟一人すてらん

く妃ヒをみさくき城守シヤク俊シヤクの命イキチより力上也

松マツとん小 松門マツカド曉アカサキ到キ月ツキ徘徊ハシクワイヌ 白氏文集 海内ウチノウミがうん月

あこよりへ 日ヒてふくそひの月れめくる所也

凌園妾同詩

ひねりすに 凌園妾ニガク拍城ヒヨモスニ終日セウジツ 松門マツカド詩也

あつち乃小燈よ燈紗トウサの凌園妾ニガク一ヒト人ヒト也

山ヤマ中ナカを 出家イケなすくろお涙をねくさあ袖スズメとがり

け乃乃こに 僧ソウ都トをともぬぬふとも

進シメれまこ ヒナなるむの帯の人をけゆくみぬらぬ

いささそ 中ナカお詠

まうしれあ 尼子ニゴよまうししれもこせたるま後て

かひひとまらりぬお使ツケ中ナカと思へもうれ所へと也

あつ人もあ りこれカス女メもなく又あつち人ヒト尼子ニゴ成結ナツムスと也

又重マタの扇アヒ 三重ミエ 又重マタ回マワうまわうよそ 又重マタりきた

秋アキの扇アヒをみ カミか髪カミを ヒ髪カミを

くの志シころん 中ナカお乃ノ尼ニよあ ヒか髪カミを

ユダシ  
油のしかり

よの川終 中お詞

まじりて此 中お乃ま人れお方 世乃つ終のさへて

まほありん<sup>ハカリ</sup>と也此世家るれハもやお守も不<sup>カレシ</sup>守と申

將乃詞

りてり来むがそり 尼お詞まかりし世の事とらり

あの尼老も 中おのむ半習と別てちのまのうとつと也

為さあそあへえ 雅も半習とそ為終とぬしとかり

ひのねもむあ ちかりひむたりひはあ終るると也

大しこの方 中おお家そ世上れさしひなれた久<sup>ニ</sup>我ら

とといひこののとうまとなり

いとよよ 方乃世事はるまなり

くら木かとの 死<sup>シクワイ</sup>灰 橋<sup>カウホク</sup>木 括<sup>カシ</sup>らる心也 括<sup>クチ</sup>らる木の

あしくむむかしてとまむ

人よを 慈 白 母乃とらりなり

春のちるも つゆくともむれとあさみしなり

まに三若野の山をあめ

あしそ海やふ 白れそ海ま<sup>ミヤ</sup>く旅の雪<sup>ユキ</sup>けれお乃ま

りま<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>あ 白習 下白 面白<sup>ニ</sup>なり

山里の舞 心明也

おぬりま方 てなるむの別<sup>ハ</sup>ら<sup>ニ</sup>新<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>お人<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ふ<sup>ニ</sup>と

尼<sup>ニ</sup>おれためとなり

よぢひしと ぬぢあゝぬ春や若のまあゝぬ我力うと  
つそりとの力うて

白乃しきりるよや ぬぢるや白ふへむれきとらるる

庭とや ぬのさるるきり白乃きしとふ梅の花とそ

今朝はむける

ぬくとり月し 花のりこちておれもらぬ花也

神おけりよ 若の人をみしぬよ白ひらあるやうるはと

蒸れる事と思ひ人ま心ふ成るるぬれや流してを白

へ虫心ひま一なり

何事りの去年 紀守の同

かけくしき 親母かけく同母の尼へまて云詞

ひこちのおお 花ね 尚書院きうふ舟乃まのふと

前官別に也

ひとうとひんし 純吉の妹のひこちのお方とまら

いま此つち 大尼ひひこちのおおとまらうけ者て對面

ありぬく成流るるとなり

女れ志やうろく 織て戸のうきんぬふこととこかくへ

兼らせんぬれれてと浮船の一周忌乃用とと也

ほくく かとむと 姉恋れ歎ふ人蒸流出家をま度れ

おしめをなり

ますのねそろ 双比

あやしやう 二人なりうう治りそうせぬ人ふとて也



うへよれ不<sup>レ</sup>まて 流れ色<sup>ら</sup>り敷<sup>ふ</sup>れ不<sup>レ</sup>まてと也

み一人の身 蒸<sup>ア</sup>落<sup>ル</sup>ふ婦<sup>メ</sup>と浮<sup>ウ</sup>舟<sup>フネ</sup>となり

つら乃<sup>ノ</sup>所<sup>ト</sup>も 橋<sup>セウラン</sup>園<sup>エン</sup>

たち辰<sup>ツチ</sup>敷<sup>シ</sup>とのぬへと 敷<sup>シ</sup>とをい<sup>ハ</sup>つ<sup>ク</sup>とのぬへと

志<sup>シ</sup>うとくまて 音<sup>ネ</sup>流<sup>リウ</sup>

あの世<sup>ヨ</sup>乃<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>やもおがえす<sup>ウ</sup>

ひ祓<sup>ハラ</sup>らせ ひね<sup>ヒネ</sup>里<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>邊<sup>ヘ</sup>てぬ<sup>ハ</sup>や

くれる針<sup>ハリ</sup>よ<sup>ヨ</sup>様<sup>サマ</sup> あや紋<sup>モン</sup>を<sup>ヲ</sup>様<sup>サマ</sup>

あ<sup>ハ</sup>下<sup>カ</sup>衣<sup>イ</sup>衣<sup>イ</sup> 衣<sup>イ</sup>習<sup>シユ</sup> 面<sup>オモ</sup>白<sup>シロ</sup>白<sup>シロ</sup>方<sup>カタ</sup> ましを<sup>ヲ</sup>の<sup>ノ</sup>形<sup>カタ</sup>見<sup>ミ</sup>れ<sup>レ</sup>神<sup>カミ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ハ</sup>海<sup>ウミ</sup>

ま<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>思<sup>シ</sup>ん<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>海<sup>ウミ</sup>も

不<sup>レ</sup>入<sup>ル</sup>ぬ ひ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>乃<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>た<sup>タ</sup>め<sup>メ</sup>との<sup>ノ</sup>衣<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>れ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>つ<sup>ク</sup>て<sup>ハ</sup>志<sup>シ</sup>の

とんとなり

いと<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も 衣<sup>イ</sup>習<sup>シユ</sup>無<sup>ク</sup>泣<sup>ナク</sup>ふも<sup>ハ</sup>尼<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>寺<sup>テ</sup>合<sup>カ</sup>て<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま

ま<sup>ハ</sup>陣<sup>チン</sup>じ<sup>ジ</sup>志<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぢ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>なり

色<sup>イロ</sup>け<sup>ケ</sup>の<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup> 衣<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>め<sup>メ</sup>り<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>乃<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>衣<sup>イ</sup>出<sup>デ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>と

ひ<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>一人<sup>ヒト</sup> 我<sup>ワ</sup>ひ<sup>ハ</sup>を<sup>ヲ</sup>め<sup>メ</sup>を<sup>ヲ</sup>思<sup>シ</sup>お<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也

志<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ハ</sup>つ<sup>ク</sup>ひ<sup>ハ</sup> ぬ<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>悉<sup>シツ</sup>れ<sup>ハ</sup>母<sup>ハハ</sup>も<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>つ<sup>ク</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>なり

つ<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>娘<sup>メ</sup>乃<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>も<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也

み<sup>ハ</sup>程<sup>ハ</sup>そ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>詞<sup>シ</sup>我<sup>ワ</sup>お<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>衣<sup>イ</sup>母<sup>ハハ</sup>も<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也

せ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup> お<sup>ハ</sup>監<sup>カン</sup>煮<sup>シ</sup> ぬ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>元<sup>ゲン</sup>服<sup>フク</sup>

人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>そ<sup>ハ</sup>一<sup>ヒト</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>衣<sup>イ</sup>母<sup>ハハ</sup>も<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也

衣<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>さ<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup> 衣<sup>イ</sup>つ<sup>ク</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>人<sup>ヒト</sup>う<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>なり

さつめ比 字法へ周忌る也

道志ん 八文の道心とすく先治ひ一なりと思とる事

於うらけくま 打けいとうせんとおぢいといひけり

意れ心申

人をるれり

志のある 恐ろしくゆへあつんをいひま意れ又自文

のためなり

こしく 意也

き海くなら 依事た依人ふふれりなりとあまを海

ろそ教は初と也

ま乃やませ 申す

つ連も又 意乃不申一ゆへ中文の注はぬもむと也

実て後も 今小宰相詞をきて後れつうま一とむら一

向人ふりりなり

うけくの 現れ人の恐ふ事り人かこれなり一にてあ

多人の絶れ事一はとけり

ふへにらん 尼り一感しとる事

さかの抄ひり 自文そとやとて一のて申一文へ意ふ

その好いそと一しよふよやなり

まものつらひ 意の心白ふまの於も習れ悉ふゆつ

らひ好もといみくねりふともる人となをわりのひ

あ一てわさる事と也

うらし人よ づのま実乃心子成後世乃揚けり成た  
のこてやまんとけり

きけりつひと 美泉也日本紀 伊弉册尊のまつこ

ろへ人れを陽邪れやふらひぬふ事みそと

うれを明なるのまけひぬけふ比とけり

風のまれ連 地獄れけのがを風乃ふきれと云

おひみそけり句 けれまをすやあつりけり

を思ひけり

おらけよま

今をありましくの振舞申文へり

ま乃けり成 白ふへれ振とや

あつてうかま ぼ在せ成れ甚そ不云とあつてんと

お海きりあけり

まこもんけりなるまをり 白乃好交申くはれと云

ひうく 白れけ好まうまと申一交や一ぬり

つとけまき 申文の所心

月こつ乃やうり 業障縁日

やう佛 中堂へ参詣するすゝをい佛縁へと思ふ

うのせうと 淳兄弟

それ入く うま舟れ母兄弟がこいせりけりけり

おみん着乃心ら 着のうれりけりけり

けりけり ちうと淳舟と見付てもあやし人かこよ

さしあがりかたしきりあつと又きりかたり

巻序格 松愛と志詞又ヶ所小あり

巻必河海と総抄小用之

たまり

世中七巻乃つてこれ序格のたはりけく物としよう思へ  
 と云ひうまひに別乃ひなり一巻中より序格シヨクのりも里カ  
 里とてり物也 山とへたて水をとるたのりも格シヨクとて  
 浚るれん 定家サだノの 春乃ねた巻序格と総して成る  
 里のねく撰書れを 只巻つり也い物短一がに以詞と  
 又以シテ序の冠号クワンガウありは巻必そむを以て名付る也  
 莊子逍遙格セウヨウカク篇あり せうよう知ありい也 格の字ハ  
 ころそく字 巻とけつりまよりぬるうも格とさへ  
 ころま ころ格の事 伊弉諾イサノ 伊弉册イサノミヨト 天カは格れ

下りてみればまゝなり一経ひて陰陽を以て例國  
 とせし我國の婚せうなり一の詞をうらむ心ありく  
 みくまゝなりあゝされん 爰乃ほ擣と号する事一才  
 一之爰ハも習志の一はれ同さなり一爰のこゝ一或そ  
 陰奥に成て下れは具一なり又ひちちり下り部  
 には下りてもこそまゝあなこふらうひす活ましくも男  
 とかけしより小野よりいれりまてとゆめなり  
 甚下りの又乃此事中もよまひれり末行くも  
 世始め爰徳成一教もい巻りありあり  
 又世向第物如爰 生子寓言よおけるり 烟蝶の爰よ  
 生死の爰とありあり 桐壺諺尺委 毛詩序圖睢を后妃之

海也風始也 比詞桐壺をよむる 耶耶釋爰

爰之事經文且如い河小森

天台 処世如大爰 涅槃經 生死至貴

於如爰說 大國光經 始と衆生の中成佛生死

涅槃於此也 唯識論 未得ふ受者處者中 念佛禪解生死長夜

一各奉名はの師中ものよへまゝなり 梅名院敷内説

乃歳を次てまて今ゆめもくもまゝなり 一ア皆爰と幻

るるに畢竟は肉體のまなきも世も皆爰幻と可見於河海

かゝ紙みて随町人隣尺さそ可給うらん丸

いそ甚女七才巻の末々也子習をそ夏迄とみしる

さいせきせ 毎月八日 中一雲くりり

所者町のらひ 北坂付也

素小らうくしそ 素小可給者もる丸内り又ちりや

していしんとの心あしそふれにそとそま内

ふとま心也

それりそ 侄処 夕若なこれわひひひーおり

アしりそと懸置るや

もうきあそめ 粉煮りうとくある同よ所才子に

取ると老お得せるさあけりり

あゝいーるひる 甚のなりある一給あるとかこ

い母なりあると也 取し 恨心丸

老が 老氣 又老病丸

たすとの 殯殿 見葬礼記式 殯

介棺忘る人そ甚也殯殿しそ穢生しそるそ子

やう治のみそ教はみこ 仁徳天皇 ころあひきりて指を

の給ひ一奉 相叶へるの 不用祝なりそ受持乃ため

書入 天稚産薨逝乃後下昭姫天妾をそけくそ殯

大上天皇持統崩 又續日本紀云大宝二年辛酉日殯西殿

なとあり或を魂殿とも云

礼記云殯云と云

聖徳太子令<sup>メ</sup>入定法<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>教<sup>ヲ</sup>を授<sup>ケ</sup>むといはるるを回事<sup>ト</sup>いふ  
若<sup>シ</sup>呂<sup>ノ</sup>后<sup>ノ</sup> 古<sup>ノ</sup>祖<sup>ノ</sup>后<sup>ノ</sup>の事<sup>ヲ</sup>をいふ也<sup>ナリ</sup> 後<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>の<sup>キ</sup>山<sup>ノ</sup>漢<sup>ノ</sup>と教<sup>ヲ</sup>百年<sup>ト</sup>  
此<sup>レ</sup>後<sup>ノ</sup>秦<sup>ノ</sup>眉<sup>ノ</sup>の堂<sup>ノ</sup>室<sup>ト</sup>とく<sup>ニ</sup>ひ<sup>ク</sup>た<sup>メ</sup>り<sup>テ</sup>始<sup>メ</sup>れ<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup> 小<sup>ノ</sup>丁<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>  
犯<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup> 後漢書<sup>ノ</sup>の<sup>見</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ト</sup>  
唐<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>も<sup>テ</sup>死<sup>ス</sup>人<sup>レ</sup>ハ<sup>ハ</sup>小<sup>ノ</sup>玉<sup>ヲ</sup>を<sup>含</sup>し<sup>メ</sup>て<sup>ウ</sup>り<sup>ト</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>  
今<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>も<sup>テ</sup>形<sup>ノ</sup>像<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>爛<sup>ト</sup>壞<sup>ス</sup>云<sup>フ</sup> 我<sup>レ</sup>等<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>を<sup>帝</sup>崩<sup>レ</sup>死<sup>ス</sup>時<sup>ノ</sup>  
玉<sup>ヲ</sup>を<sup>含</sup>せ<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>ら<sup>シ</sup>と<sup>ス</sup>

てーぐー 弟<sup>テ</sup>子<sup>シ</sup>也<sup>ナリ</sup> 女<sup>メ</sup>け<sup>テ</sup>乃<sup>レ</sup>け<sup>テ</sup>り<sup>ナリ</sup>  
てんぐー 夫<sup>ノ</sup>物<sup>ト</sup>と<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>を<sup>見</sup>れ<sup>ル</sup>必<sup>ズ</sup>お<sup>お</sup>用<sup>ハ</sup>ぶ<sup>所</sup>を<sup>示</sup>  
云<sup>フ</sup>魔<sup>ノ</sup>几<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

三月<sup>ニ</sup>ツキ<sup>キ</sup> 四<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>相<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>氣<sup>ヲ</sup>よ<sup>て</sup>と<sup>し</sup>り<sup>ナリ</sup>

あてようあるれ まてのあはれと心なううるまんと思  
ひ一人乃るするれをまれむらといけ詞まう巻乃るるま  
やくれりりり 傳部れい

このせよん もやなき人と成るるを尼<sup>ニ</sup>お<sup>な</sup>り<sup>た</sup>れ<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>  
傳部<sup>ノ</sup>の<sup>罪</sup>と<sup>なり</sup>ひ<sup>て</sup>也<sup>ナリ</sup> 吾<sup>レ</sup>を<sup>悪</sup>む<sup>家</sup>よ<sup>る</sup>一<sup>と</sup>る<sup>事</sup>  
誤<sup>ト</sup>也<sup>ナリ</sup> 西<sup>ノ</sup>靈<sup>ノ</sup>入<sup>リ</sup>り<sup>て</sup>一<sup>と</sup>り<sup>た</sup>め<sup>に</sup>ひ<sup>り</sup>り<sup>る</sup>も<sup>も</sup>世<sup>ノ</sup>  
契<sup>リ</sup>と<sup>は</sup>ち<sup>や</sup>り<sup>ナリ</sup>

わうんこさり 王<sup>ノ</sup>孫<sup>ト</sup>  
つものりめて 世<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>一<sup>と</sup>ら<sup>る</sup>き<sup>は</sup>安<sup>ト</sup>と<sup>る</sup>ん  
月<sup>ノ</sup>は<sup>お</sup>く<sup>ま</sup>せ 尼<sup>ノ</sup>老<sup>ノ</sup>の<sup>り</sup>く<sup>く</sup>事<sup>ト</sup>な<sup>れ</sup>た<sup>い</sup>つ<sup>く</sup>母<sup>ト</sup>  
と<sup>し</sup>せん<sup>事</sup>の<sup>り</sup>と<sup>なり</sup>

くちちをり魚 僧教乃ひ出家して男子入り故悔の心ま  
かしくひや況イハヤ女子やハカイノツミ被戒ハカイノツミ罪いりしと心る也 戒除故  
悔れまきりき事トキ脱きり故ゆる物と意のさへたきを  
あらしんと思てやしぬ人ま

ぬりまもり こころもや

はまろへ 我サイレキヤ罪墮サイレキヤりりなりしと心る也

三条文 廿三文

くくのりクニイ 官位ハ教ホツレンじの婦サメケと思シユセタる珠勝 ありりし詞

くくくくくくくくくく

大やありしりりハ 主人のそ又クニヤク別親詞大わけしと心る  
及中一してさしめると可シむぬ義詞シけくささりりし事也

中一をとり 小型

すく後シなりやう 小玉は僧部シの詞 身習シを志るなり

あるとシ巻を僧部シれ興シしとの言

阿シの山 地シ名シ所シ

やと水乃がくろ 寺シ法シ善シを思シひ出シたるうし也 但シ寺シ法シ

九月より三月までありいかにアガキ強シうれまをを立シつくと

やもれ 瞬シ視シ 寺シ法シ川シは雲シの事シ家シけしとをみま

みりと相シ経シふあはう人を建シ言シふも付シても不可シ考シる

岩シれ折シるより しく昔シよあ家シ乃シ折シるよりシひのむの山

と下シ人の折シ乃シつまよりシ又シ申シる折シる

ひまわり 川シ下シ海シ葉シ



あつた山ち 自習の心 菩提へ意乃は出の時前此群

又此日 例の意乃心ゆるきなり

かよる三人 誓うて也  
りとうとのあが 自習を好むれとみこもむじりたる  
をいと 唯称 後のまれらりては快あらうふ

ころなり

りいへるを おまきふと也

こまに 尼云のころなり

おやうとをき よそく一のあつぬあをば後しと也

けさあつお 僧部ノ文言

すけと 出家とよむ

佛のせせうふ 仏のつれとめとなり

いひくをせん せんしかなきなりと也

あいつり 心比観経曰若吾男子及吾女人發阿耨多羅

三藐三菩提心一日一夜出家修道二百五十劫不墮惡趣者

若善處受勝妙樂遇善知識永不退轉得值諸佛受其授記

坐金剛座成正覺道

しとくをき 悉くする事

字治中も ひらち所をてを回ふを後母するものつれとよ

治へとましつらそ也自あせしこの時おのひび

童くち

うらおんえ 字亦も能くると尼ひれくろそそみてなり

けふへたてありと 浮舟の尼へ此詞

又あててぞん 面白ておもしろなり

まのうごころ 前巻ふまてう浪まききり乃キヤウ終あり

うへし人まき

ひらりもわー 母の事

僧部めくはひー 甚

いとしいこころれ 尼毛れこころ

かろくくーえ 甚れりや尼詞

い子もあまきく さまやあまきまづれと云家まき不用

又傳り うかたの文

そごやあううわくー ワラハ 巻をみてわくろまきこころいせ

けさうの人花見後こそあううの人とりよこ

お海しへこころ 甚詞

あーすま入 尼甚や

あうれ みるる文と

まほくつこ 自水又出家成すつこあうしんとさる

ハ僧教へニはあへとや

わさけううりこりーま 我も出家シあけううお又度とや

流の師と 甚 いまき流乃師とのことと云詞入て可見似

念ぬ事と僧衆乃志心へうー ねらると諸海よふそ平まの

おのひうー心のまじいなり

あの人を 叶がれの文と

けふへたそありと 浮舟乃尼へれ詞

又あへてぞん 面白ておそくなり

まのつことろ 前巻ふまへてう浪まききり乃キヤウ終あり

らんしんま

ひらりもわー 母の事

僧部めくはひー 甚

つとつといとくれ 尼君れこと

かろくーえ 甚れりや尼詞

い子もあまきく さまやあまきまづれと云家ま之不用

又傳る うかたの文

そごやあううらうー ワラハ 巻をみてわらうまこふいや

あせう 思ひれんや

お海しへことく 甚詞

あーすまへん 尼甚や

あーれ りかる文と

まほくつこ 自水又出家成すつとあふんことさる

ハ僧教へニはあへとや

つ連けううりことりーま 我も出家シあけううお又度とや

流の師と 甚 いまき流乃師とのことと云詞入て可身似

念ぬ事と僧衆乃志心へうー ねらと諸徳よふま平まの

おのひうー心のまじつなり

あの人を 思ひれん文と

とてけりて 小巻も捨てぬ人となる。

つゝとて とうとののまじりておれとや

あつしは君 尼君 小巻へ抱くことや

今もしやいゝけりて ぬれ小巻に並しを君とや

あしてたらむちとや

うつゝこれた 小巻は君を尼君の浮舟へうつし短也

とてゆくおれけりなき 尼君は小巻へけり

世のそふりふ <sup>コカハ</sup> 捲川を世のたの山がれ若びあつて

もるまゝいふ風吹くも又といひぬ人とや山風あつて

山風不夜 山風吹くも又といひぬ人とや山風あつて

しとてと心とやあつて

折こもて 離る思ふ言はれなきを捨てたるあつて

とれうも望をこもて小巻あつてす人たるのとて我心

れんはゆりて言はれぬしとて人たるひと思ふ也

かじゆれとて ちよん無之 ねんくく書ぬとて何

乃巻も妙なり かなをあやりのまゝ無曲 <sup>キタ</sup> 云々

112

三  
美

中  
嶋  
内  
藏  
丞

貞  
宜



三  
日  
行

本  
午  
行

三  
日  
行

三  
日  
行

三  
日  
行

3,000

